山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集

釈迦堂 I

山梨県東八代郡一宮町塚越北A地区
山梨県東八代郡一宮町塚越北B地区
山梨県東山梨郡勝沼町釈迦堂地区

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1986. 3.
山梨県教育委員会
日本道路公団

釈迦堂 I

山梨県東八代郡一宮町塚越北A地区
山梨県東八代郡一宮町塚越北B地区
山梨県東山梨郡勝沼町釈迦堂地区

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1986. 3.
山梨県教育委員会
日本道路公団

序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち、山梨県東山梨郡勝沼町から東八代郡一宮町にかけて発掘調査された釈迦堂遺跡群のうち、一宮町塚越北Ａ地区、塚越北Ｂ地区、勝沼町釈迦堂地区について、調査の結果をまとめたものであります。

山梨県内における中央自動車道建設に伴う事前発掘は、1966年度の富士吉田線大月市宮谷遺跡に始まり、1980・81両年度の西宮線釈迦堂遺跡群の発掘をもって完了し、1982年11月には中央自動車道西宮線が全線にわたって開通いたしました。

釈迦堂遺跡群は前記事前発掘の掉尾を飾るにふさわしい大遺跡群で、発掘調査の対象となったのは、京戸川扇状地上に展開される34か所の遺跡のうち、５か所、約２万㎡に達する広大な地域であります。遺構や遺物は極めて豊富で、年代的にも先土器時代から縄文時代の早期～晩期の各時代、古墳時代、さらに平安時代に及びますが、質量ともに卓越するのは縄文時代であります。多数の住居址が発見され、おびただしい数の土器や石器が出土いたしましたが、特に中期の環状集落の遺構が検出されたことや、一千体を越える土偶が発見されたことなどで注目を受けました。

釈迦堂遺跡群は、発掘調査に参加した方々が延べ２万人以上にも及んだという大規模な遺跡であり、そのため発掘の当初から学界はもとより、広く一般の方々の関心を引き、埋蔵文化財に対する県民の認識はこれを契機に飛躍的に高まり、県もまた考古博物館の早期建設を実現して県民の要望に応えました。館が開館１周年を記念して“土偶展。を開催したほか、調査の結果は部分的にいろいろな方法で公開せられておりますが、公式の調査報告書の早期刊行が、県内外の研究者から強く要望せられて参りました。当埋蔵文化財センターにおいて鋭意整理を加えました結果、このたび全３冊中の第１分冊として、前記３地区の調査の成果が公刊の運びとなった次第であります。

３地区中、遺構・遺物の最も多いのは、一宮町千米寺字塚越北、京戸川扇状地の扇央部に位置する塚越北Ａ地区であります。調査の結果、先土器時代の包含層、縄文時代早期末～前期初頭の住居址と土坑、前期後半の住居址と土坑、中期中葉の住居址と土坑、後期初頭の敷石遺構、さらに古墳時代の古墳１基等が検出され、これらからは大量の石器・土器・土偶等が出土いたしました。例えば、先土器時代の包含層からは、ナイフ形石器15点をはじめ槍先形尖頭器・掻器・石錐、それに剝片多数と石核とを出土し、県の先土器文化の研究に貴重な１ページを加えることができました。また縄文時代では、各期について慎重に土器の編年を試み、生活の状況、集落の形態や変遷など、重要な事実の解明に努めました。

次に塚越北Ｂ地区は、Ａ地区と谷を隔てた台地上に位置し、縄文時代早期の住居址、中期の住居址と土坑、後期の住居址等が検出され、また釈迦堂地区では、鉄製人形を用いた祭祀遺構と推定される土坑１基が発見されました。

本報告書の刊行によって、縄文時代を中心とする釈迦堂遺跡群の重要な部分が、はじめて詳細かつ組織的に解明され、学界に貴重な資料を提供することができました。引続き刊行を予定しております三口神平地区と野呂原地区の報告書と相まって、この大遺跡群の全容が明らかになる日もごく近い将来となりました。本報告書がより多くの方々にご利用いただけますよう念じてやみません。

本報告書が刊行されるまでには、実に多くの方々のお世話になりました。直接発掘作業に参加せられた方々をはじめとして、大量の出土品を短期間に迅速かつ精確に整理せられた方々、専門の事項について種々ご教示、ご指導を賜わったり、玉稿をお寄せいただいた方々など、ご参加・ご協力を賜わった方々は万をもって数えるの多数に及びました。また関係各機関や地元地区の方々からは、終始多大のご援助・ご協力を賜わり、特に一宮町からは施設のご提供を受け、整理作業を円滑に推進することができました。

末筆ながら、お世話になった方々に、改めて深甚の謝意を表します。

1986年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯　貝　正　義

例　　言

1．遺跡の呼称は、釈迦堂遺跡群とするのがよいが、一般に釈迦堂遺跡とも釈迦堂とも呼びならわされているので、煩雑さを避け、釈迦堂とした。

2．本書は山梨県東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町に所在する釈迦堂遺跡群のうち、一宮町塚越北A地区、塚越北B地区、勝沼町釈迦堂地区の報告書である。

3．調査は日本道路公団第二建設局から、山梨県教育委員会が委託を受け、1980年2月8日から1981年11月15日まで実施したものである。

4．発掘調査は田代　孝、小野正文が担当し、調査員として、一宮町教育委員会の猪股喜彦、勝沼町教育委員会の室伏　徹が加わった。また出土品の整理、報告書の作成は小野が担当した。

5．調査区域は中央自動車道のセンター杭のうち2点を延長して、南側をS区、北側をN区として、それぞれ100mごとにⅠ～Ⅴ区まで設定した。

6．調査区の名称は、S－Ⅰ区が東八代郡一宮町塚越北A地区、S－Ⅱ区が同郡塚越北B地区、N－Ⅱ区が東山梨郡勝沼町釈迦堂地区、S－Ⅲ、S－Ⅳ、N－Ⅲ、N－Ⅳ区が勝沼町三口神平地区、S－Ⅴ区が一宮町野呂原地区となる。野呂原地区は一宮町の飛地である。

7．本書の遺構写真は田代　孝、小野正文が、遺物写真は佐野博基、小野が担当した。

8．本書の展開写真は小川忠博氏によるものである。

9．本書土器実測図の一部は写真実測を中央航業株式会社に委託した。

10．本書の執筆は、S－Ⅰ区第1章第1節と第9章第7節、N－Ⅱ区第3節を田代　孝、S－Ⅰ区第2章と第9章第1節を保坂康夫が担当し、他を小野正文が担当した。付編は、渡辺誠先生、小池裕子先生、金山喜昭氏にそれぞれお願いした。

11．調査にあたっては、日本道路公団をはじめ、一宮町、勝沼町等の関係機関から、多大の援助があった。また整理作業においては一宮町より施設の提供を受けた。合せて感謝申しあげる。

12．発掘調査から本書の作成に至るまで、実に100余名の方々から、多大の御教示、御指導を賜わった。本来なら御芳名を記し、謝意を表すべきであるが、別の方法をとりたい。

13．発掘調査にあたって、地元の千米寺地区、石地区、藤井地区の御協力を得た。また発掘作業員として、上記地区をはじめとする多数の方々の御協力があった。御芳名を記すべきであるが、延べ2万人以上という人名のため、やむなく断念した。

凡　　例

1．本書の図面は、住居址がS－Ⅰ区で（1：80）、S－Ⅱ区で（1：60）土坑が（1：40）である。

2．土器の実測図は（1：6）、拓本は（1：3）を原則としてあるが、例外のものは、それぞれ図に縮尺を示した。

3．方位は特に図示していないものはすべて上が北である。

4．土器の実測図は従来の方法を用い、土器の拓影図と鉄製人形を第1角法とし、その他実測図は原則として、第3角法を用いた。

5．土器の断面のスクリーントーンは、繊維の含有を示す。

6．土偶の割れ口のスクリーントーンは第253図の凡例のとおりである。

7．稜磨石、玉石は発掘時の呼称を踏襲したが、後日訂正を要する暫定的なものである。

8．SBは住居址、SKは土坑、SXは不明遺構の記号である。

9．第3章の縄文時代早期の中に一部前期初頭のものも含めている。

目　　次

釈迦堂　S－Ⅰ区

第 1 章　調査とその概要

第 1 節　調査の経過……3
第 2 節　調査組織……3
第 3 節　釈迦堂遺跡の位置……4
第 4 節　調査の概要……11

第 2 章　先土器時代

第 1 節　遺物の出土状況……13
第 2 節　出土石器……13
第 3 節　ま と め……16

第 3 章　縄文時代早期

第 1 節　早期の住居と出土遺物……22
第 2 節　早期の土坑出土土器……54
第 3 節　早期のグリッド出土土器……55

第 4 章　縄文時代前期

第 1 節　前期の住居と出土遺物……90
第 2 節　前期の土坑出土土器……162
第 3 節　前期のグリッド出土土器……168

第 5 章　縄文時代中期

第 1 節　中期の住居と出土遺物……179
第 2 節　土坑群……205
第 3 節　中期の土坑出土土器……232
第 4 節　中期その他の遺構と出土土器……245
第 5 節　中期のグリッド出土土器……247

第 6 章　縄文時代後期

第 1 節　敷石遺構……254
第 2 節　後期の土坑出土土器……256
第 3 節　中期末～後期初頭のグリッド出土土器……258
第 4 節　後期中葉～晩期のグリッド出土土器……278

第 7 章　土偶およびその他の遺物

第 1 節　土偶……279
第 2 節　土器・土製品……299
第 3 節　石器・石製品……308

第 8 章　古墳時代

第 1 節　釈迦堂 1 号墳…… 311
第 2 節　その他の遺物…… 320

第 9 章　ま と め

第 1 節　先土器時代…… 321
第 2 節　釈 迦堂S－Ⅰ区の土器分類…… 323
第 3 節　釈 迦堂S－Ⅰ区の遺物分布…… 331
第 4 節　釈 迦堂S－Ⅰ区の集落変遷…… 338
第 5 節　土　　偶…… 341
第 6 節　石　　器…… 343
第 7 節　釈 迦堂 号墳…… 349

第 10 章　付　　編

第 1 節　釈 迦堂Ｓ－Ⅰ区出土の貝類について…… 351
第 2 節　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区出土の骨類について…… 352
第 3 節　熱中性子放射化分析による黒曜石の産地同定について…… 353

釈迦堂　S－Ⅱ区

第 1 章　遺構と出土遺物

第 1 節　住居と出土遺物…… 3
第 2 節　土　　坑…… 32
第 3 節　土坑出土土器…… 42
第 4 節　グリッド出土土器…… 49
第 5 節　土偶・土製品・石製石…… 56

釈迦堂　N－Ⅱ区

第 1 章　奈良時代の土坑ほか

第 1 節　土坑と出土遺物…… 3
第 2 節　ま と め…… 6
第 3 節　グリッド出土の縄文土器…… 7

挿図目次

釈迦堂S－Ⅰ区挿図目次

第 1 図　釈迦堂遺跡群の位置図（山梨県）
第 2 図　釈迦堂遺跡群位置図（1／2500）
第 3 図　釈迦堂遺跡群地区図
第 4 図　釈迦堂遺跡群遺跡分布図
第 5 図　中央自動車道路線図
第 6 図　釈迦堂S－Ⅰ区・S－Ⅱ区グリッド配置図
第 7 図　釈迦堂S－Ⅰ区住居分布図
第 8 図　釈迦堂S－Ⅰ区土壙分布図
第 9 図　釈迦堂S－Ⅰ区先土器時代遺物分布図
第10図　釈迦堂S－Ⅰ区先土器時代遺物(1)
第11図　釈迦堂S－Ⅰ区先土器時代遺物(2)
第12図　釈迦堂S－Ⅰ区先土器時代遺物(3)
第13図　釈迦堂S－Ⅰ区先土器時代遺物(4)
第14図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－11
第15図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－11出土土器
第16図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－11出土石器
第17図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－13
第18図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－14
第19図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－13出土土器
第20図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－14出土土器
第21図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－14出土石器
第22図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－15出土土器
第23図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－15
第24図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－16
第25図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－16出土土器
第26図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－17・18
第27図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－17・18・19出土土器
第28図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－19
第29図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－22・25
第30図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－22出土土器
第31図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－25出土土器
第32図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－24
第33図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－26
第34図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－26出土土器
第35図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－30
第36図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－32
第37図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－30出土土器
第38図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－33
第39図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－33出土土器
第40図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－34
第41図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－35
第42図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－36
第43図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－36出土土器
第44図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－44
第45図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－44出土土器
第46図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－46
第47図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－46出土土器
第48図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－48
第49図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－48出土土器
第50図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－49
第51図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－49出土土器
第52図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－50
第53図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－50出土土器
第54図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－52
第55図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－52出土土器
第56図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－49・53
第57図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－53出土土器
第58図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－54・56
第59図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－54出土土器
第60図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－56出土土器
第61図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器
第62図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（1）
第63図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（2）
第64図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（3）
第65図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（4）
第66図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（5）
第67図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（6）
第68図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（7）
第69図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（8）
第70図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（9）
第71図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（10）
第72図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（11）
第73図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（12）
第74図　釈迦堂S－Ⅰ区早期の土器（13）

第75図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（14）
第76図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（15）
第77図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（16）
第78図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（17）
第79図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（18）
第80図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（19）
第81図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（20）
第82図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（21）
第83図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（22）
第84図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（23）
第85図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（24）
第86図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期の土器（25）
第87図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－02・03
第88図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－02出土土器（1）
第89図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－02出土土器（2）
第90図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03出土土器（1）
第91図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03出土土器（2）
第92図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03出土土器（3）
第93図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03出土土器（4）
第94図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03出土土器（5）
第95図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05
第96図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土土器（1）
第97図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土土器（2）
第98図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土土器（3）
第99図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土土器（4）
第100図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土土器（5）
第101図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土石器（1）
第102図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土石器（2）
第103図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－05出土石器（3）
第104図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06
第105図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（1）
第106図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（2）
第107図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（3）
第108図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（4）
第109図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（5）
第110図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（6）
第111図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－06出土土器（7）
第112図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－07
第113図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－07出土土器（1）
第114図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－07出土土器（2）
第115図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－08
第116図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－08出土土器
第117図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－09・27
第118図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－09出土土器（1）
第119図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－09出土土器（2）
第120図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－27出土土器
第121図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12
第122図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（1）
第123図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（2）
第124図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（3）
第125図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（4）
第126図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（5）
第127図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－12出土土器（6）
第128図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－20
第129図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－20出土土器（1）
第130図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－20出土土器（2）
第131図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－20出土石器
第132図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－21
第133図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－21出土土器
第134図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－28・39
第135図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－28出土土器
第136図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－39出土土器
第137図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－37
第138図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－37出土土器
第139図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－38
第140図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－41・42
第141図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－41・42出土土器
第142図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－43
第143図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－43出土土器（1）
第144図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－43出土土器（2）
第145図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－45
第146図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－45出土土器
第147図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－55
第148図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－55出土土器
第149図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期ＳＫ出土土器（1）
第150図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期ＳＫ出土土器（2）
第151図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期ＳＫ出土土器（3）
第152図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期ＳＫ出土土器（4）
第153図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（1）
第154図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（2）
第155図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（3）
第156図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（4）
第157図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（5）
第158図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区前期の土器（6）

第159図　釈迦堂S－Ⅰ区前期の土器（7）
第160図　釈迦堂S－Ⅰ区前期の土器（8）
第161図　釈迦堂S－Ⅰ区前期の土器（9）
第162図　釈迦堂S－Ⅰ区前期の土器（10）
第163図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－23
第164図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－23出土土器
第165図　釈迦堂S－Ⅰ区中期初頭の土器（1）
第166図　釈迦堂S－Ⅰ区中期初頭の土器（2）
第167図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－01
第168図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－01出土土器
第169図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－04
第170図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－04出土状況図
第171図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－04出土土器（1）
第172図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－04出土土器（2）
第173図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10遺物出土状況図
第174図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10
第175図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10出土土器（1）
第176図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10出土土器（2）
第177図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10出土土器（3）
第178図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－10出土石器
第179図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－29
第180図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－29出土土器
第181図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－31
第182図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－31出土土器
第183図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－40遺物出土状況図
第184図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－40出土土器（1）
第185図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－40出土土器（2）
第186図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－47
第187図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－47出土土器
第188図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－51
第189図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－51出土土器
第190図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－01・02
第191図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－04・05・06・07
第192図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－08・09・10・11・12・13・14
第193図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－15A・15B・16・17・18・19・20
第194図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－21・22・23・24・25・26・27・28
第195図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－29・30・31
第196図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－33・34・35・36・37・38・39・41・42・43
第197図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－44・45・46・47・48・49
第198図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－50・51・52・53・54・55・56・57・58
第199図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－60・65・66・67・68・69・71・72・73A・73B・73C
第200図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－74・75・76・77・79・81・82・83
第201図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－85・86・87・88・89・92・94・95
第202図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－96・97・98・99・101・102・103
第203図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－110・111・112・113・120・121・122・124・130・132・133・134・135・136・138A・139
第204図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－126・131・137・138B・139
第205図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－140・142・143・144
第206図釈迦堂S－Ⅰ区SK－145・146・147・148・149・152・154
第207図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－155・156・157・158・160・164・169
第208図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－165・172・185・186
第209図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－193・198・201・202・213・214
第210図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－216・217・218・219A・219B・219C・222・226・227
第211図　釈迦堂S－Ⅰ区SK－231・233・234・236・237・239・249・257・260
第212図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（1）
第213図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（2）
第214図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（3）
第215図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（4）
第216図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（5）
第217図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（6）
第218図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（7）
第219図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（8）
第220図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（9）
第221図　釈迦堂S－Ⅰ区SK出土土器（10）
第222図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－12上層遺構

第223図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－03上層遺構と出土土器
第224図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期の土器（１）
第225図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期の土器（２）
第226図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期の土器（３）
第227図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期の土器（４）
第228図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期の土器（５）
第229図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＸ－01
第230図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＸ－02
第231図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＸ－03
第232図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期ＳＫ出土土器（１）
第233図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期ＳＫ出土土器（２）
第234図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期末の土器（１）
第235図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期末の土器（２）
第236図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（３）
第237図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（４）
第238図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（５）
第239図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（６）
第240図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（７）
第241図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（８）
第242図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（９）
第243図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（10）
第244図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（11）
第245図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（12）
第246図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（13）
第247図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（14）
第248図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（15）
第249図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（16）
第250図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（17）
第251図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後期の土器（18）
第252図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区後・晩期の土器
第253図　土偶凡例
第254図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（１）
第255図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（２）
第256図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（３）
第257図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（４）
第258図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（５）
第259図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（６）
第260図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（７）
第261図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（８）
第262図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（９）
第263図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（10）
第264図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（11）
第265図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（12）
第266図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（13）
第267図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（14）
第268図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（15）
第269図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（16）
第270図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土偶（17）
第271図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区中期のミニチュア土器
第272図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製円盤（１）
第273図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製円盤（２）
第274図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製円盤（３）
第275図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製円盤（４）
第276図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製円盤（５）
第277図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土笛
第278図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土製品
第279図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石製品（１）
第280図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石製品（２）
第281図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石製品（３）
第282図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石製品（４）
第283図　一宮町古墳分布図（一宮町誌より）
第284図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳全体図
第285図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳石室図
第286図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳遺物出土分布図
第287図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳出土須恵器（１）
第288図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳出土須恵器（２）
第289図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳出土土師器
第290図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳出土鉄鏃（１）
第291図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古墳出土鉄鏃（２）
第292図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区古銭など
第293図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区早期末～前期初頭の土器口縁出土量比較円グラフ
第294図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区土器口縁・土偶分布図
第295図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石器分布図（１）
第296図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石器分布図（２）
第297図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石器等分布図（３）
第298図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石器等分布図（４）
第299図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区石器等分布図（５）
第300図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区磯磨石の法量・重量グラフ

釈迦堂Ｓ－Ⅱ区挿図目次

第１図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区全体図
第２図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－02
第３図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－02出土土器
第４図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－03
第５図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－03出土土器（１）
第６図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－03出土土器（２）
第７図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－03出土土器（３）
第８図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04
第９図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04出土土器（１）
第10図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04出土土器（２）
第11図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04出土土器（３）
第12図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－04出土土器（４）
第13図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－06出土土器
第14図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－07出土土器
第15図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－06・07
第16図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－05
第17図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－05出土土器
第18図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－08
第19図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－12
第20図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－12出土土器
第21図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－09
第22図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－09出土土器
第23図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－11炉址
第24図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－10
第25図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－10出土土器（１）
第26図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－10出土土器（２）
第27図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＢ－10出土土器（３）
第28図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＸ－01
第29図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－01・02・03・04・05・06・08・09
第30図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－10・12・14・15・69
第31図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－18・19・20・21・23・26・27・28・29
第32図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－30・31・32・35・36・37・38・39・50・51・52・53・54・55・64・65・66
第33図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－22・41・42・43・44・45・47・48・49・56
第34図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－70・71・72・73・74・75・76・77
第35図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－78・79・80・81・82・83
第36図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ－90・91・93・94
第37図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（１）
第38図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（２）
第39図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（３）
第40図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（４）
第41図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（５）
第42図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（６）
第43図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区ＳＫ出土土器（７）
第44図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区早期の土器
第45図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区中期（五領ケ台式期）の土器（１）
第46図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区中期（五領ケ台式期）の土器（２）
第47図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区中期～後期初頭の土器（３）
第48図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区加曽利Ｂ式土器
第49図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区土偶（１）
第50図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区土偶（２）
第51図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区土製円盤、把手
第52図　釈迦堂Ｓ－Ⅱ区土製品、石製品

釈迦堂Ｎ－Ⅱ区挿図目次

第１図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区グリッド図
第２図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01
第３図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01遺物出土状況
第４図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01須恵器・土師器
第５図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区ＳＸ－01出土鉄製品
第６図　釈迦堂Ｎ－Ⅱ区グリッド出土土器

図版目次

釈迦堂Ｓ－Ⅰ区

図版 1　空中写真　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区・Ｓ－Ⅱ区、空中写真　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区・Ｓ－Ⅱ区

図版 2　発掘開始時の状況　Ｓ－Ⅰ区、Ｓ－Ⅰ区、Ｓ－Ⅱ区、Ｓ－Ⅰ区、Ｓ－Ⅱ区、Ｓ－Ⅰ区、Ｓ－Ⅱ・Ｓ－Ⅱ区、Ｓ－Ⅱ区

図版 3　調査状況

図版 4　ＳＢ－06、ＳＢ－06、ＳＢ－06、ＳＢ－10、ＳＢ－13、ＳＢ－15、ＳＢ－30、ＳＢ－51

図版 5　ＳＢ－47、ＳＢ－47、ＳＢ－51、Ｗ－20、ＳＢ－05、ＳＢ－05、ＳＢ－05、ＳＢ－06

図版 6　ＳＢ－10、ＳＢ－28、ＳＢ－23、ＳＢ－23、ＳＢ－41・42、ＳＢ－41・42、ＳＢ－41・42、ＳＢ－41・42

図版 7　ＳＫ－01、ＳＫ－01、ＳＫ－04、ＳＫ－05、ＳＫ－06、ＳＫ－10、ＳＫ－18、ＳＫ－19

図版 8　ＳＫ－20、ＳＫ－22、ＳＫ－22、ＳＫ－23、ＳＫ－28、ＳＫ－30、ＳＫ－33、ＳＫ－33

図版 9　ＳＫ－44、ＳＫ－49、ＳＫ－55、ＳＫ－60、ＳＫ－65、ＳＫ－69、ＳＫ－73Ａ、ＳＫ－77

図版 10　ＳＫ－81、ＳＫ－83、ＳＫ－88、ＳＫ－98、ＳＫ－98、ＳＫ－101、ＳＫ－125、ＳＫ－144

図版 11　ＳＫ－155、ＳＫ－157、ＳＫ－165、ＳＫ－172、ＳＫ－193、ＳＫ－193、ＳＫ－193、ＳＫ－193

図版 12　ＳＢ－01、ＳＢ－02、ＳＢ－03、ＳＢ－02・ＳＢ－03

図版 13　ＳＢ－04、ＳＢ－05、ＳＢ－06

図版 14　ＳＢ－07、ＳＢ－08、ＳＢ－09

図版 15　ＳＢ－10、ＳＢ－10、ＳＢ－14、ＳＢ－11、ＳＢ－21、ＳＢ－12

図版 16　ＳＢ－15、ＳＢ－13、ＳＢ－30、ＳＢ－34、ＳＢ－26、ＳＢ－17、ＳＢ－15

図版 17　ＳＢ－16、ＳＢ－17・18、ＳＢ－19

図版 18　ＳＢ－20、ＳＢ－21、ＳＢ－22

図版 19　ＳＢ－24、ＳＢ－25、ＳＢ－26

図版 20　ＳＢ－27、ＳＢ－29、ＳＢ－33

図版 21　ＳＢ－34、ＳＢ－35、ＳＢ－54、ＳＢ－38、ＳＢ－07

図版 22　ＳＢ－41・42、ＳＢ－47、ＳＢ－48

図版 23　ＳＢ－43、ＳＢ－44、ＳＢ－45

図版 24　ＳＢ－50、ＳＢ－51、ＳＢ－52

図版 25　ＳＢ－49・53、ＳＢ－55、ＳＢ－56

図版 26　ＳＸ－01、ＳＸ－01、ＳＸ－03

図版 27　早期ＳＢ－出土土器

図版 28　早期ＳＢ－出土土器、早期ＳＢ－出土土器その他、グリッド出土土器

図版 29　ＳＢ－11出土土器、ＳＢ－13出土土器、ＳＢ－17出土土器

図版 30　ＳＢ－16出土土器、ＳＢ－15出土土器、ＳＢ－17出土土器

図版 31　ＳＢ－19出土土器、ＳＢ－22出土土器、ＳＢ－25出土土器

図版 32　ＳＢ－26出土土器、ＳＢ－30出土土器、ＳＢ－39出土土器、ＳＢ－44出土土器

図版 33　ＳＢ－52出土土器、ＳＢ－50出土土器、ＳＢ－53出土土器

図版 34　ＳＢ－46出土土器、ＳＢ－48出土土器、ＳＢ－54出土土器

図版 35　ＳＫ－出土土器、ＳＫ－出土土器、ＳＫ－出土土器、グリッド出土土器

図版 36　早期グリッド出土土器

図版 37　早期グリッド出土土器
図版 38　早期グリッド出土土器
図版 39　前期初頭の土器、早期末～前期初頭東海系土器、早期末～前期初頭東海系土器
図版 40　ＳＢ－02出土土器、ＳＢ－03出土土器、ＳＢ－05出土土器、ＳＢ－06出土土器
図版 41　ＳＢ－06出土土器
図版 42　ＳＢ－06出土土器、ＳＢ－07出土土器、ＳＢ－12出土土器、ＳＢ－20出土土器
図版 43　ＳＢ－28出土土器、ＳＢ－41・42出土土器、ＳＫ－出土土器
図版 44　ＳＫ－出土土器、グリッド・その他出土土器
図版 45　ＳＢ－02出土土器、ＳＢ－03出土土器
図版 46　ＳＢ－03出土土器
図版 47　ＳＢ－05出土土器
図版 48　ＳＢ　05出土土器
図版 49　ＳＢ－06出土土器
図版 50　ＳＢ－06出土土器
図版 51　ＳＢ－07出土土器、ＳＢ－08出土土器、ＳＢ－09出土土器
図版 52　ＳＢ－12出土土器、ＳＢ－12出土土器、ＳＢ－12出土土器
図版 53　ＳＢ－12出土土器
図版 54　ＳＢ－12出土土器、ＳＢ－12出土土器、ＳＢ－20出土土器
図版 55　ＳＢ－20出土土器、ＳＢ－27出土土器、ＳＢ－21出土土器
図版 56　ＳＢ－28出土土器、ＳＢ－37出土土器、ＳＢ－39出土土器
図版 57　ＳＢ－41・42出土土器、ＳＢ－43出土土器、ＳＢ－45出土土器、ＳＢ－55出土土器
図版 58　ＳＫ－出土土器、ＳＫ－出土土器、釈迦堂Ｚ３式　黒浜式併行
図版 59　グリッド出土、釈迦堂Ｚ３式　黒浜式併行
図版 60　グリッド出土諸磯ａ式、グリッド出土諸磯ｂ式、グリッド出土諸磯ｂ式
図版 61　グリッド出土諸磯ｃ式、ＳＢ－出土黒浜式
図版 62　ＳＢ－出土黒浜式、ＳＢ－出土黒浜式、グリッド出土黒浜式
図版 63　グリッド出土黒浜式、グリッド出土黒浜式、ＳＢ－出土近畿東海系土器
図版 64　ＳＢ－出土近畿東海系土器、ＳＢ－出土近畿東海系土器、グリッド出土近畿東海系土器
　　グリッド出土近畿東海系土器
図版 65　ＳＢ－23出土土器、ＳＫ－出土土器
図版 66　グリッド出土五領ケ台式、グリッド出土近畿東海系中期の土器
図版 67　ＳＢ－04出土土器
図版 68　ＳＢ－04出土土器
図版 69　ＳＢ－10出土土器
図版 70　ＳＢ－10出土土器
図版 71　ＳＢ－40出土土器、ＳＢ－47出土土器、ＳＢ－03上層出土土器
図版 72　ＳＫ－出土土器
図版 73　ＳＫ－出土土器
図版 74　ＳＫ－出土土器
図版 75　ＳＫ－出土土器
図版 76　ＳＫ－出土土器
図版 77　ＳＫ－出土土器、その他グリッド出土土器

図版 78　その他グリッド出土土器
図版 79　中期把手
図版 80　ＳＫ－出土土器、その他グリッド出土土器
図版 81　グリッド出土中期末～後期初頭の土器、グリッド出土後期初頭の土器
図版 82　東海系土器出土後期初頭の土器
図版 83　グリッド出土後期初頭の土器
図版 84　グリッド出土後期初頭の土器
図版 85　グリッド出土後期初頭の土器
図版 86　グリッド出土後期初頭の土器
図版 87　グリッド出土後期初頭の土器
図版 88　展開写真　ＳＢ－17、ＳＢ－50、ＳＢ－30
図版 89　展開写真　ＳＫ－155、　ＳＫ－261、　ＳＫ－03上層
図版 90　展開写真　ＳＫ－30、ＳＫ－04、ＳＫ－01
図版 91　展開写真　ＳＢ－10、ＳＢ－10、ＳＢ－10
図版 92　展開写真　ＳＢ－10、ＳＢ－10、ＳＢ－04
図版 93　展開写真　ＳＫ－98、Ｒ－17、ＳＫ－33
図版 94　展開写真　ＳＫ－20、ＳＫ－04、ＳＫ－165
図版 95　Ｓ－Ⅰ区土偶
図版 96　Ｓ－Ⅰ区土偶
図版 97　Ｓ－Ⅰ区土偶
図版 98　Ｓ－Ⅰ区土偶、Ｓ－Ⅱ区土偶
図版 99　加曽利Ｂ式土器、晩期中葉の土器、土製円盤
図版100　粘土塊、土製装飾品など
図版101　石製装飾品、石錘、浮子
図版102　磨製石斧、羽口など、古銭など
図版103　釈迦堂１号墳
図版104　釈迦堂１号墳、前庭部と石室、前庭部
図版105　１号墳溝出土状況、１号墳周溝出土状況、前庭部脇人骨出土状況
図版106　１号墳出土器、土師器坏、土師器坏、須恵器蓋、須恵器坏、須恵器壺、須恵器甑

釈迦堂Ｓ－Ⅱ区・Ｎ－Ⅱ区

図版 **1**　テント内調査状況、ＳＢ－03、ＳＢ－03、ＳＢ－05、ＳＢ－03、ＳＢ－03
図版 2　ＳＢ－02、ＳＢ－03、ＳＢ－04、ＳＢ－06、ＳＢ－07、ＳＢ－03、ＳＢ－05
図版 3　ＳＢ－08、ＳＢ－09、ＳＢ－10
図版 4　ＳＢ－02出土土器
図版 5　ＳＢ－03出土土器
図版 6　ＳＢ－03出土土器
図版 **7**　ＳＢ－06出土土器、ＳＢ－09、出土土器、ＳＢ－11出土土器
図版 8　ＳＢ－10出土土器
図版 9　ＳＫ－出土土器
図版 10　ＳＫ－出土土器

図版 11　ＳＫ－出土土器、グリッド出土土器、グリッド出土土器
図版 12　グリッド出土土器、近畿東海系中期の土器、中期中葉の特異な縄文、ヘタナリの擬似縄文（称名寺式）
　　加曽利Ｂ式土器
図版 13　土製円盤、土製装飾品、五領ケ台式人面把手、石製装飾品、磨製石斧
図版 14　Ｎ－Ⅱ区　ＳＸ－01　Ｎ－Ⅱ区　ＳＸ－01鉄製人形

山梨県東八代郡一宮町

塚越北A地区
（S－I区）

第1章　調査とその概要

第1節　調査の経過

1979年11月21日　文化庁に発掘通知を提出する。
12月18日　文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。
＜調査の経過＞
1980年2月8日　東八代郡一宮町千米寺塚越A地区（S－Ⅰ区）のクイ打ち作業開始。この間東新居遺跡の調査続行。
2月12日　S－Ⅰ区の発掘調査開始。
3月1日　S－Ⅱ区～S－Ⅴ区までの側道部分約500mの試掘開始。5月中旬までに、一応終了。
7月28日　学生の夏休みにともないS－Ⅱ区の本格的調査開始。この間遺跡全面にクイ打ち（4m方眼）作業を併行させる。
11月2日　S－Ⅲ～S－Ⅳ区（三口神平地区）の発掘を開始し、S－Ⅰ区の残務処理を行う。
12月5日　S－Ⅰ区の発掘作業を終了する。古墳時代から先土器時代の重層遺跡であったため、長期間を要した。その後S－Ⅱ区の調査を進める。
1981年2月5日　S－Ⅱ区の一部分が残ったため、厳寒の中簡易ビニールテントとジェットヒーターを用いて調査を進め、ようやく終る。寒さと乾燥の中、調査は困難をきわめる。この間、金生遺跡の調査を終えた新津健、八巻与志夫両文化財主事の援助がある。
またこの冬期間、遺跡全面の試掘を行う。S－Ⅲ区、S－Ⅳ区の遺構・遺物集中区の全貌をほぼ握む。またN－Ⅱ区において、土壙を検出した。
1981年8月1日～12日　N－Ⅱ区SX－01の調査を終了する。歴史時代の方形土壙であった。

第2節　調査組織

＜発掘調査＞
調査主体　山梨県教育委員会
調査担当　田代　孝（県文化財主事）
　　小野正文（　〃　）
調査員　猪股喜彦、室伏　徹、佐野勝広、横倉雅幸、外山泰久、山下孝司、日向千恵
調査補助員　青柳弘美、秋田かな子、秋山千恵、大橋瑠璞、奥山和久、河西佳子、勝田あけみ、川島園枝、櫛原功一、桑折礼子、小林宇壱、小林　斉、小林正彦、五味研治、斉木義一、佐藤美鈴、佐藤好枝、三五康司、志村和子、信藤祐仁、杉浦章一、高橋葉子、田村和幸、成島京子、広川珠美、藤田菜穂子、古谷健一郎、堀金　靖、三谷雅章、矢崎佐百合、山田周平、山田美作子、山根弘人

<整 理 作 業>

整理担当　小野正文（県埋蔵文化財センター文化財主事）

調 査 員　横倉雅幸、奥山和久、佐野博基

調査補助員　秋田かな子、浅利　司、大橋瑠璞、北村玲子、櫛原功一、桑折礼子、古谷健一郎、森田安彦、山形真理子

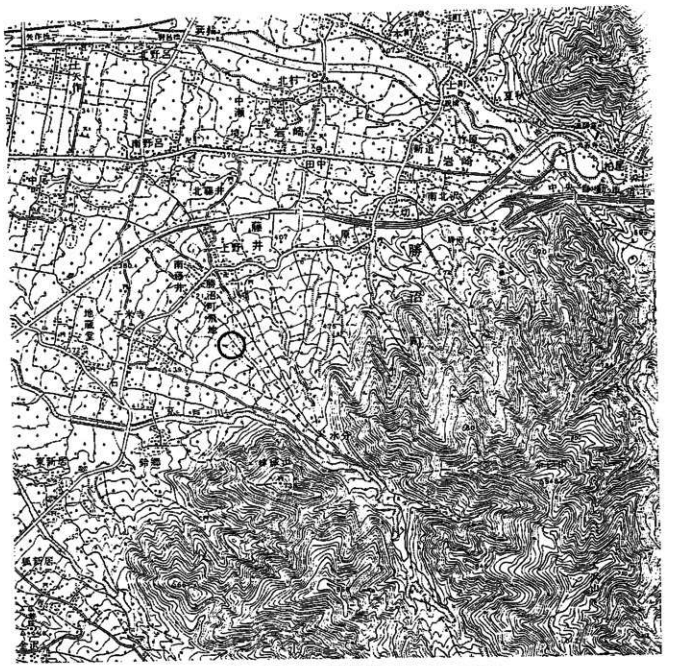
整理作業員　雨宮照子、雨宮正人、飯島由美、岩間喜美枝、岩柳弘子、内田裕一、小河いつ未、小川苗美、奥村澄江、笠原美登里、加藤　道、金子美枝、小宮山葉子、五味はるみ、三枝明仁、坂野恭子、里吉あつ子、佐野靖子、白沢多恵子、田草川かみ志、田中きくの、津田元栄、土屋浩司、﨑田成美、中川千春、早川きくえ、早川君子、樋川歌子、広瀬ます子、古屋香代子、保坂正美、松岡美恵子、丸山つぎ子、水上きよみ、武川明美、武藤　敏、八代米子、矢房静江、山下延子、山下弘美、山村正光、依田ハル江、渡辺美代子

第 3 節　釈迦堂遺跡の位置

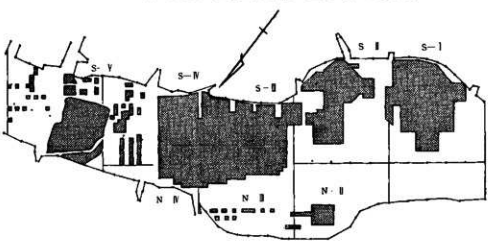
釈迦堂遺跡群は山梨県東八代郡一宮町と東山梨郡勝沼町にまたがる京戸川扇状地（藤井扇状地）の扇央部に位置する。遺跡の名称のもととなった釈迦堂は、一宮町と勝沼町にまたがる字名で、現在も小さな社が残っており、小さな祠と石棒が祀ってある。

京戸川扇状地は、地理学的にも典型的な地形として著名である。蜂城山（標高738m）と京戸山（標高880m）の間を流れる京戸川の押し出した土砂によって形成された扇状地は、扇頂から扇端まで約2500mを測り、広大な面積となり、モモ、ブドウの栽培の適地として、付近有数の果樹園地帯となっている。

第 1 図　釈迦堂遺跡群の位置図（山梨県）

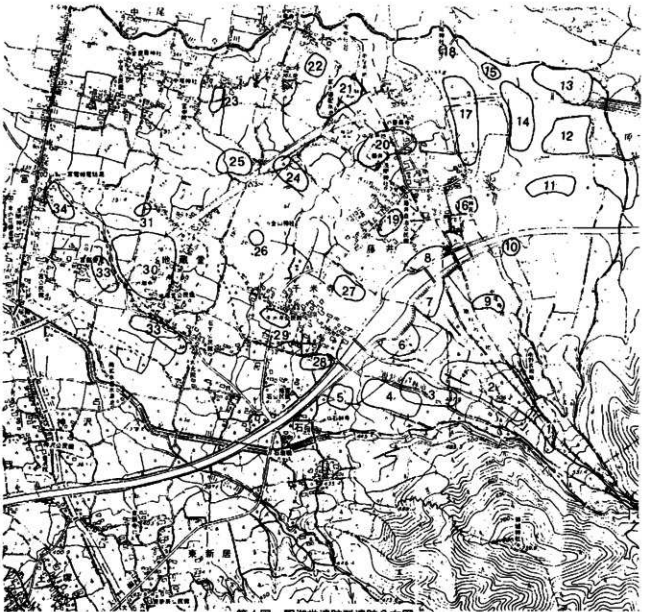


第 2 図　釈迦堂遺跡群の位置（1：25000）



S－Ⅰ区　堀越北A地区　　S－Ⅱ　堀越北B地区　　N－Ⅱ区　釈迦堂地区
S－Ⅲ・S－Ⅳ・N－Ⅲ・N－Ⅳ区　三口神平地区　　S－Ⅴ区　野呂原地区

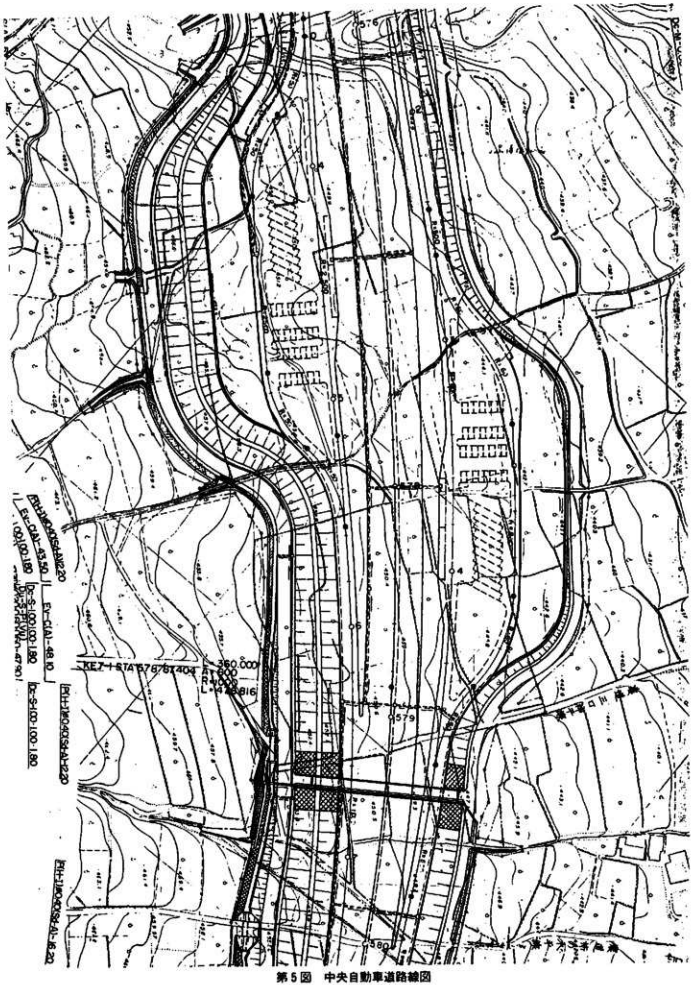
第 3 図　釈迦堂遺跡群地区図



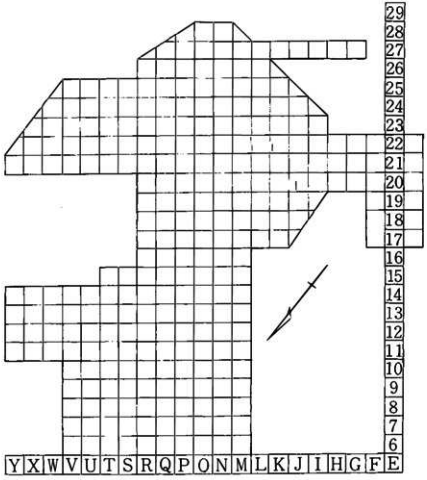
第4図　駅遺堂遺跡群遺跡分布図

No.	遺跡名	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥一古	歴一中世
1	日向林	○		○	○			
2	物見塚	○		○	○			○
3	山道添	○			○			
4	鎧塚A						○	○
5	〃B			○	○			
6	塚越北A	○	○	○	○			
7	三口神平			○				
8	野尻原			○				
9	本新田		○	○	○			
10	西藤塚			○	○			
11	大築地		○	○	○			○
12	瀬尾敷			○	○			○
13	岩崎屋敷							○
14	御所畑							○
15	天神堂							
16	上野			○				
17-1	白川							○
17-2	寺平			○				

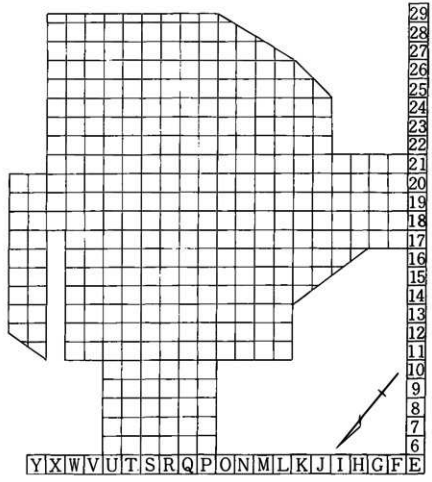
No.	遺跡名	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥一古	歴一中世
18	鉢塚古墳						○	
19	藤井田			○				
20	堀本			○				
21	馬込						○	○
22	宮田							○
23	地蔵久保A			○				
24	〃 2			○				
25	若神							○
26	本木							○
27	駅遺堂	○						○
28	若宮			○				○
29	南屋敷							○
30	西田						○	
31	西田北							○
32	十二社						○	
33	川村						○	○
34	梶坪						○	○



第５図　中央自動車道路線図

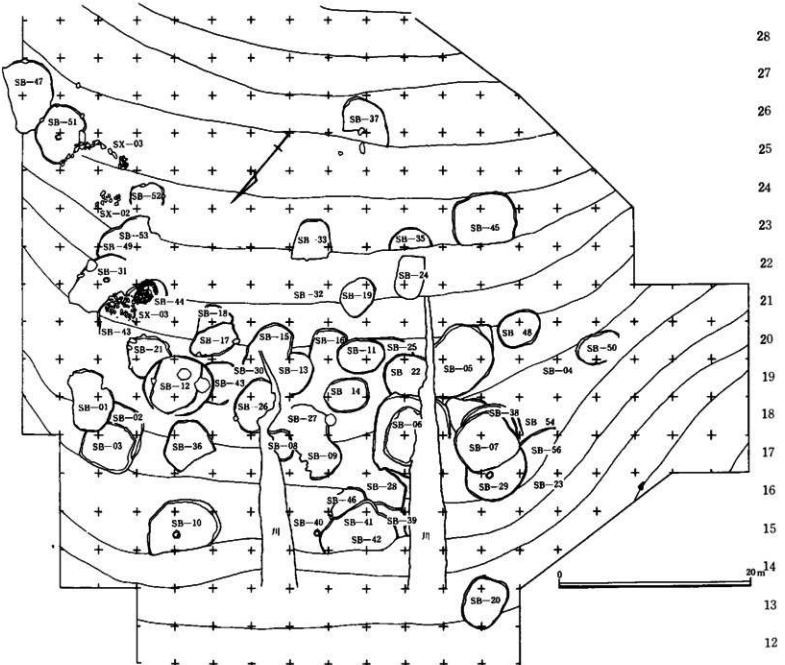


S－Ⅱ区グリッド配置図

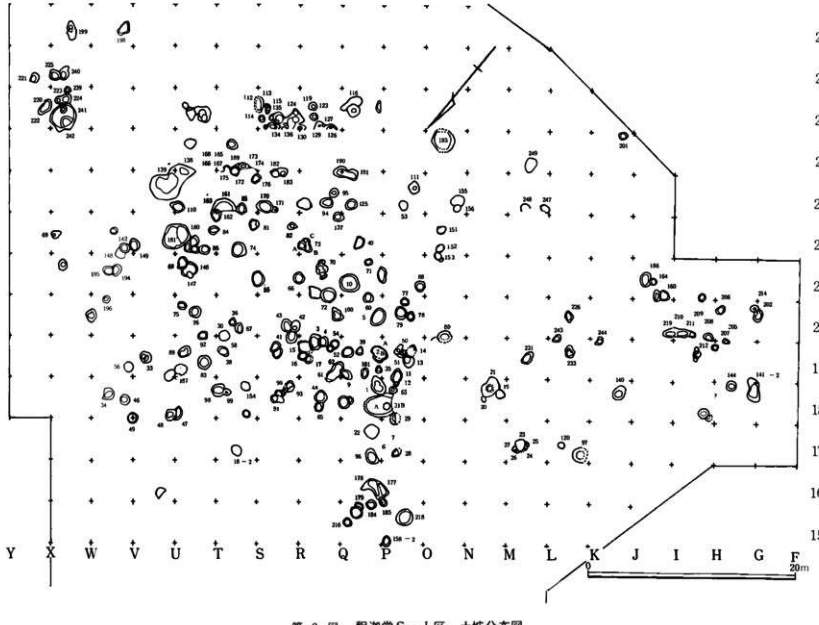


S－Ⅰ区グリッド配置図

第 6 図　釈迦堂S－Ⅰ区　S－Ⅱ区グリット配置図



第 7 図　駅遺堂S－I区　住居址分布図



第 8 図　釈迦堂S－Ⅰ区　土坑分布図

また京戸川の流路の変更はいくつもあったと思われ、現在扇状地の南端を流れている川もかつては東端を流れていたという伝承もあるくらいである。

なお、付近は京戸山千坊といわれる古代山岳寺院が存在したといわれ、現在も寺院跡の遺構が山林の中にうもれている。千米寺という字名もまたその遺称であろうか。あるいは釈迦堂もそれと何らかの関係をもった名称であろうか。また蜂城山は中世の山城で、茶臼山は烽火台である。

第 4 節　調査の概要

1．S－Ⅰ区の概要

釈迦堂遺跡群の調査の成果は、後述の報告書のとおりであるが、ここでは、その概要を示す。

塚越北A地区（S－Ⅰ区）は、東八代郡一宮町千米寺字塚越北に位置し、京戸川扇状地の扇央部にあたる。扇状地はいくつもの小さな解折谷が発達しており、S－1区もまた小さな谷によって区切られた幅約80mほどの台地である。

調査の結果、先土器時代の包含層、縄文時代早期末～前期末の住居址と土坑、前期後半の住居址と土坑、中期中葉の住居址と土坑、後期初頭の敷石遺構と土坑等を検出している。

2．先土器時代

ナイフ形石器15点、槍先形尖頭器4点、掻器1点、石錐1点、二次加工ある剝片7点、使用痕ある剝片11点、剝片33点、打面再生剝片2点、石核2点が出土している。

先土器時代の包含層である第Ⅳ層が、縄文時代早期および前期の遺構によって掘り込まれていたため、確実な位置をおさえたローム層中の調査とは違って、石器等の出土状況から、遺跡の性格を知るには無理がある。

しかしながら、山梨県のようなローム層が部分的にしか存在しない地域にあって、それと対応する確かな先土器時代包含層が存在するという事実は一つの収穫といえよう。この釈迦堂の先土器時代包含層は黄色砂質土層で、花崗岩や閃緑岩の風化した砂質土を主体とし、それに火山灰（スコリアが目立つ）を含むものである。

3．縄文時代

縄文時代の遺構と遺物は早期末～後期初頭に及ぶ。ただし晩期中葉の土器片が一片検出されている。

早期

早期末～前期初頭の住居址27軒、土坑16基を検出している。早期末の集落は近年調査例は増加したとはいえ、数ないものである。その中で、早期末から前期初頭の集落の変遷を知り得る貴重な資料といえる。また、これにS－Ⅱ区で検出された前期初頭の集落を加えれば、その動態がより明らかになると思われる。

なお、この報文告書では関東編年でいう神ノ木台式を早期に、下吉井式を前期として考えている。

前期

前期後半の住居址20軒、土坑37基を検出している。前期は関東地方の黒浜式に併行する時期の土器がある。これは中部地方の有尾式の一部とする見解もあるが、筆者は有尾式の型式内容が1956年以来いくつかの研究成果があるが、旧来のままの有尾式と型式学的な検討を行った結果から、これが有尾式からは区分される在地の土器であると考えている。それ故、これを発掘時から黒浜式併行期の土器および黒浜式併行式と仮称し、また釈迦堂Z3式とも仮称している。

黒浜式併行期の住居址11軒、諸磯a式期3軒、諸磯b式期5軒を検出している。これによって前期後半の集落の変遷を知ることができよう。

中期

中期の住居址は初頭の五領ヶ台式期の住居址1軒と土坑4基を検出し、藤内式期の住居址8軒と土坑52基を検出している。この藤内式期の集落がいわゆる定形的な環状集落で、中央部土坑群を持つものである。ところが環状集落も土器型式区分でいえば、一時期3～4軒となろう。土坑は土器埋設土坑とでも呼ぶべきもので、耳飾や骨片が出土しているので土坑墓と考えられる。

後期

後期は包含層があり、前期や中期の住居址の窪地に石や土器片を遺棄している様子がＳＢ－12上層およびＳＢ－06、ＳＢ－41・42等で認められている。遺構としてはＳＸ－01、02、03の敷石遺構がある。

遺物は、称名寺式～堀之内式土器が数多く出土している。

4．古墳時代

石・千米寺古墳群が町誌の時点で、32基確認されていたが、釈迦堂1号墳はこの古墳群に含まれるもので、墳丘の大きさから、現存する千米寺大塚古墳とほぼ同等の規模の古墳であったと思われる。石室がほとんど破壊されていたために石室からの出土遺物はわずかで、前庭部脇の周溝から鉄鏃・須恵器・土師器等が出土している。

なお古墳前庭部に接して、男性人骨が出土しており、その附近より古銭が4枚出土しているので、おそらく後世（江戸期）の埋葬と思われる。

古墳の墳丘の一部を切って東西に並ぶ、石壁設坑が検出された。これは現代の耕地拡大のため、古墳の葺石等の石を埋設したものと思われる。

5．Ｓ－Ⅱ区の概要

Ｓ－Ⅰ区とは谷をへだてた、台地上に立置する。縄文時代早期～後期の住居址と土坑を検出している。

早期

早期の住居址は1軒のみであった。これはＳ－Ⅰ区の集落といかなる関係を持ったものであったろうか問題を残すものである。

中期

中期初頭の五領ヶ台式期の住居址4軒、土坑5基が検出されている。五領ヶ台式と総称しているが、これは集合沈線文土器で、厳密な意味では五領ヶ台式とは区別されようが、ここでは該期の動態を知るために、とりあえず、総称しての五領ヶ台式に含めておく。

曽利式期の住居址は3軒検出されており、そのうちＳＢ－05は出土遺物が少ないのみにかかわらず、奥壁部近くで吊手土器が出土している。奥壁部に柱穴がないことも、Ｓ－Ⅱ区の該期の住居址とはきわだった対照をみせている。

後期

後期の称名寺式期の柄鏡形敷石住居址が1軒検出されている。炉址は失なわれている。また堀之内式期の敷石住居も1軒確認されており、他の1軒も加えると堀之内式期は2軒となる。

その他として台地の中央部に巨石を埋設した遺構がありＳＸ－01とした。これはおそらく古墳の石材を埋設したものではないかと考えられる。

6．Ｎ－Ⅱ区の概要

Ｎ－Ⅱ区は小さな谷をもつものの、割合と平坦部が続く地区で、分布調査からも遺構の存在は予想されなかった。冬期の試掘調査の結果から、谷の中央部に奈良時代の土坑があることが判明し、調査の結果、土坑内より鉄製人形、釘、須恵器、土師器を検出し、炭化材も多いところから、火を用いた祭祀遺構であったと考えられる。

第2章　先土器時代

第1節　遺物の出土状況（第9図）

本遺跡からは、先土器時代の石器が76点出土した。本遺跡の土層は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層黒褐色土、Ⅲ層茶褐色土、Ⅳ層黄色砂質土、Ⅴ層礫層である。先土器時代の石器は、Ⅲ層以上の土層に含まれ、その本来の包含層はⅢ層下部であると思われる。Ⅲ層には縄文時代早期の遺物が含まれ、遺構掘り込み面もⅢ層下部からⅣ層に近い位置にある。本地区には縄文時代早期の遺構が多く、先土器時代の包含層がかなり撹乱されていると思われる。

平面分布をみると、広くは直径50mの範囲に分布し、中央の直径20m程度の範囲に比較的高密度に集中分布している。特にS－22Gに11点、P－20Gに6点、R－20Gに5点と多く分布している。このように、非常に散漫な分布ではあるが、出土量の多いグリッドを核に同心円状に分布している。ただし、こうした分布も縄文時代の遺構により撹乱され、分断・拡散されたと思われる状況も見て取れる。

各種の石器の分布をみると、剝片は各種の石器の中で33点と最も多く、先述の分布状況と同様なありかたを示す。次いで多いナイフ形石器は15点あるが、ある地域に集中することはなく、広い範囲に散漫に分布する。その他の石器のうち槍先形尖頭器は4点あるが、2点は直径20m程度の高密度地域の周縁部に、他の2点はその外部に分布している。ナイフ形石器が高密度地域の内部にも多いのとは対照的である。しかし、土層がかなり撹乱を受けているうえ、石器の点数も少く、上記の状況から供伴関係を問うのはむりがあろう。

第2章　出土石器（第10図～13図）

本遺跡からは、ナイフ形石器15点、槍先形尖頭器4点、掻器1点、石錐1点、二次加工ある剝片7点、使用痕ある剝片11点、剝片33点、打面再成剝片2点、石核2点が出土した。以下それぞれについて記述する。

ナイフ形石器　大きく2つの形態に分けることができる。一つは素材の形状を大きく変形させたもので、背縁と側刃縁の両側縁をブランティングしたもので、いわゆる二側縁加工のナイフ形石器である。本遺跡における第Ⅰ形態とする（1～11）。この中でも調整加工のありかたに変化がみられる。背縁では、先端側と基部側の加工が連続しないものがある（1）。他はすべて先端から基端まで連続し、形状はおおむね弧を描く。ただし、2は三段に折れ曲り、全体の形状もいわゆる切出形ナイフ形石器に似る。背縁部は、基本的には裏面から加撃されているが、特に先端部側にかぎって正面からの加撃が対向する場合がある（3～9）。対向剝離は、背縁中央に至る場合もある（3・4・6）。

側刃縁の加工は、いずれも裏面からなされている。深いものが多いが、浅いものもある（3・4・11）。形状は、内彎するもの（1・2）もあるが、直線的なものの方が多い。裏面加工は、ほとんどのものにみられる。側刃縁側からの加撃（1・4・8）、背縁側からの加撃（2・6）、両側縁からの加撃（3・7・9・10）がある。その規模も大・小がある。裏面加工は、いずれも正面の加工の後になされている。基部の形状をみると、両側縁の正面の加工が基端部で接しないもの（1～6）と接するもの（7～11）とがある。後者では、基端が尖るもの（7・8）と丸くなるもの（9～11）とがある。側刃角については、180°に近く不明瞭なもの（4・5）から、130°を下まわり明瞭なもの（3・8・11）までである。素材の打面と石器先端の位置関係をみると、素材の打面側に先端がくるもの（1～7・9・11）と、素材打面側に基部がくるもの（8・10）とがあり、前者が圧倒的に多い。

長さは、5.3cm（7）から3.1cm（10）と幅がある。5cm以上を大型、5～4cmを中型、4～3cmを小型とする。幅は、2.2cm（2）から1.3cm（11）である。厚さは9mm（10）から4mm（8）までである。なお、6は基部

を欠損したものを、裏面加工を深くして再加工したものと思われ、本来はもう少し大きかったものと思われる。素材正面の剝離痕は、9を除いて全て主剝離面と同一方向である。9には逆方向の剝離もみられる。全て黒曜石である。

もう一つの形態は、素材の形をあまり大きく変更させないもので、素材の一端に断ち切るようよにプランティングを行うもので、いわゆる部分加工のナイフ形石器である。本遺跡における第Ⅱ形態とする。本形態のものは4点ある。出土点数が少ないが、その中でも変化がみられる。非常に幅広な素材を用い、背縁が長いものがある（12・13）。厚さもあり、非常に頑強な素材である。一方、幅や厚さがあまりないきゃしゃな素材を用い、背縁の短いものがある（14・15）。また、大きさにもかなりの違いがあるようである。素材の打面を残し、末端側を加工するものが多い（12・15）。13は打面側を欠損するが、おそらく、打面を残していただろう。打面側を加工し、打面を残さないものもある（14）が、加工部分の厚さを確保するためであろう。背縁の加工は直線的かややコンベックスぎみになる。裏面からの加撃ばかりで、第Ⅰ形態のように対面剝離がみられない。素材はすべて石刃で、背面の剝離は主剝離面と同一方向である。14は、素材末端に石核腹面の調整痕がみられる。石材は全て黒曜石。

槍先形尖頭器　槍先形尖頭器は4点出土している。片面周辺加工（16）と両面全面加工（17～19）とがある。16は、素材背面周辺にプランティング様の急斜な加工を施し、木葉形に整形したものである。形態は最大幅が中央やや下方にあり、両端ともあまり尖らない。素材は、横長剝片と思われる。素材の打面は大きく残存している。自然面打面で、背面の剝離は主剝離面の方向とほぼ一致する。17は、やや大型の木葉形槍先形尖頭器である。平坦な剝離が非常にスムーズに施され、両面は非常に丹念に仕上げられており、断面は均整のとれた凸レンズ形を呈する。素材の剝離面と思われるものが裏面に若干残存するも、両面ともほとんど調整剝離で覆われている。先端部を欠損する。末端部は素材の剝離面で、おそらく素材の折れ面であろう。18は、小型の木葉形の槍先形尖頭器である。形態をみると、最大幅が中央やや末端側にあり、先端は鋭く尖るが、末端はやや丸い。全体に平坦な剝離が施されているが、裏面は正面よりも平坦に加工され、断面が「D」字形に仕上げられている。裏面中央の大きな剝離痕は、小規模な調整加工の一部を切っており、裏面を平坦にするための大規模な調整剝離と考えられる。19は石英製の槍先形尖頭器である。両面周辺を平坦な剝離で荒く調整している。両面中央に大きな剝離面が残るが、素材の剝離面かもしれない。先端側を欠損しており、最大幅は欠損部にあるらしい。末端は丸く仕上げられ、正面末端には節理面が残存する。

掻器　20は、やや幅広の石刃末端に刃部を作出したものである。刃部は一部を欠損するが、裏面からみた場合は、凸刃で左に傾いている。また、正面右縁部にも刃部が形成されている。下半部が深く調整されているのに対し上半部は浅く、両者の境界が「く」の字形に折れている。正面右縁部の打面付近にも若干の二次加工がみられる。素材は幅広で、末端にゆくほど厚くなっている。打面が残存し、細部調整がみられる。正面の素材の剝離面は、主剝離面と同方向と逆方向の剝離がみられる。また、掻器刃部に石核腹面の横方向の調整痕らしき剝離が残存している。

石錐　26の1点のみみられる。錐部は非常に厚く頑強で、断面が四角形である。一部を新しい剝離で欠損している。素材の打面側を大きく切断するように、ななめにプランティング様の加工を行い、先端部を左右両側から、弱くコインケイブした加工を厚く行って錐部を作出している。あるいは、ナイフ形石器第Ⅱ形態を転用したものかもしれない。素材は、石核底部を大きく剝ぎ取り、末端が肥厚した「し」の字形の石刃である。上下両方向からの剝離痕が素材正面に残存する。

二次加工ある剝片　7点が出土した。21は正面左縁部打面よりに2.7cmにわたって二次加工がみられる。また、左縁部下半や右縁部上半に使用痕がみられる。さらに、二次加工と同じ位置から同じ幅で、石刃を横に反対側の縁部まで達する擦痕帯がみられる。擦痕は、主剝離面の剝離方向に直向する方向の線状痕によって構成されている。二次加工部分の使用に伴うものであろう。素材は、本遺跡で最大の石刃を用いている。正面の剝離は、上下両方向の剝離と、その末端部に稜形成時の稜上からの剝離がみられる。22は、石刃打面部側の折れ面から右縁部

にかけて、若干の二次加工がなされたものである。二次加工は非常に急斜になされている。素材は、大型の石刃である。上下両方向からの剝離、および石核腹面の調整痕がみられる。同様な部位に二次加工がみられるのが28である。しかし、二次加工は正面側からなされ、また浅く、折れ面と右縁部とが成す角を生かすように加工がされている。素材も小型で、正面には主剝離面と同方向の剝離のみみられる。23～25は、非常に小型の剝片を利用したものである。いずれも打面部が破砕している。加工部位は、剝片末端（23・25）と右縁部（24）とあるが、いずれもかなり急斜な加工である。27の左縁部下部に連続する小剝離がみられるが、自然面を打面にしており、二次加工かは不明である。25の二次加工はプランティングに近いが、ナイフ形石器のそれは直線的かやや弧を描くもので、しかも鋭い先端をもっている。29は、小型の厚い剝片の末端に若干の二次加工を施したものである。二次加工は非常に急斜である。素材の正面には、上下両方向の剝離と、腹面調整の剝離がみられる。

使用痕ある剝片　二次加工ほど大規模ではなく、剝片の形を変形させないある程度連続する微小剝離を使用痕とした。大型・中型の石刃を用いたもの（27・30・31・35～38）と、小型の剝片を用いたもの（32～34・39）とがある。大型・中型のものの使用痕の小剝離は、小型の剝片のものより小規模である。使用痕は、打面部を除くあらゆる縁部にみられる。また、縁部全体にみられる場合もある（32・37・39）が、部分的な場合が多い。正面に微小剝離がみられるが、裏面にもみられる場合もある（31～33・35・37・38）。表裏の微小剝離が同一縁部にある場合（32・33・35・37）もあるが、完全に重なるわけではなく、位置がややずれたり（33）、部分的であったりする。微小剝離も、同規模のものが連続するもの、大小の規模を混えながら連続するもの、不連続にみられるものなどある。39は水晶であるが、他は全て黒曜石である。

剝片　いずれも縦長剝片である。いわゆる石刃もある。石刃は長さが幅の2倍以上で、両縁部がほぼ平行し、中央に前の石刃の剝離痕による稜が入るものとするのが一般的であろう。大きさを問わなければ、ほとんどのものが石刃と言える。59・64・66・67の4点がこの範疇から出る程度である。剝片には、打面部を折損するもの（40・41・52・63・66・68・70）と、破砕したもの（54・55・58）もあるが、他は打面が残存する。自然面打面（53・62・64）、単剝離打面（48～50・65・74）、2枚以上の大きな剝離面で構成されるもの（44・45・57・61・69）、打面細部調整のみられるもの（42・43・46・47・51・56・59・60・67・75）がある。正面は、自然面を有するもの（41～49・52・55・66・62～64・68．69・74・75）、主剝離面と同一方向の剝離面のみのもの（40～43・45～47・49～52・55～58・61・67・75一腹面調整のあるものも含む）、上下両方向がみられるもの（44・48・54・60・62～65・68・70・74一復面調整のあるものも含む）、石核腹面調整痕がみられるもの（45・53・59・65・66）がある。しかし、53は腹面調整痕としては非常に大きな剝離であり、あるいは他の剝離（分割面など）かもしれない。なお、41・46は焼け剝片であり、特に41は焼けによる剝離が正面に大規模にみられる。これらの剝片は、いわゆる石刃技法によって生産されたものばかりである。石刃とは言えないものも、その剝離過程で副次的に出来たものと理解できる。石材は、70のシルト岩以外は全て黒曜石。

打面再生剝片　72は、自然面を大きく残す。作業面側からの打面調整剝離がみられる。また左縁部に、反対側打面からの**剝離痕**が残存する。73は、正面全面に多方向の剝離痕がみられる。作業面の剝離とも思えるが、左右両縁方向からの剝離がみられること、打面部の剝離面が大きいこと、打面縁部に打面細部調整と思われる剝離がみられることなどから打面調整剝片と考えたい。

石核　76は、単設打面である。背面に大きく自然面を残す。打面は調整打面である。77は、両設打面である。上方からの作業面が新しい。上面は単剝離打面、下面は調整打面である。腹面調整剝離もみられる。背面に自然面を大きく残す。いずれも黒曜石。

接合資料　1個体、2点の接合資料があるのみである。剝離の手順をみると、まず74の正面にみるように、下方の打面からの剝離作業が行われている。次に上方の打面からの剝離作業が開始されるが、74にみられる範囲では本格的な剝離作業はなされていない。下方からの剝離作業により上方打面付近の厚みがかなり出てしまうが、上方打面からの小剝離はこれを剝離作業に先立ち途去したものかもしれない。本格的な剝離作業は74からである。その後、75の正面左側の目的剝片の剝離作業が行われる。その後、75打面部にみられる打面細部調整がなされ、

75の剝離が行われる。本例の右縁部には自然面が大きく残存し、石核右端部での剝離作業であるが、上下両打面が残存しており石核自体、本遺跡で発見された残核と同程度の大きさであったと思われる。したがって、剝離作業のかなり末期のものであろう。また、本例と同時に行われた剝離作業も、横にそう幅をもつものではなく、せいぜい本例と同程度の幅をもつ剝片が3枚程度の幅であろう。

石材　黒曜石73点、シルト岩1点（70）、水晶1（39）、石英1点（19）である。黒曜石は、大まかに六種類に分けられる。漆黒色のもの。かなり薄い剝片も不透明である。30点ある（7、10、14、16、23～25、27、29～33、36～38、45、47、51、53～56、59、63、68、69、72、73）。ナイフ形石器、槍先形尖頭器、二次加工ある剝片、使用痕ある剝片、剝片、打面両生剝片を含む。透明なもの。シマを含まず、厚い剝片もかなり透明である。18点ある（4、11、13、17、18、22、26、35、40、42、43、49、60、61、64、67、76、77）。漆黒色のものと同様な石器に加え、石錐、石核がある。半透明なもの。シマを含まないが、白濁している。11点ある（8、12、20、34、41、57、58、65、66、74、75）。ナイフ形石器、掻器、使用痕ある剝片、剝片がある。白色の細いシマの入るもの。部分的に白濁しているうえ、シマを含む。7点ある（3、5、6、11、15、28、62）。ナイフ形石器、二次加工ある剝片、剝片がある。黒色のシマが入ったもの。部分的に漆黒の部分が入る。シマも細いものと太いものとがある。8点ある（1、2、9、21、46、48、50、52）。ナイフ形石器、二次加工ある剝片、剝片がある。いずれの黒曜石も夾雑物をほとんど含まず、非常に良質である。

これらの黒曜石は、さらに細分ができる可能性がある。また、漆黒色のもののように、それぞれが差がないように見えても、同一の個体であるかは厳密には限定できない。したがって、上記の区分は、それぞれが違った岩脈に由来する可能性がある程度のレベルの分類である。

第3節　ま　と　め

本遺跡から出土した石器76点は、その出土状況からして、一括して扱えるものがかなり含まれるものと思われる。しかし、共伴関係が問題のある石器も含まれており、ここでは剝片剝離作業を、第9章では石器の形態からみた年代観を検討し、資料の一括性を考えてみたい。

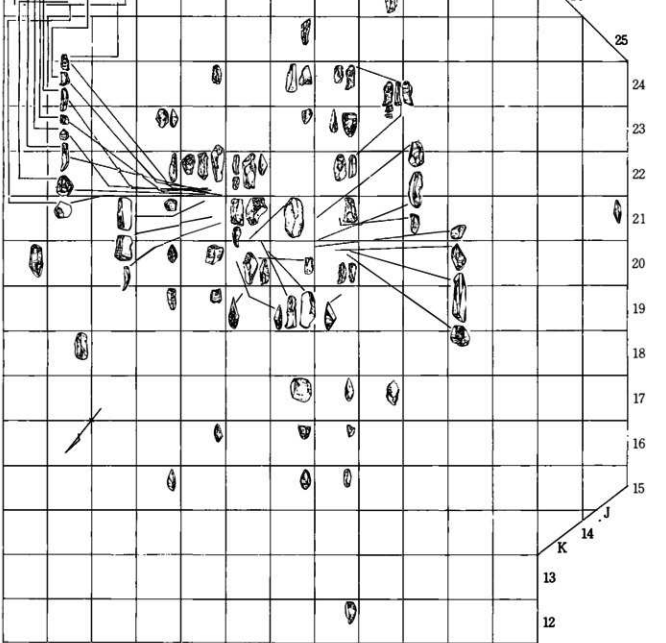
剝片剝離技術　本遺跡の出土遺物のうち、槍先形尖頭器を除く資料は、いずれも石刃技法との関連が考えられるものばかりである。そこでこれらの資料の剝離痕から、まず技術的な要素をぬき出してみよう。

まず、石器や剝片の正面の剝離痕をみてみよう（石核・打面再生剝片を除く）。主剝離面と同一方向の剝離痕のみをもつもの39点、主剝離面と逆方向の剝離痕を混えるもの16点、主剝離面と90°前後くい違う、横方向からの剝離痕をもつもの13点がある。このうち、同一方向、逆方向の剝離は、非常に大規模なものも必ず含んでおり、目的的な剝片を剝離した痕跡と思われる。しかし、そうした剝離とは思えない小規模なものがかなりみられる。非常に微小な剝離が打面付近に何枚かみられるものが12点ある。打面調整のように、かなりの範囲に連続的になされるものではないが、頭部調整と同様な性格のものであろう。また、これほど微小ではないが、打面付近に小剝離をもつものが17点ある。目的剝片剝離時のミスによるものかもしれないが、剝片の打面部付近の厚みを取ろうとした意図のものである可能性も考えられる。ここでは、両者を石核前面の調整剝離と考えておきたい。横方向の剝離は、やはり大規模なものと、小規模なものとがある。大規模なものは37と53にみられるが、他の剝離面に切られており、性格不明である。小規模なもののうち、24、45では、剝離作業面の稜上を右左に剝離したものであり、石刃の両縁がそろうように稜をまっすぐにする意図をもった、稜形成剝離と思われる。右核前面か側面かの違いはあったかもしれないが、ほぼ同様な性格のものであろう。これらの稜形成剝離は、41などのように自然面に対して行なわれ、剝片剝離の最初に行なわれたものもあったであろう。さらに21などのように、剝離作業の途上に行われたものもかなりあるようである。また、77にみられるように石核の側面調整も含まれよう。

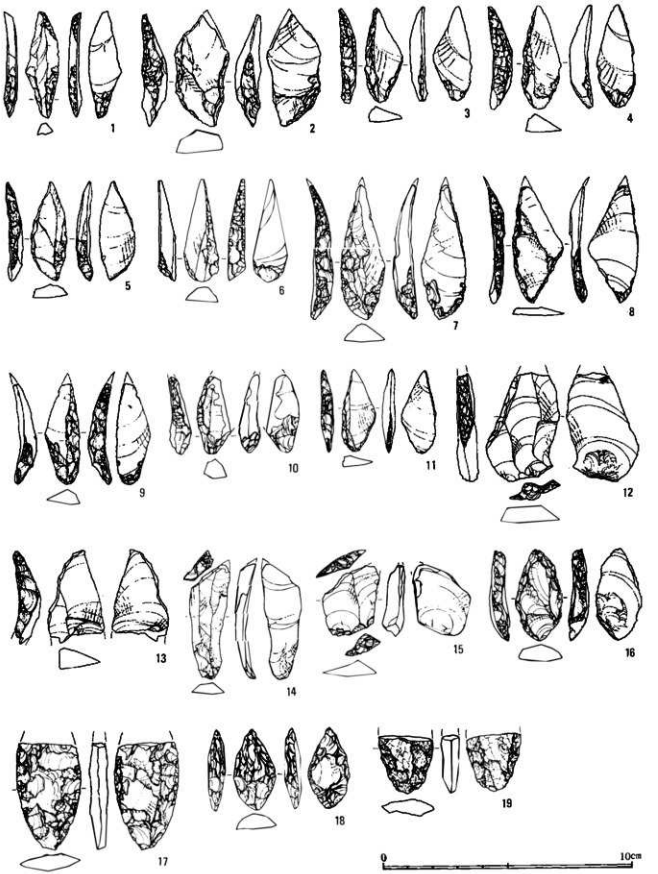
次に打面をみてみよう。打面を有する石器や剝片（石核・打面再生剝片を除く）は37点ある。このうち打面を上下二面もつものが3点あり、打面数は40となる。このうち自然面打面は4点、剝離面一枚のものが3点、複数

の大きな剝離面のものが13点、細部調整のあるものが20点である。打面が非常に小さかったり、打面前面が前の剝離でなくなっているものもあるが、細部調整がかなりの頻度でなされていたものとみてよいだろう。

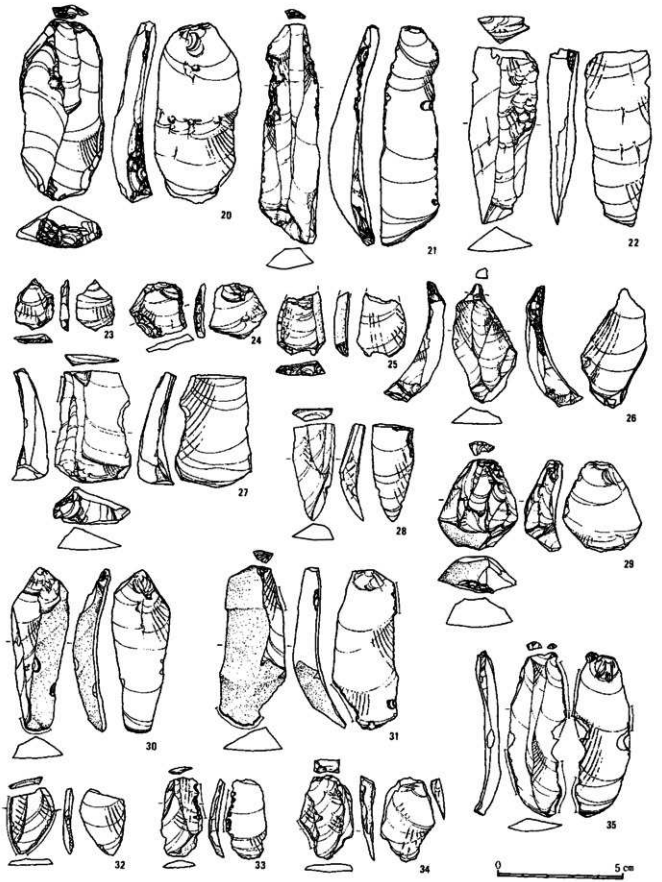
石核や打面再生剝片も加えて、技術的要素をみてみると、剝離作業当初や途上での稜形成剝離、石核側面の調整剝離、頭部調整を含む石核前面打面付近の調整剝離、打面細部調整を含む打面調整剝離、打面再生、両設打面と打面転移などである。目的剝片である石刃の大きさをみると、9㎝ほどのものから3㎝ほどのものまであり、打面再生さらには打面転移を頻繁に行うものと思われる。また、資料に残る自然面の状況からして、自然の転石を利用しているものと思われる。また、分割面と思われるような面を有するものはほとんどなく（35、53の横方向剝離はその可能性もある）、転石をそのまま一つの石核として剝離していったものと思われる。



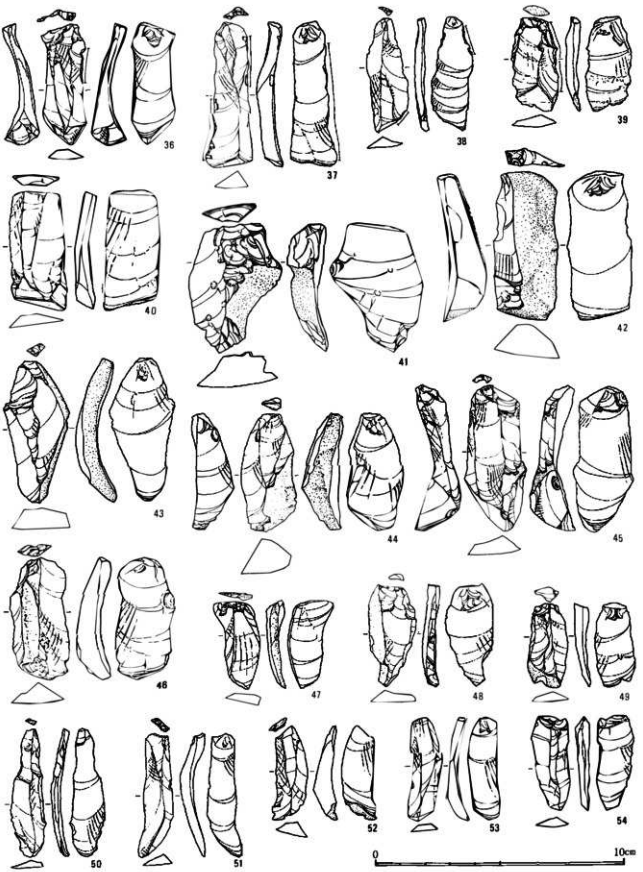
第 9 図　釈迦堂S－Ⅰ区　先土器時代遺物分布図



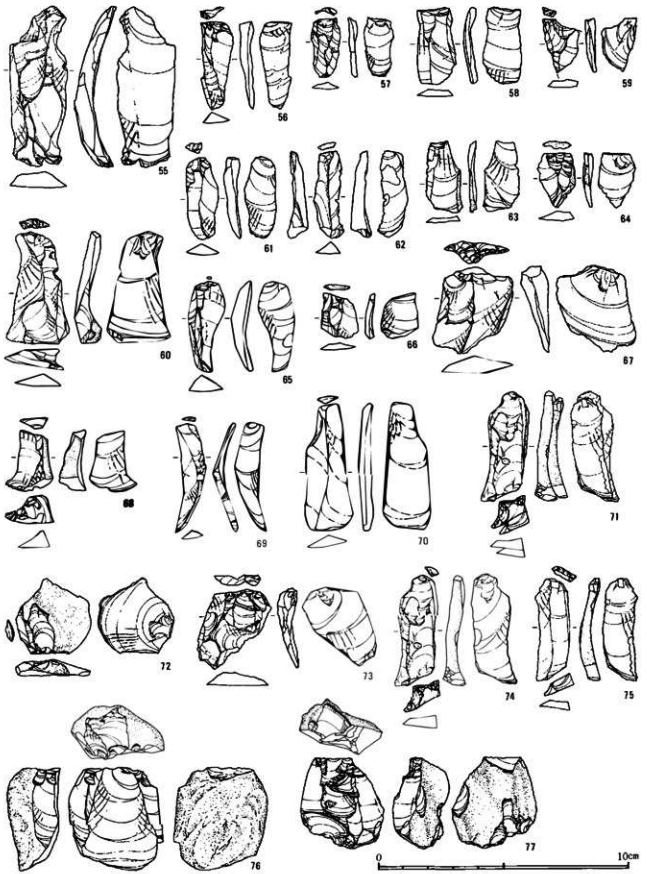
第10図　軟遊堂S－I区　先土器時代遺物（1）（2：3）



第 11 図　釈迦堂S－Ⅰ区　先土器時代遺物 (2)（2 : 3）



第 12 図　釈迦堂S－Ⅰ区　先土器時代遺物 (3)（２：３）



第 13 図　釈迦堂S－Ⅰ区　先土器時代遺物 (4)（2 : 3）

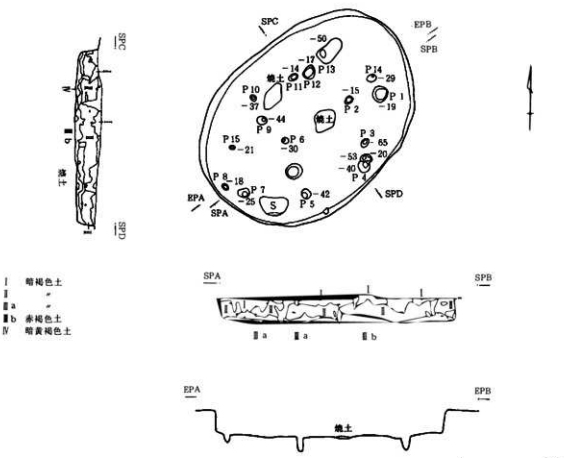
第３章　縄文時代早期

第　１　節　　早期の住居と出土遺物

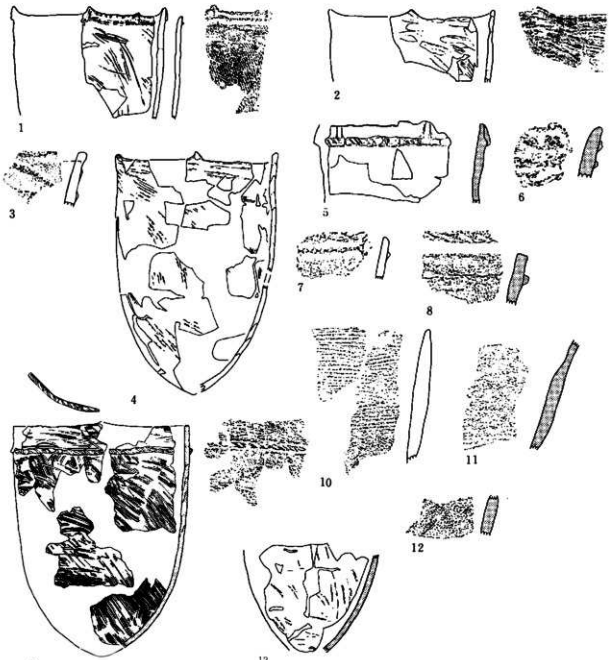
Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－11

早期末の住居である。ＳＫ－05を調査中床面を発見した住居である。長軸500cm、短軸355cmの住居である。主柱穴はＰ３ないしＰ４、Ｐ５、Ｐ９およびＰ10、Ｐ13であろう。これにＰ17とＰ７が付いたものではなかろうか。壁高50cmを測る良好な住居である。焼土は３ケ所に認められたが、中央部のものが炉と思われる。住居北側の壁近くに、花崗岩の石がほぼ床直にあり、これがおそらく住居に伴う板状石皿と思われる。ＳＢ－25、ＳＢ－16と重複関係をもつ。

出土土器のうち無繊維土器、断面三角形の隆帯の第１群土器１類が出土しており、これはやや古い様相の土器と思われる。また、図15－９のように水平隆帯にＶ字状沈線を付ける類例のないものであるが、これはＳＢ－36などに見られる含繊維のＶ字隆帯文土器と何らかの関係があるであろう。石器は石鏃７、ドリル１、棒磨石１、磨石６、打斧１、横刃石器１、礫器１、黒曜石84ｇ、水晶391ｇである。



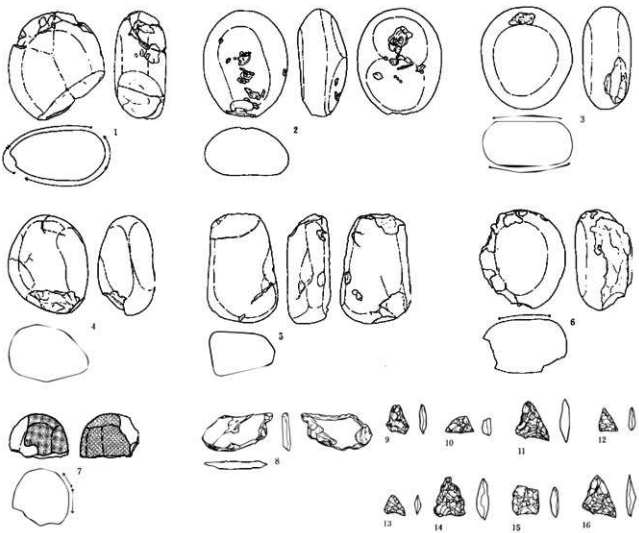
第 14 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－11（1：80）



第 15 図　釈迦堂S－I区　SB－11出土土器（1、2、4、5、9、13は1：6）

SB－11

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
27	15	1	No.2	1－1－e	無繊維　水平隆帯に縦の隆帯が付く、表に条痕が残る			
		2	No.12、30	1－7－a	無繊維　4単位の波状口縁隆帯なし			
29		3		1－1－2	無繊維　竪垂隆帯と水平隆帯がある。			
27		4	No.17、25、31、34	1－7－a	無繊維　2と同様な土器			
		5	No.7、8、35	1－12－c	含繊維　胴目水平隆帯に縦の隆帯が接続			
		6		1－9－e	含繊維　竪垂隆帯と水平隆帯がみえる。			
29		7		1－9－e	無繊維　断面三角形の隆帯			
		8		1－10－a	含繊維　口縁刻目、水平隆帯			
		9		1－10－a	含繊維　口縁刻目、水平刻目隆帯、波状口縁波頂部からV字状の沈線がある。			
		10	No.9	1－7－a	無繊維　条痕の明瞭なもの			
		11	No.18	1	含繊維　胴部			
		12	P－15	1	含繊維　胴部			
		13		1	含繊維　底部			



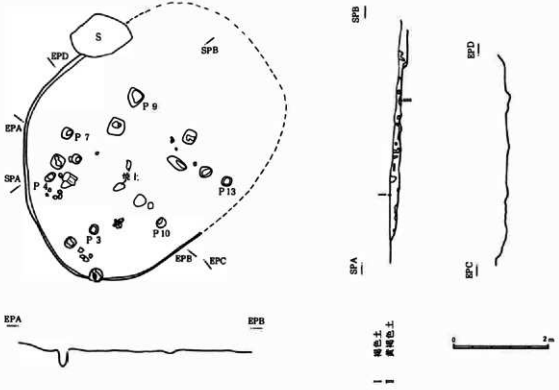
第 16 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－11　出土石器（1～8は1：4　9～16は1：2）

No.	名　称	出土地点	大　き　さ	重さ	備　考	No.	名　称	出土地点	大　き　さ	重さ	備　考
1	磨石	No.11	11.5×1.0×5.5			9	石鏃		1.0×1.1×0.3		黒曜石
2	磨石	上層	11.5×9.0×5.2			10	石鏃		0.8×1.4×0.5		黒曜石
3	磨石	No.10	10.5×9.5×5.0			11	石鏃		1.8×1.8×0.5		黒曜石
4	磨石	No.3	10.5×8.3×5.9			12	石鏃		1.2×1.1×0.3		黒曜石
5	磨石	No.2	11.3×7.5×4.7			13	石鏃	No.15	1.1×1.1×0.3		黒曜石
6	磨石	No.7	10.2×9.0×5.7			14	石鏃		2.2×1.6×0.6		黒曜石
7	磨石	No.16	4.6×6.6×6.0			15	石鏃		1.4×1.5×0.5		黒曜石
8	横刃石器	上層	3.7×7.3×0.9			16	石鏃		2.2×1.8×0.5		水晶

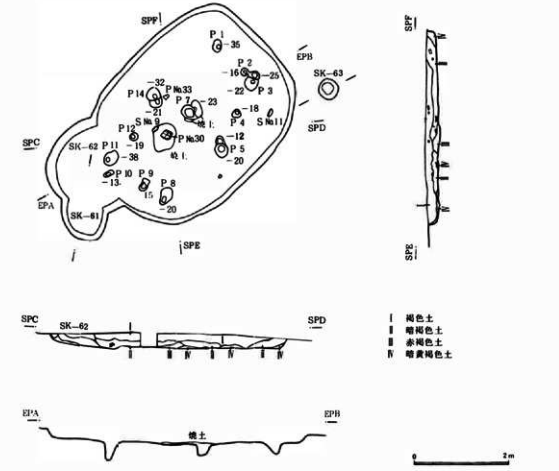
S－Ⅰ区　SB－13

集落のほぼ中央部にある住居址で、早期のSB－15、30と重複するのはもちろんのこと、中期の土坑と重なっている。住居プランは隅丸方形というより楕円形に近い。柱穴と思われるのはP9、P7、P4、P3、P10、P13でそれぞれ約40cmの深さである。炉址と思われる焼土の堆積は2ケ所に認められる。

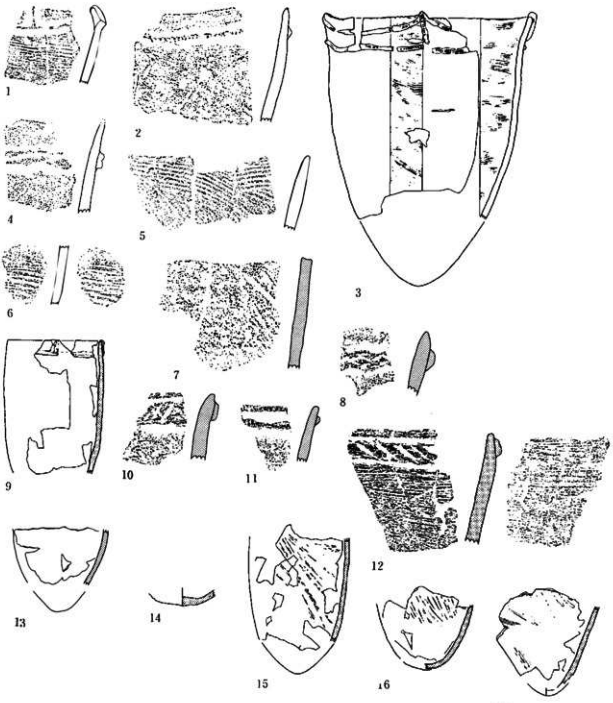
出土土器にはいくつか種類があるが、ほぼ完形品である図19－3は神之木台式土器そのものともいえるような土器である。石器は石鏃8、ピエス・エスキーユ2、ドリル1、綾磨石3、磨石6、打斧2、礫器5、黒曜石312g、水晶261gである。



第 17 図 釈迦堂S－I区 SB－13（1：80）



第 18 図 釈迦堂S－I区 SB－14（1：80）



第 19 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－13出土土器（6、9、13、14、15、16、17は１：６）

ＳＢ－13

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量 ℓ	備考
29	19	1		1－e	無繊維　内折口縁　水平隆帯と縦の隆帯が接続			
		2	№.3	3－a	無繊維　懸垂隆帯　隆帯上背圧痕？			
27		3	№.2	3－b	無繊維　懸垂隆帯＋水平隆帯＋縦隆帯が付く隆帯上背圧痕			
		4		6－a	無繊維　隆帯上に背圧痕を施し、その上に２次施文として沈線を施し、二重隆帯としている。			
		5	№.24	7－a	無繊維　波状条痕が見える。			
		6			無繊維　表裏条痕			
		7	№.25		含繊維　無隆帯土器			
		8	№.21	10－b	含繊維　隆帯上格子目文			

図版	観図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	19	9		1－9－c	含繊維 水平隆帯に縦の隆帯が接続			
		10		1－10－b	含繊維 一条の左傾斜ヌタが状隆帯			
		11		1－1－12	含繊維 一条のヌタが状隆帯			
		12	№11	1－10－a	含繊維 一条のヌタが状隆帯			
		13	№9	1	含繊維 底部			
		14	№5	1	含繊維 底部			
		15	№3	1	含繊維 底部			
		16	№2	1	含繊維 底部			
		17	№4	1	含繊維 底部			

S－I区 SB－14

SK－61・62土坑に切られているが、早期の遺構とは重複関係はもたない。住居プランは楕円形で長軸450cm、短軸350cmを測る。壁高約27cmである。柱穴と思われるピットは6箇ある。P1、P3、P5、P8、P11、P14、である。炉址と思われる焼土は2ヶ所ある。ことに9の土器は焼土の直上にあった。

土器のうち1は隆帯が欠損しているが、おそらくワラビテ文化するものと思われる。隆帯上は貝殻刻目である。他の2、3は隆帯上の施文具が不明であるが、隆帯モチーフは古挌である。石器は石鏃3、ドリル1、稜磨石2、磨石6、礫器1である。フレイクは黒曜石31g、水晶144gである。ここでも水晶の量が多い。

SB－14

図版	観図	挿図No.	出土地点	分類	様	高さ	容量ℓ	備考
27	20	1	16、17、18、＋SB－07	1－2－c	無繊維 断三角隆帯に貝殻腹縁刻目、懸垂隆帯、水平隆帯波底部に縦の隆帯、おそらく水平隆帯はワラビテ文化するものと思われる。			
29		2		1	無繊維 2段の懸垂隆帯で波頂部でワラビテ文化か？隆帯上の施文具は不明			
		3		1	無繊維 懸垂隆帯に水平隆帯が付く			
		4		1	無繊維 隆帯上の施文具は不明			
		5		1－1	無繊維 表裏条痕			
		6			無繊維 口縁部に刻み			
		7		1－9－e	含繊維、懸垂隆帯＋縦の隆帯			
		8	№19	1－9－b	含繊維、刻目隆帯モチーフ			
		9	№30	1－7－b	含繊維、隆帯なし			
		10		1	含繊維、条痕をのこす			
		11		1	含繊維			
		12	№25、31	1	含繊維、底部			
		13		1	含繊維、底部			
		14	№33	1－7－b	含繊維、口辺、表裏条痕			

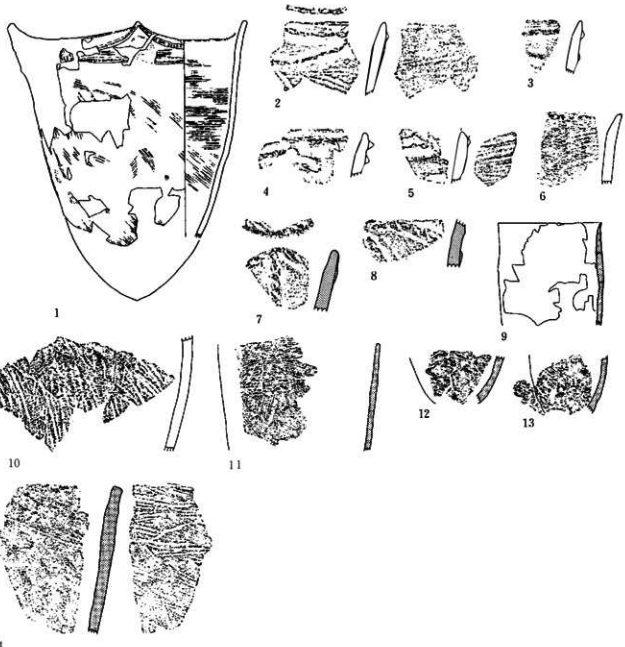
SB－14 出土石器

№.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考	№.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考
1	磨石	№1	8.2×9.0×5.3		凹あり	7	稜磨石	№9	14.6×6.5×5.3		
2	稜磨石	№7	14.0×8.0×5.8			8	礫器		10.3×6.7×2.5		
3	磨石	P2	8.2×5.2×3.3			9	石鏃		1.7×1.4×0.5		水晶
4	磨石	№6	5.2×4.6×2.8			10	石鏃		1.9×1.6×0.7		
5	稜磨石	№11	18.0×8.0×6.3			11	石鏃		1.3×1.2×0.3		
6	稜磨石	№5	15.0×8.5×4.3			12	石錐？		2.2×0.7×0.6		黒曜石

S－I区 SB－15

SB－15は北側をSB－30、北西側でSB－13と重複関係をもっている。SB－15は東壁寄りに炭火材があり、また炭火物の出土が多いことおよび床面に焼土の広がりがあることから、火災を受けた住居ではないかと思われる。柱穴と思われるピットはP4、P5、P7、P15、P17である。またS－1と2は破損しているが、住居址に設置された石皿と思われる。

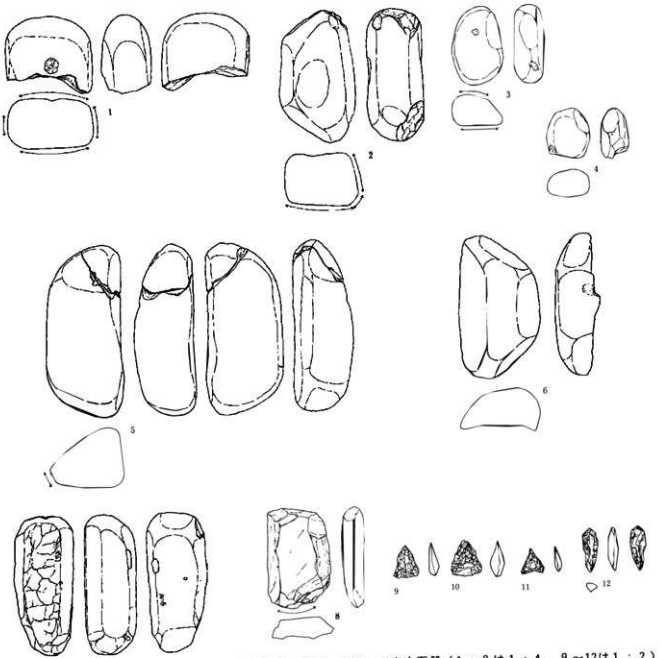
出土遺物は極く少ない。土器は1がおそらくワラビテ文化する隆帯で、SB－17や54のそれと近いものであろう。石器は石鏃4、ドリル1、稜磨石1、磨石2、打斧1、礫器2、石皿1、黒曜石61g、水晶95gである。



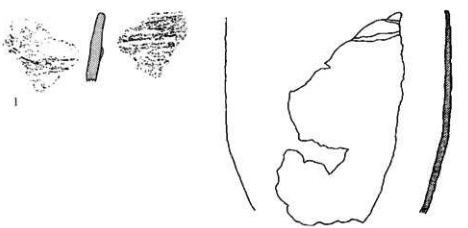
第 20 図　釈迦堂S－I区　SB－14出土土器（1、9、11、12、13は1：6）

SB－15

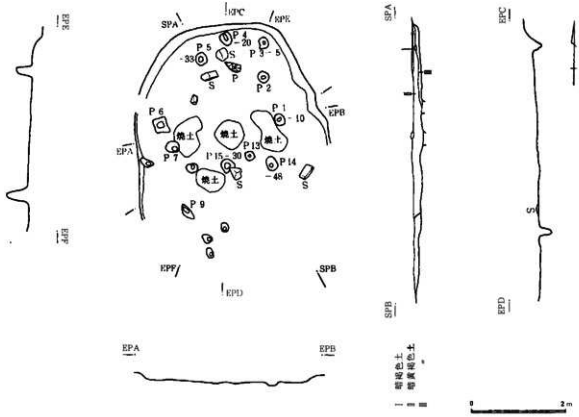
図版	掲図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
30	22	1	№2	I－13	含繊維、隆帯が付く、隆帯上刻目なし			
		2		1	含繊維、表面に繊維のみえるザラザラした器面			
					他に早期の粘土塊出土			



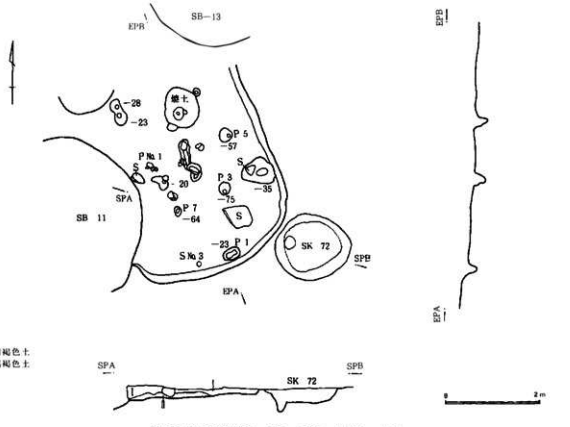
第 21 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－14出土石器（1～8は1：4、9～12は1：2）



第 22 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－15出土土器（2は1：6）



第 23 図 駅遺堂S－1区 SB－15（1：80）

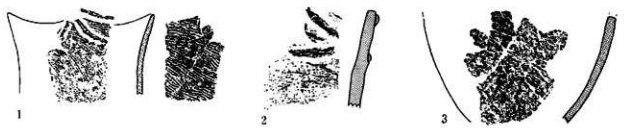


第 24 図 駅遺堂S－1区 SB－16（1：80）

S－Ⅰ区　SB－16

SB－16は北側をSB－13と西側をSB－11と重複しており、北西の方向では住居址の範囲が不明である。柱穴と思われるピットはP5、P3、P2のみで他は不明である。炉址の位置が、住居址の中央部より北側に偏在する。板状石皿が南側の壁寄りにある。

出土遺物は極く少ない。1は懸垂隆帯が下がるもので類例は少ない。また2は小片であるが、含繊維土器で隆帯がワラビテ文化するものと思われ、SB－17、54と同類のものであろう。石器は石鏃4、コア1、磨石5、打斧2、礫器1である。フレイクは黒曜石120g、水晶110gである。



第25図　駅遊堂S－Ⅰ区　SB－16出土土器（1、3は1：6）

SB－16（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
30	25	1	No.2	1－9－e	含繊維、表裏条痕が見える。懸垂隆帯			
		2		1－9－b	含繊維、懸垂隆帯と水平隆帯が付く、あるいはワラビテ文化するか？			
		3	No.1	1	含繊維、条痕がみえる。			

S－Ⅰ区　S－17

SB－17はSB－18によって貼られた住居である。SB－17は長軸520cm、短軸300cmの楕円形をしたプランである。床面に地山の花崗岩が露頭している。炉址と思われる焼土の広がりを検出できなかった。柱穴と思われるピットは確定できないが、P7、P9、P12、P10、P15、P19、P22などが柱穴と思われる。

出土土器は4、5、9がまとまって、P15に近接して出土している。これは含繊維の隆帯がワラビテ文化するもので、9の断面三角形隆帯に貝殻刻目を施すものと伴出していることから、同時期のものと思われる。石器は石鏃5、稜磨石1、磨石1、石皿1、打斧1、礫器2である。フレイクは黒曜石90g、水晶100gである。

S－Ⅰ区　SB－18

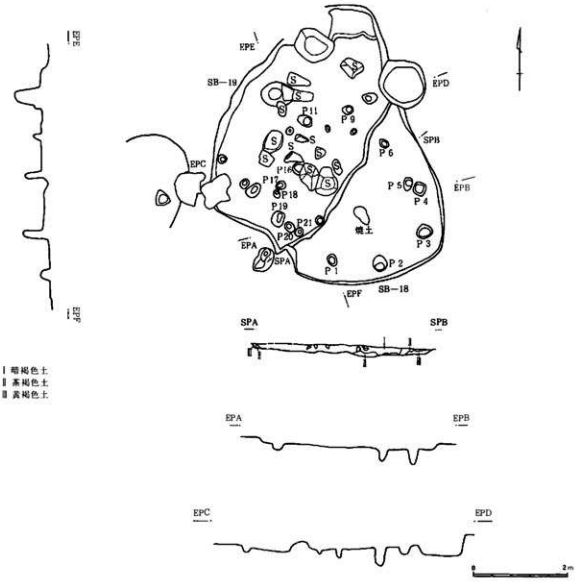
SB－18はSB－17の上に床を貼った住居である。壁は南側半分しか判明しなかったが、ほぼ隅丸方形のプランである。柱穴はSB－17と重複しているが、P1、P2、P5、P6、P10、P16、P20と思われる。このうち、P1とP6は浅いので柱穴かどうか疑われる。炉址は住居址の中央部に焼土の広がりある地床炉である。

出土土器のうち10は懸垂隆帯上に貝殻背圧痕を施しており、時期決定の良好な資料である。石器は石鏃2、ピエス・エスキーユ1、磨石7、打斧3、磨斧1、石皿2、礫器3、玉石1である。黒曜石65g、水晶59gである。

S－Ⅰ区　SB－19

住居址の切り合い関係はない。床面も壁も軟弱であったが、長軸420cm、短軸340cmの不定形プランである。炉址と思われる焼土の検出できなかった。柱穴と思われるピットはP1、P2、P5、P6であると思われるが、他の住居のピットに比べて大きい。

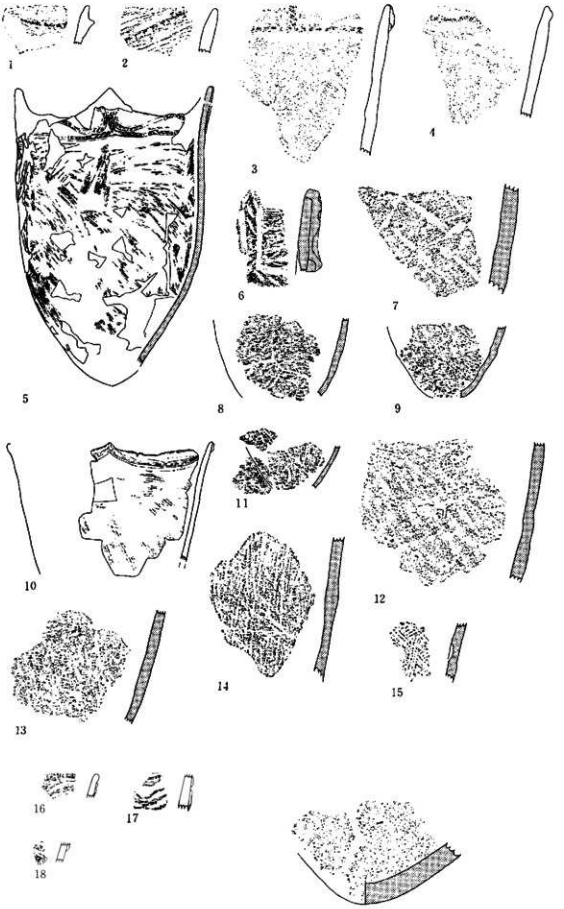
出土遺物は少なく、土器も口辺部破片もなく時期決定の資料にならない。石器は石鏃2、ドリル1、コア1、石匙1、稜磨石5、磨石2、石皿3、礫器1で、黒曜石48g、水晶17gである。



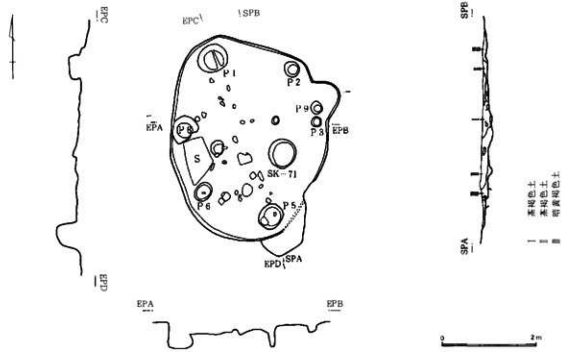
第 26 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－17・18（1 ：80）

ＳＢ－17、18、19

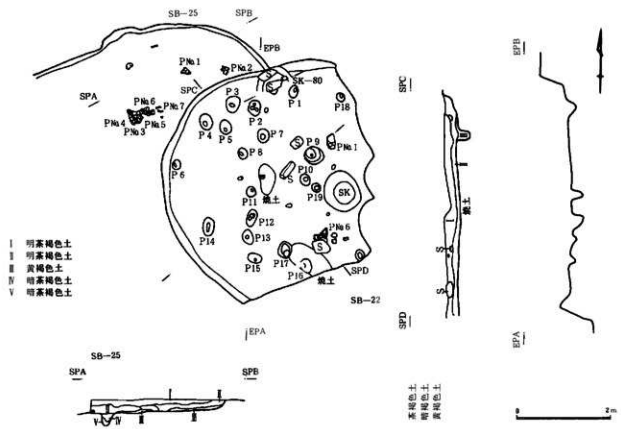
図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　類	文　様	高さ	容量㎖	備考
30	27	1	ＳＢ－17	1－1－e	無繊維、懸垂隆帯、隆帯上ヘラ刻目か貝殻刻目か不明			
		2		1－2－e	無繊維、Ｖ字状隆帯、条痕を残し、隆帯上貝殻腹縁刻目			
		3		1－1－a	無繊維、水平隆帯に縦の隆帯が接続			
		4	№5	1－1－a	無繊維、3と同一個体か？			
27		5	№5	1－9－b	含繊維、水平隆帯に縦隆帯が付き、懸垂隆帯は波底部から下がり、波頂部でワラビテ文化する。			
30		6		1－9－b	含繊維、水平隆帯に縦隆帯と懸垂隆帯が付く			
		7		1	含繊維、菱形痕の段が残る。			
		8		1	含繊維、胴下部			
		9		1	含繊維、胴下部			
27	27	10	ＳＢ－18	1－3－a	無繊維、懸垂隆帯、隆帯上背圧痕			
		11		1	含繊維			
		12	№2	1	含繊維、菱形痕の浅い溝が残る。			
		13	№2	1	含繊維、12と13は同一個体			
		14		1	含繊維			
		15		1	含繊維、格子目状条痕			
31	27	16	ＳＢ－19	1－6－b	無繊維、隆帯上に沈線あるいは結節沈線			
		17		1	無繊維、隆帯上に刻目			
		18		1－6－a	無繊維、隆帯上に貝殻腹縁刺突による沈線			



第 27 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－17、18、19出土土器（5、8、9、10は1：6）



第 28 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－19（1：80）

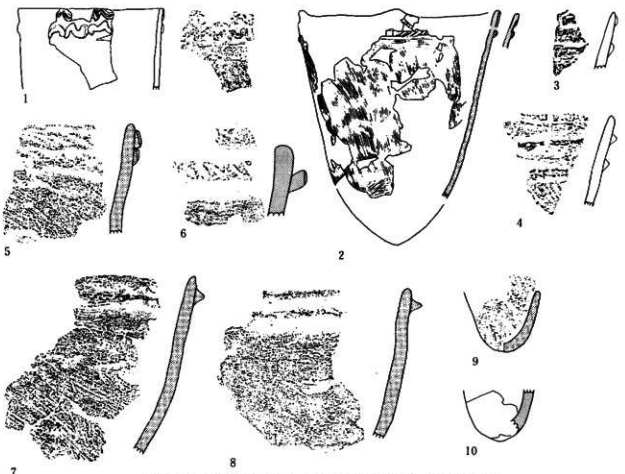


第 29 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－22・25（1：80）

S－Ⅰ区　SB－22

SB－22は北側を前期のSB－06によって切られ、西側を小川によって流失し、南東側はSB－28を切っている。住居址の全体プランを知ることはできないが、およそ直径800cmの円形プランであると思われる。地床炉は2ケ所あり、柱穴と思われるピットがいくつかあり、あるいは建て替えがあったと思われる。

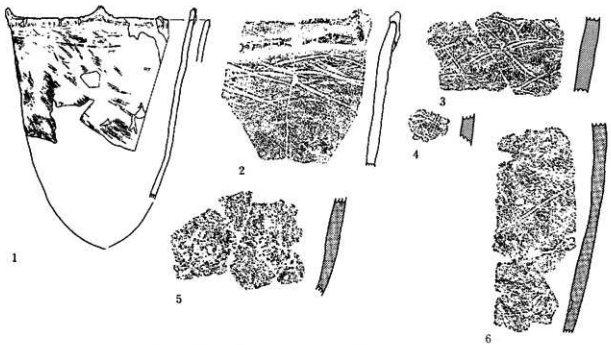
出土土器のうち注目されるのは1と2であろう。1は口唇部に波状の隆帯（小単位）の上に貝殻背圧痕はない（1次施文消略）が、2次施文としての貝殻腹縁の刺突を行っている。また2は含繊維隆帯文土器で、波頂部に三角状隆帯を施すものである。また尖底のミニチュア土器が2個体も出土している。石器は、石鏃14、ドリル4、ピエス・エスキーユ1、稜磨石2、磨石8、石皿1、礫器4、打斧1、磨斧1、黒曜石180g、水晶72gである。



第30図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－22出土土器（1、2は1：6）

SB－22（前期）

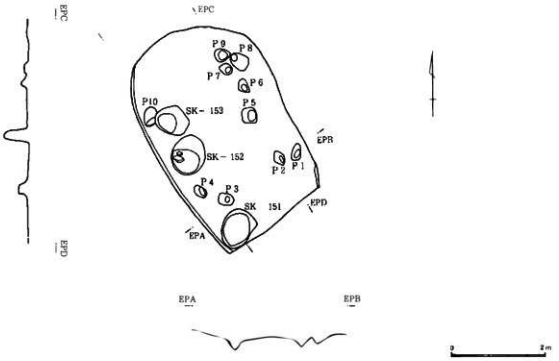
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様		容量ℓ	備考
31	30	1	SB－22	1－6－a	無繊維、口辺部波状隆帯、この隆帯は切れ切れである。隆帯上は磨平にされ、貝殻腹縁による刺突がある。本来なら、貝殻背圧痕があるはずだが、本例にはない。			
		2	No.9	1－9－e	含繊維、水平隆帯の上に三角形の隆帯が付き、その中央に縦の隆帯が付くものと思われる。			
		3		1－9－e	無繊維、2条の隆帯が見える。			
		4		1－11－a	無繊維、水平2条の隆帯が見える。			
		5	No.5、6	1－11－a	含繊維、水平2条のタガ状隆帯			
		6		1－10－a	含繊維、高い隆帯が付く、水平タガ状隆帯、格子目状刻目			
		7	No.7	1－13－a	含繊維、水平タガ状隆帯			
		8		1－13－a	含繊維、水平タガ状隆帯			
		9		1	含繊維、ミニチュア尖底土器			
		10	No.7	1	含繊維、ミニチュア尖底土器			



第 31 図　釈迦堂S－I区　SB－25出土土器（1は1：6）

SB－25（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	分様	高さ	容量ℓ	備考
27	31	1	No.4、5、8	I－2－aorf	無繊維、水平隆帯とも懸垂隆帯ともいえる隆帯にヘラ刻目が付く波底部に縦の隆帯あり。			
31		2	No.1	I－2－b	無繊維、水平隆帯に縦の隆帯が付く、格子目状沈線がみえる。隆帯ヘラ刻み。ただし隆帯は台形をなす。			
		3	No.9	I	含繊維、格子目状沈線			
		4	No.2	I	含繊維、格子目状条痕			
		5	No.7	I	含繊維、胴部			
		6	No.7	I	含繊維、胴部			



第 32 図　釈迦堂S－I区　SB－24（1：80）

S－Ⅰ区　SB－25

SB－25は北側はSB－11とSB－22と重複している。SB－22によって切られていることは、確かだが、SB－11との重複関係は不確実である。SB－11の拡張と見るには無理がある。

柱穴と思われるピットはP1とP2のみであり、焼土は検出できず、炉址は不明である。出土土器は1、2ともに隆帯にヘラ刻みを加えたもので、SB－11の1に器形文様ともに近似したもので、同一型式であることは疑いようがない。このことからSB－25とSB－11は同一時期の住居と思われる。

S－Ⅰ区　SB－24

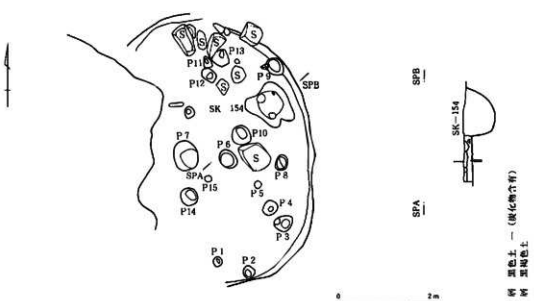
SB－24は南側を石埋設坑（古墳の掘石を埋設した近・現代の遺構）によって切られている。また住居内に中期の土坑SK－151、152、153が切り込んでいる。柱穴はP2、P5、P8、P10、P3などであろう。炉址と思われる焼土の広がりは検出できなかった。

出土遺物は極く少なく、土器は含繊維土器の胴部の小片のみで図示しなかった。石器は石鏃3、稜磨石1、磨石3、黒曜石27g、水晶43gである。

S－Ⅰ区　SB－26

住居址の西側を小川によって流失している。また南側はSB－30と重複している。柱穴と思われるP1、P4、P8、P17、P13ではないかと思われる。炉址と思われる焼土の広がりはない。床面に地山に花崗岩が露頭している。

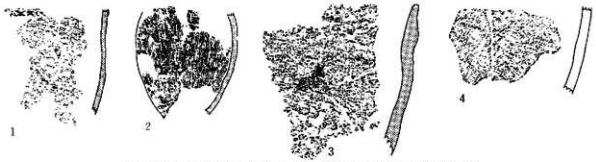
出土遺物は極く少ない。土器は有文の口辺部がないため、時期決定は困難である。石器は石鏃3、ドリル1、ポイント1、磨石3、磨斧1、打斧1、礫器7、黒曜石74g、水晶84gである。



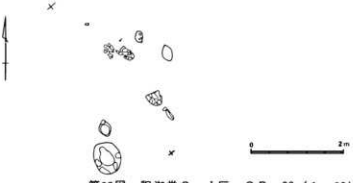
第 33 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－26（1：80）

SB－26（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量g	備考
32	34	1		Ⅰ	含繊維、隆帯上刻Ⅱ			
		2		Ⅰ	含繊維、口辺部を欠く			
		3		Ⅰ	含繊維、無隆帯の口辺			
		4		Ⅰ	無繊維、胴部			



第 34 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－26出土土器（1、2は1：6）



第35図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－30（1：80）

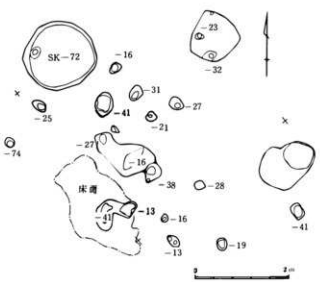
S－Ⅰ区　SB－30

SB－15、13、29と重複関係をもち、しかも小川によって、住居中央部を流出した住居である。SB－15と重なるわずかに確認された壁から住居址と推定したもので、資料的に希薄な住居址である。

出土遺物は2が小川の中にあり、横だおしとなっており、その下半分は埋設し、上半分は水の影響を受けたものと思われる。石器は磨石1、黒曜石27g、水晶26gである。

SB－30（早期）

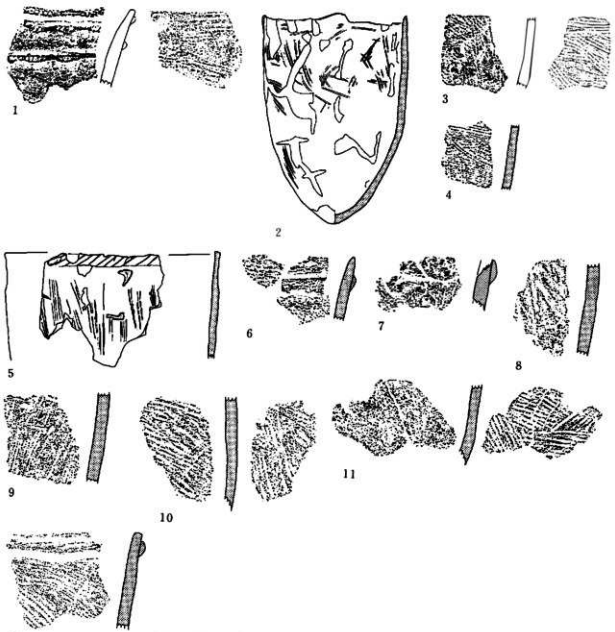
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
32	37	1	SB－30	1－3－i	無繊維、水平隆帯上背圧痕　真条痕			
		2		1－7－b	含繊維、無隆帯			
		3		1	無繊維、胴部片			
		4		1	含繊維、胴部片			
		5		1	無繊維、隆帯を持たず。口縁部に左頸刻目を付けている。			
		6		1－13－a	含繊維、タガ状隆帯			
		7	No.6	1	含繊維、一条のタガ状隆帯			
		8	No.1	1	含繊維、胴部			
		9		1	含繊維、胴部			
		10	No.5	1	含繊維、胴部			
		11		1	含繊維、胴部真直に条痕が著しい。			
		12	SB－30	1－13－a	含繊維、タガ状隆帯が付く。			



第 36 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－32（1：80）

S－Ⅰ区　SB－32

SB－19の東、SB－33の西に検出された床面をもって、住居址としたが、全体のプランは不明である。いくつかのピットはあるが、柱穴は確定できない。

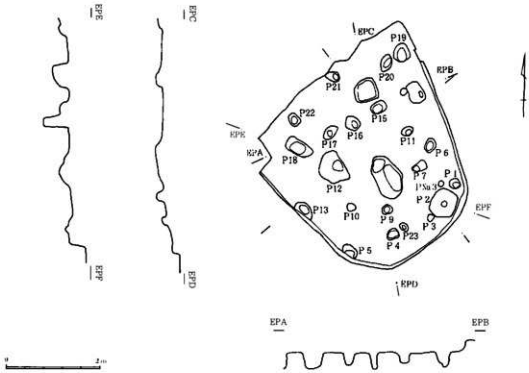


第 37 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－30出土土器（2、5は1：6）

Ｓ－Ⅰ区 ＳＢ－33

この住居址は、1号墳の墳丘の下から検出されたもので、北側は石埋設坑によって切られている。長軸は不明だが、短軸400cmを測る楕円形プランと思われる。柱穴と思われるピットは壁近くをめぐる。炉址と思われる焼土の広がりは検出されていない。

出土遺物は少なく、前期のものも多少あり時期決定に困難であるが、早期の住居址としておく。石器は石鏃1、磨石1、磨石4、磨斧1、黒曜石35ｇである。



第 38 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－33（1：80）

第 39 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－33出土土器

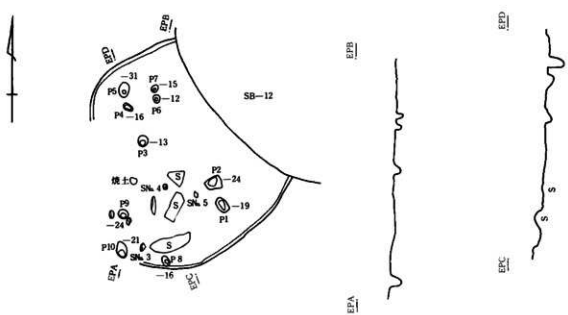
ＳＢ－33（早期）

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　類	文　様	高さ	容量ℓ	備考
	39	1		Ⅰ－13－ａ	含繊維、２本の隆帯がみえる			
		2		Ⅰ	含繊維、隆帯あり			
		3		Ⅰ	含繊維			
		4	No.4	Ⅰ	含繊維、制部片			

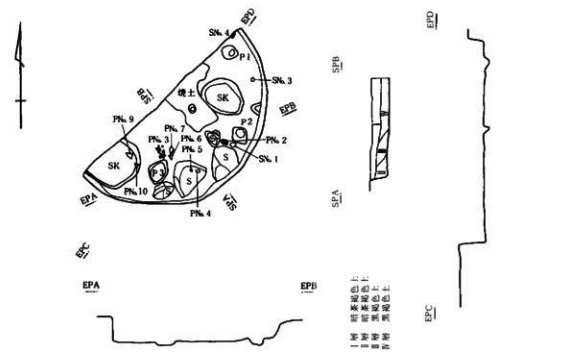
Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－34

北東側をＳＢ－12によって切られた住居である。確認面が床面とほとんど同一であったため、壁高はほとんどない。また床面には地山の花崗岩が露頭している。柱穴と思われるピットはＰ１とＰ５と思われる。焼土はわずかに南側にある。

出土遺物は石器の石鏃３、磨製石２、磨石２、礫器５、黒曜石64ｇ、水晶30ｇである。



第 40 図　駅遺堂S－1区SB－34　（1：80）



第 41 図　駅遺堂S－1区SB－35（1：80）

SB－35　S－1区

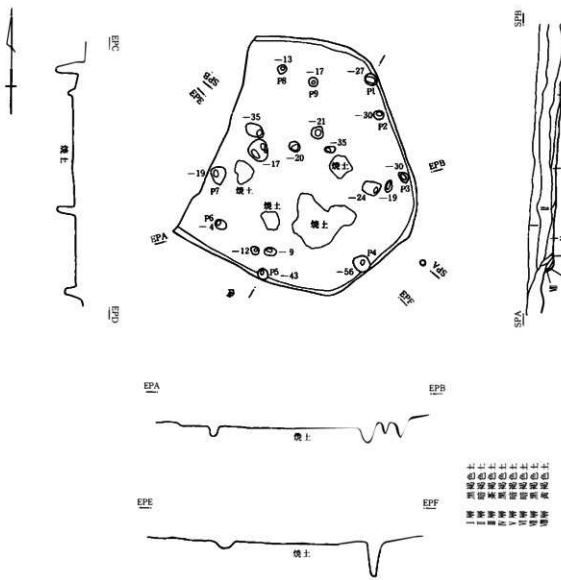
北側を石埋設坑によって切られ、また住居址内に2つの土坑が切り込んでいる。さらに床面には地山の花崗岩が露頭している。柱穴と思われるピットはP1、P2、P3が確認されている。炉址と思われる焼土の広がりは、範囲が広い。

出土遺物には中期や前期のものもあるが、わずかな早期期の資料および住居形態から早期の住居址とした。石器は磨石2、礫器3がある。黒曜石12g、水晶10gである。

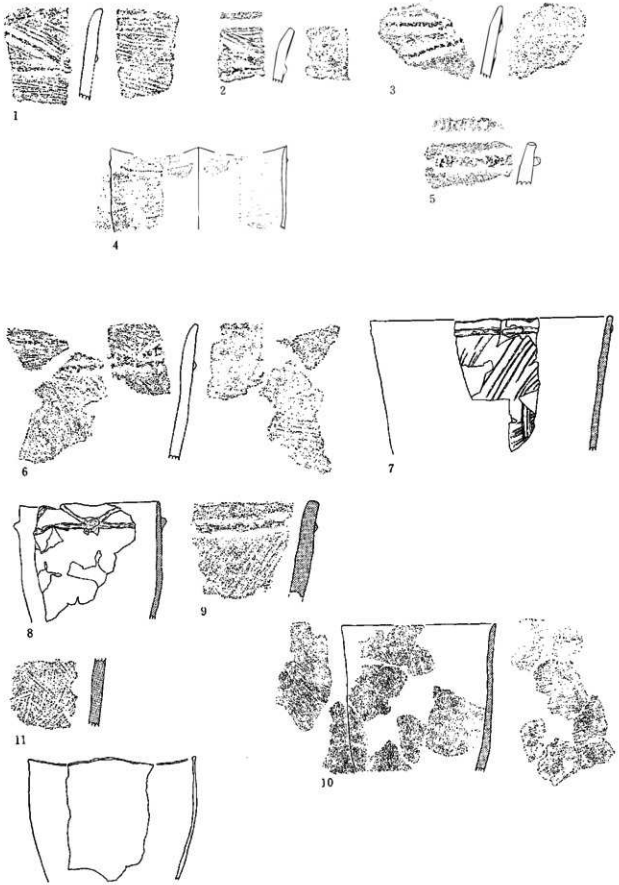
S－Ⅰ区　SB－36

重複のない住居址である。短軸520cm、長軸は不明な不定形プランをもった住居址である。柱穴はP1～P6と思われるが、住居址内にいくつものピットがある。焼土は4ケ所に認められている。早期の住居址では焼土の検出されていないものもあるが、このように数カ所に焼土の認められるSB－11、14、15、22などがある。

出土遺物は豊富である。図43－1、3、6に見られるV字状隆帯をしたものなは、条痕を著しく残す点および、6に見られるように、器面に貝殻腹縁文を施す点などより古拙な様相を持っているといえよう。このようにSB－36は、S－Ⅰ区の早期住居群の中でもより古い位置を持つと思われる。石器は石鏃6、ピエス・エスキーユ2、磨石5、磨石10、石皿1、礫器3、打斧2で磨斧が2本出土している。早期の住居址からはいくつか磨斧が出土しているが、確実な早期の磨製石斧はこのSB36とSB－50のものであろう。いずれも小型で片刃のものである。類例に乏しいが、長野県駒ケ根市舟山遺跡に同型式のものがある。黒曜石は44g、水晶185gと早期でも時間的に古い住居址ほど水晶の割合が多い。



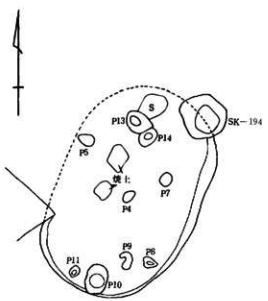
第42図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－36　（1：80）



第 43 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－36出土土器（4、2、8、10、12は1：6）

ＳＢ－36（早期）

図版	第図	第図No.	出土地点	分類	分析	高さ	容量ℓ	備考
32	43	1		1・2 e	無繊維、断面三角形V字状隆帯、貝殻刺目、条痕がよく残る。			
		2		1 2 e	無繊維、断面三角形V字状隆帯、貝殻刺目、条痕がよく残る。			
		3		1 2 e	無繊維、断面三角形貝殻刺目隆帯、この隆帯はソウビテ文化する可能性あり			
		4		1・2・a	無繊維、懸垂隆帯に貝殻刺目、表裏とも条痕をよく残す。			
		5		1 1	無繊維、断面が丸い隆帯が付く、S 14・25の2に類似する。			
		6		1－2－e	無繊維、断面三角形貝殻刺目V字状隆帯、V字状隆帯の中央部に貝殻腹縁の刺突がみえる。			
		7		1－13－a	含繊維、タガ状隆帯刺目なし			
		8		1 9 e	含繊維、V字状隆帯刺目なし			
		9		1・13・a	含繊維、タガ状隆帯			
		10	No.2	1 12・b	含繊維、無隆帯で表裏条痕			
		11		1	含繊維、格子目状条痕			
		12	No.7	1 14	無繊維、無文の東海系土器			

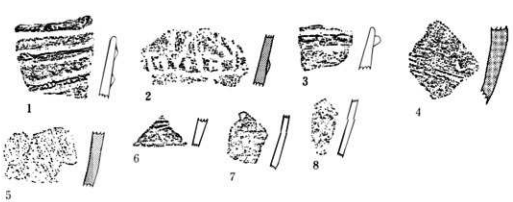


第 44 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区ＳＢ－44（１：80）

Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－44

ＳＸ－01の直下にあった早期の住居址である。住居址の柱穴と思われるピットはＰ６、Ｐ７、Ｐ５と思われるが、楕円形プランの住居址の柱穴の位置としてはＳＢ－17のように、よく対応しない。炉址と思われる焼土は２ケ所認められている。北側は前期のＳＢ－43と重複しているが、床面の高さは、ほぼ同一である。

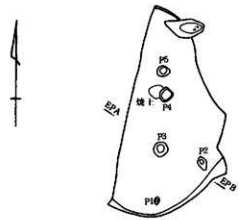
出土土器は小片ばかりであるが、１と３は断面三角形の隆帯に背圧痕を加えたものである。２は三角状隆帯を施すもので、好例はＳＢ－21にあるが、住居址の時期としては、１と３を指標としたい。また東海系土器の小片も出土している。石器は石鏃７、コア１、ピエス・エスキーユ１、スクレイパー１、磨石４、玉石１、打斧１、礫器３である。黒曜石273ｇ、水晶62ｇが出土している。



第 45 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　ＳＢ－44出土土器

SＢ—44（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
32	45	1		1－4 c？	無繊維、水平隆帯か２本みえる。隆帯上背圧痕			
		2		1－9 e	含繊維、タガ状隆帯の上に三角状隆帯をみえる。三角の中央に縦隆帯			
		3		1－3－i	無繊維、断面三角形隆帯に背圧痕			
		4		1	含繊維、制部			
		5		1	含繊維、制部			
		6		1－14 b	無繊維、制部			
		7		1－14－g	無繊維、制部			
		8		1－14－g	無繊維、制部			



第 46 図 駅逓堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ—46（１：80）

Ｓ－Ⅰ区 ＳＢ—46

ＳＢ—46は南壁をわずかに残し、東辺は中期の土坑等の撹乱が著しい。また北西側はＳＢ—41の前期の住居址によって切られている。床面をわずかに残すのみで、柱穴と思われるピットは確定できない。炉址と思われる焼土はほぼ住居の中央にある。

出土土器は、その基準となる口辺部隆帯をもつものが少ない。１、２、３は断面三角形の隆帯をもつが、その上に施文されていないので、所属時期の推定が困難である。また４のように格子目状沈線をもつ破片もあることから、より新しい資料ではない。石器は石鏃３、磨石１、玉石１、打斧１、礫器４、黒曜石45ｇ、水晶143ｇである。この住居でも水晶の量が上まわっている。

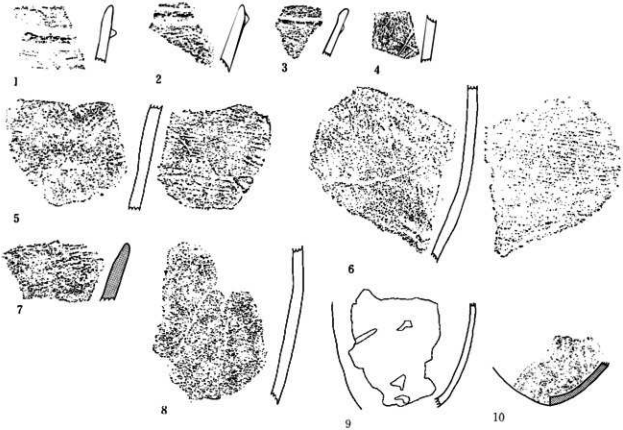
ＳＢ—46（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
34	47	1		1	無繊維、隆帯上施文具不明			
		2		1 2 g	無繊維、隆帯上施文具不明			
		3		1 2 g	無繊維、断面三角形、具沈線口			
		4		1	無繊維、制部に格子目状沈線			
		5	№4	1	無繊維、表裏条痕			
		6	SB 39	1	無繊維、表裏条痕			
		7		1 7 b	含繊維、無隆帯口辺			
		8		1	無繊維、制部			
		9	№5	1	無繊維、制部			
		10	№1、2、3	1	含繊維、底部			

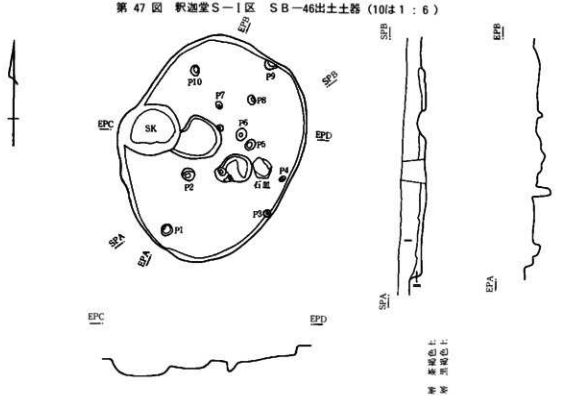
Ｓ－Ⅰ区 ＳＢ—48

住居址の切り合いはもたないが、中期の土坑によって切り込まれている。長軸470㎝、短軸360㎝の楕円形プランである。柱穴は住居プランと対応しているとは思えない。炉址の痕跡は確認されていない。住居付き石皿は東壁寄りに存在した。

出土土器は水平隆帯の中に波状隆帯を２本施すものがあるが、上端の水平隆帯は省略されている。この破片からその所属時期を推定することができる。石器は石鏃１、スクレイパー１、稜磨石１、磨石３、打斧２、礫器１でフレイクは黒曜石38ｇ、水晶24ｇである。



第 47 図　駅遺堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－46出土土器（10は１：６）

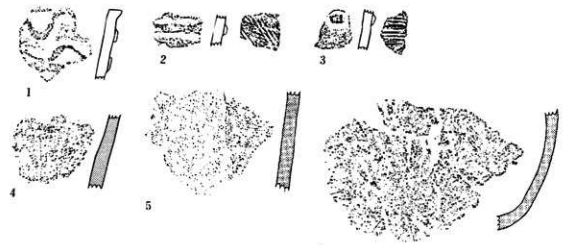


第 48 図　駅遺堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－48　（１：80）

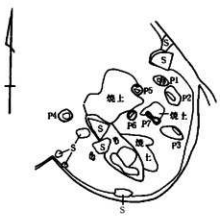
ＳＢ－48（前期）

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	残存	特記事項	備考
34	49	1		Ⅰ５ａ	無繊維、平行隆帯の間に２本の波状隆帯、隆帯に作痕			
		2		Ⅰ４	無繊維、隆帯上作痕			

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		3		1 - 4	無繊維、降帯			
		4	No.1	1	含繊維、胴部			
		5	No.1	1	含繊維、胴部			
		6	No.1	1	含繊維、底部			



第 49 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－48出土土器

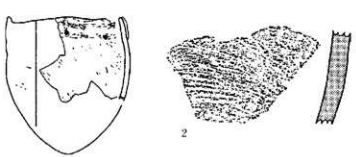


第 50 図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－49（1：80）

S－Ⅰ区　SB－49

北側はSB－31で失われているが、直径350cmのほぼ円形プランの住居址である。床面に地山の花崗岩が露頭している。住居址プランと対応する柱穴はP1、P2、P3、P4である。焼土の広がりは広く、床面の大部分を占め、これらが地床炉の痕跡であろう。

出土土器は少ない。1は断面台形の隆帯に貝殻背圧痕を施しているので、SB－18などと同時期のものであろう。石器は石鏃3、黒曜石20g、水晶4gが出土している。SB－31で管状玉が出土しているが、これはおそらくSB－49に伴うものであろう。



第 51 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－49出土土器（1は1：6）

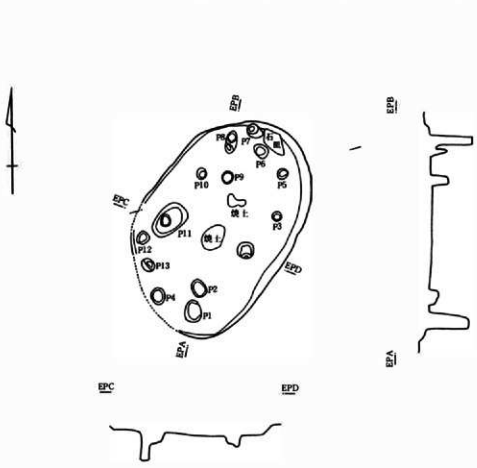
SB－49（早期）

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	51	1	No.1	1 3 e	無繊維、2本の水平降帯に縦の降帯が接続するもの。			
		2		1	含繊維、			

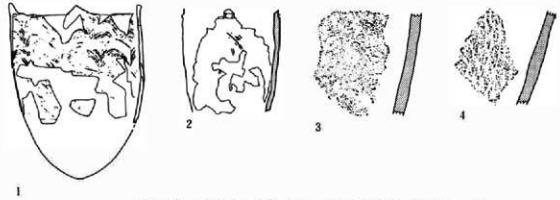
S－Ⅰ区　SB－50

重複関係を持たない住居址である。長軸480cm、短軸310cmの楕円形プランである。柱穴と思われるピットはいくつかあるが、P1、P3、P4、P5、P6、P8、P10、P11、P12、P14が柱穴であろうか。炉址と思われる焼土の広がりは2ケ所あり、ほぼ住居址の中央部にあるので、炉として使用されたのであろう。住居址付属の石皿は、北側の隅にあったが、壁に斜めにかかった状態であったので、後から捨てられたものであろう。

出土土器は東海系の天神山式土器が一個体分出土しているが、これと併出した在地系の土器2は口辺部を失っており、型式認定が困難である。石器は石鏃2、ドリル1、ピエス・エスキーユ2、石匕1、稜磨石4、磨石1、礫器7、磨斧1で、フレイクは黒曜石66g、水晶98gである。磨製石斧はSB－36のものと同一型式のものである。



第 52 図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－50　（1：80）



第 53 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－50出土土器（1、2は1：6）

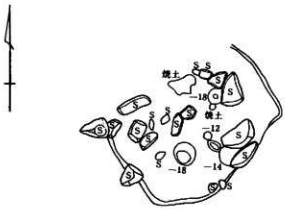
ＳＢ―50（早期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
33	53	1	№1、3、5	1－14－e	無縄縄、東海系土器、波状条痕がある大仲田式			
		2	№2	1	含縄縄、水平隆帯の一部がみえる。			
		3	№1	1	含縄縄、胴部			
		4	№3	1	含縄縄、胴部			

Ｓ－Ｉ区　ＳＢ―52

北側は畑の石垣のため失われている。また、この住居址の上部を小川が流れていたため、ようやくプランを確認した。一辺が350cmの隅丸方形プランであると思われる。壁高は11cmと浅い。床面に地山の花崗岩が露頭して土の床面が少ないくらいである。ピットは４個確認されているが、柱穴とは確定できない。焼土は２ケ所認められ、地床炉である。

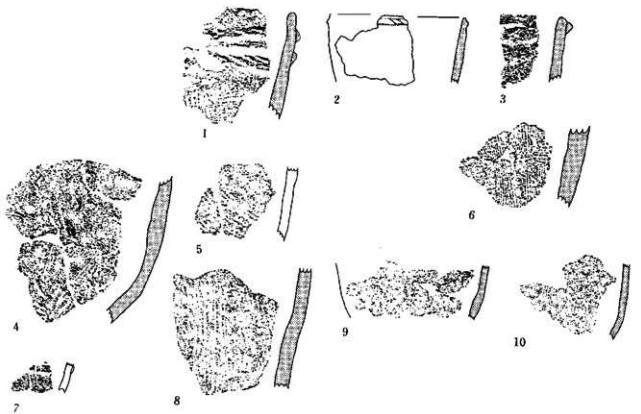
出土土器は含繊維土器が多い。１、２はいずれも隆帯がワラビテ文化するものと思われる。ＳＢ―54のものに近似し、ＳＢ―17とは異なるので、これらワラビテ文の土器にも時間差があるのであろう。また東海系木島式土器の木島式（渋谷・1985）の出土もある。石器は石鏃６、稜磨石３、磨石５、玉石２、打斧２、黒曜石９ｇ、水晶５ｇが出土している。



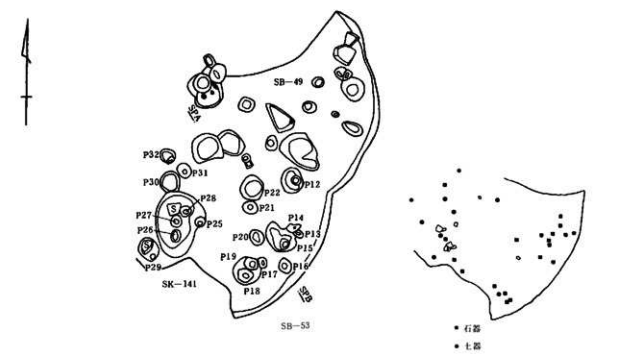
第 54 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区ＳＢ―52（１：80）

ＳＢ―52（前期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	分様	高さ	容量ℓ	備考
33	55	1	№2	1－9－aorb	含繊維、２重のタガ状隆帯			
		2	№3	1－10－a	含繊維、１本のタガ状隆帯			
		3		1－10－b	含繊維、１本のタガ状隆帯			
		4	№4	1	含繊維、底部はやや平底部			
		5		1	含繊維			
		6	№1	1	含繊維			
		7	№1	1－14－c	東海系土器、木島Ⅱ式　隆帯から器面にかけて沈線			
		8	№2	1	含繊維、胴部			
		9		1	含繊維、胴部			
		10		1	含繊維、胴部			
		11		1	含繊維			



第 55 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－52出土土器（2、9、10、は１：６）

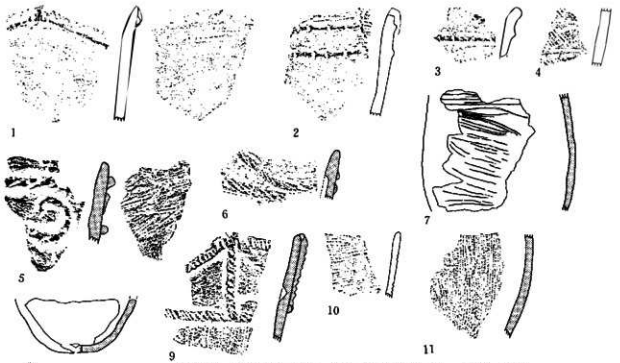


第 56 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区ＳＢ－49・53（１：80）

S－I区　SB－53

SB－49を調査後、南西壁の土層の変化を知り、追求したところSB－53を確認した。プランは不明だが、おそらく楕円形であろう。またピットは多数確認されているが、柱穴は確定できなかった。焼土は検出できず、炉址は未確認である。

出土土器は1、2ともに断面三角形の隆帯に貝殻刻目を施している。特に2は縦の隆帯に貝殻背圧を施しているので、より新しい様相と思われる。5、6は含繊維土器で隆帯がワラビテ文化するものである。また10のように東海系木島式土器が出土しているが、これは隆線をを持たない。石器は石鏃3、磨製石2、磨石7、打斧4、礫器2、黒曜石49g、水晶78gである。



第57図　釈迦堂S－I区　SB－53出土土器（7、8は1：6）

SB－53（前期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
33	57	1	No.3	1－2－a	無繊維、懸垂隆帯に縦の隆帯が付いたもの。隆帯上貝殻刻目			
		2		1－2－f	無繊維、水平隆帯は貝殻刻目、縦の隆帯に背圧痕			
		3		1－2	無繊維、隆帯上に貝殻刻目			
		4		1	無繊維、室匠系痕			
		5	No.10	1－9－b	含繊維、隆帯がワラビテ文化している。			
		6	No.6	1－9－b	含繊維、隆帯がワラビテ文化している。			
		7	No.6	1	含繊維			
		8	No.4、19	1	含繊維			
		9	No.6	1－9－aorb	含繊維、懸垂隆帯と水平隆帯に縦の隆帯が接続			
		10		1－14－e	東海系土器、隆帯はない。			
		11		1	含繊維			

S－I区　SB－54

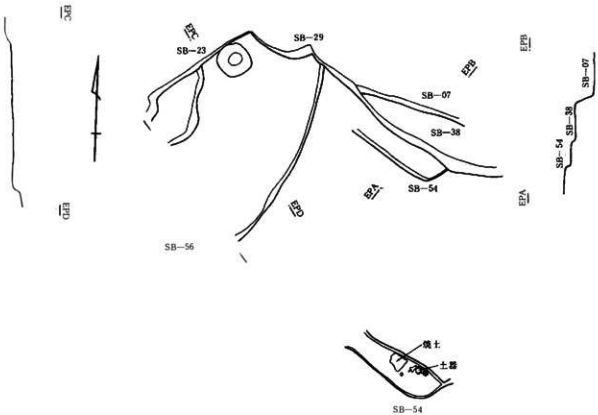
SB－37の西壁を精査中検出した住居で、西壁の一部を残している住居址で、一個体分の土器がまとまって出土している。炉址・柱穴ともに不明だが、焼土の広がりはある。

土器は含繊維土器で隆帯がワラビテ文化するものである。これらの土器のうち、全体の様相が判明するのは、この個体のみである。

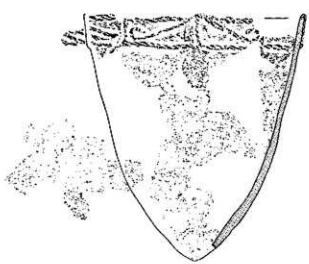
S－Ⅰ区　SB－56

K－17グリッドで、早期の土器の分布が認められたので、住居址プランの検出を試みたところ、わずかに南壁の一部を確認したのである。炉址・柱穴ともに不明である。

土器は隆帯に貝殻背圧痕を連続的に施したもので、これを断続的に施したものより新しい傾向を示す。石器はドリル３、稜磨石２、磨石２、フレイクは黒曜石38ｇ、水晶13ｇである。この他に管状玉が出土している。



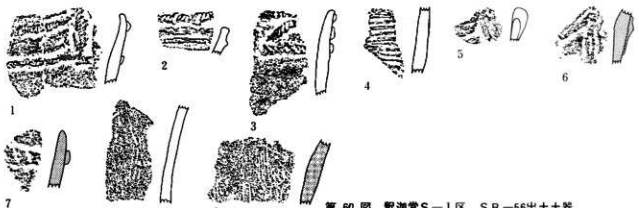
第 58 図　釈迦堂S－Ⅰ区SB－54・56 （1 ：80）



第 59 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－54出土土器（1 ：6）

SB—54（前期）

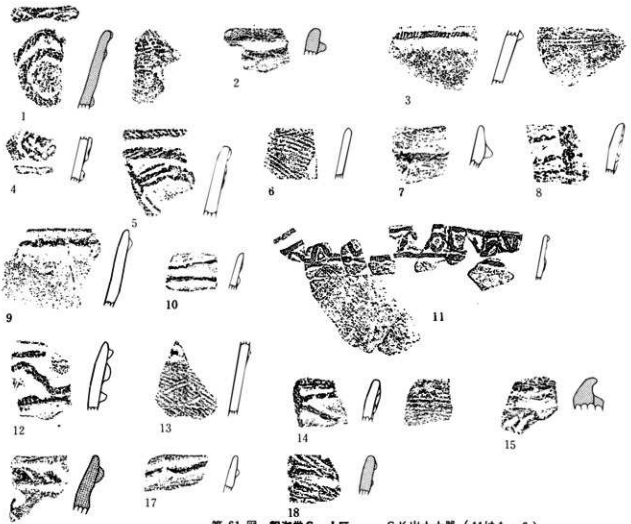
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
34	59	1	SB—54 SB—38、SB—65、L—18、No.4	1—9—b	合繊維、懸垂隆帯が波底部の縦の隆帯の所でワラビナ文化し、波頂部からの縦の隆帯も水平隆帯に接続			



第 60 図　釈迦堂S—I区　SB—56出土土器

SB—56（前期）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	60	1	No.4	1—4—C	無繊維、懸垂隆帯、水平隆帯に縦の隆帯が接続			
		2		1—4—L	無繊維			
		3		1—5—C	無繊維、平行隆帯間に波状隆帯が隆帯上背任偵			
		4		1	無繊維			
		5		1	無繊維、懸垂隆帯			
		6	No.2	1—9—a？	合繊維、懸垂隆帯に縦の隆帯が付く			
		7		1—10—a	合繊維、タガ状隆帯			
		8	No.3	1	合繊維			
		9		1	合繊維			



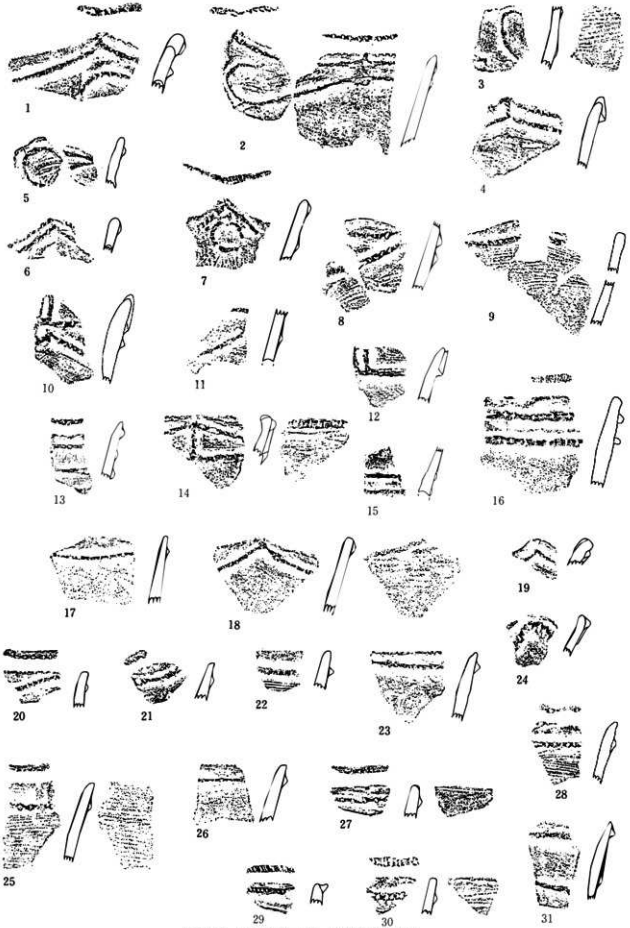
第 61 図　釈迦堂S－I区　SK出土土器（11は1：6）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
35	61	1	SK－23	1－9－b	ワラビナ文のモチーフ			
		2	SK－29	1－9－e	隆帯モチーフ不明			
		3	SK－59	1－4－j	隆帯上背圧痕			
		4	SK－71	1－6－b	隆帯上押引文			
		5	SK－71	1－6－b	隆帯上貝殻腹縁刺突			
		6	SK－87	1－14	条痕			
		7	SK－87	1－12－a	タガ状隆帯			
		8	SK－87	1－6 a				
		9	SK－141	1－12－b	新面三角形隆帯			
		10	SK－144	1－2？	新面三角形隆帯			
		11	SK－121、124	1－5－e	口辺部に小単位の波状文・円文を隆帯で描き、その上に貝殻背圧痕を施す。部分的に貝殻腹縁刺突			
		12	SK－144	1－5－a	平行隆帯間に波状隆帯			
		13	SK－191	1－1or2？	新面三角形隆帯と格子目状条線			
		14	SK－219	1－4－i	台形隆帯、ワラビ手文隆帯の波底部か？			
		15	SK－227	1－10－b	タガ状隆帯			
		16	SK－232	1－10－a	タガ状隆帯			
		17	SK－223～224	1－5－c	新面三角形の波状隆帯			
		18	SK－246	1－11－a	タガ状隆帯、口唇部刻目			

第 3 節　早期のグリッド出土土器

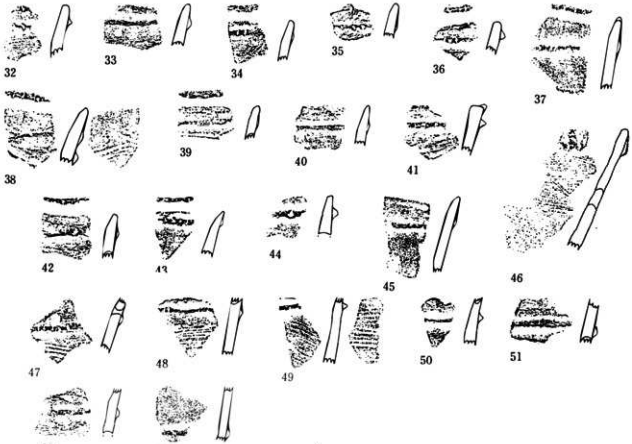
第1群土器　1類
断面三角隆帯に刻目

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量 ℓ	備考
35	62	1	U－22	1－1－c	波状口縁、口唇刻目、波状部にワラビナ隆帯			
		2	N－16	1－1－c	1と同様のものと思われる。			
		3	?	1－1－c	1と同様のものと思われる。			
		4	U－20	1－1－a	ワラビナ文を持たない。			
		5	S－16＋W－16	1－1－b				
		6	T－17	1－1－b	4と同様			
		7	P－22	1－1－b	ワラビナ文ではなく円文になっている。口辺部に条痕を残す。			
		8	P－16	1－1－c	おそらくワラビナ文をもつものであろう。口辺部に条痕を残す。			
		9	J－17	1－1－a	口辺部に条痕を残している。			
		10	V－22	1－1－c	ワラビナ文の底部であろうか。			
		11	SB－31	1－1－c				
		12		1－1－f	2本の隆帯がさがる。			
		13	S－25	1－1－g				
		14	P－22	1－1－f				
		15	M－18	1－1－g				
		16	T－18	1－1－g	これだけ隆帯断面がカマボコ状である。			
		17	SB－31、№31	1－1－a	細い断面三角形の隆帯			
		18	SB－07	1－1－a	懸垂曲線隆帯、裏面に赤彩			
		19	I－18	1－1－a	懸垂曲線隆帯			
		20		1－1－a	懸垂曲線隆帯			
		21		1－1－a	懸垂曲線隆帯			
		22	L－18	1－1－a	条痕を残す。			
		23	J－21	1－1－a				
		24	K－19	1－1－a	これも隆帯断面がやや丸く太い。			
		25	T－17	1－1－a	表裏とも条痕を残す。			
		26	R－19	1－1－a				
		27	SB－06	1－1－a				
		28	O－18	1－1－a				
		29	I－15	1－1－a	条痕を残す。			
		30	I－20	1－1－a				
		31	M－24	1－1－c				
	63	32	SB－07	1－1－g				
		33	S－18	1－1－g	刻目が見えない。			
		34	Oトレンチ	1－1－g				
		35	N－12	1－1－g				
		36	P－16	1－1－g				
		37	J－18	1－1－g				
		38	L－18	1－1－c	条痕を残す。			
		39	I－20	1－1－g				
		40	M－23	1－1－g				
		41	SB－23	1－1－g	口縁形状が特異			
		42	P－16	1－1－g				
		43	M－15	1－1－g				
		44	SB－31	1－1－g				
		45	S－16	1－1－g				
		46	J－18	1－1－g	波底部であろう。条痕をよく残す。			
		47	U－23	1－1－g	条痕を残す。			
		48	P－16	1－1－g	条痕を残す。			
		49	SB－07	1－1－g				



第 62 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器（1）

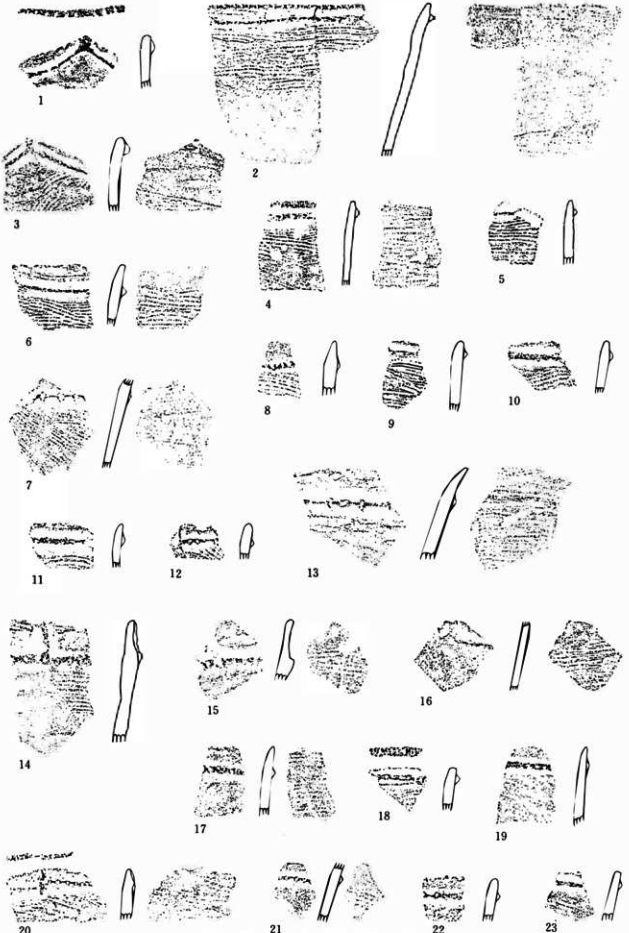
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	63	50	J－18	1－1－g				
		51	S－16	1－1－g				
		52	SB－39	1－1－g				
		53	J－23	1－1－g				



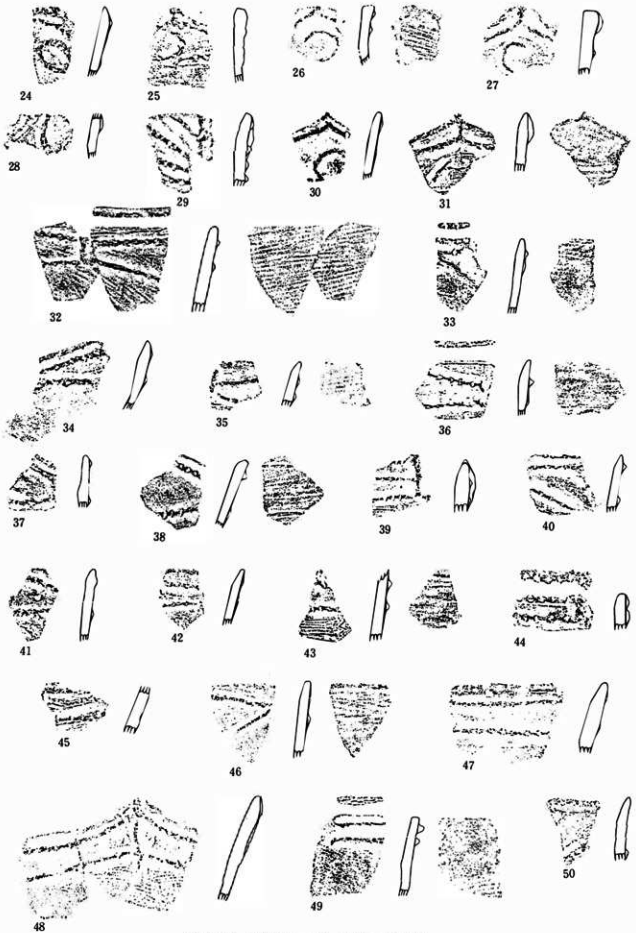
第 63 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器（2）

第1群土器　2類
撚糸上具殻腹縁刻目

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
36	64	1	V－20	1－2－a	口縁刻目、懸垂隆帯			
		2	SB－12	1－2－a	表裏とも条痕を残す。口縁刻目、懸垂隆帯はほとんど水平			
		3	SB－16	1－2－a	1とほとんど同じであるが、表裏とも条痕を残す。			
		4	T－20	1－2－a	2とほとんど同じ条痕で文様を描くようである。			
		5	T－20	1－2－a	条痕をよく残す。			
		6	T－20	1－2－a	条痕をよく残す。			
		7	SB－06	1－2－g	条痕をよく残す。			
		8	SB－40	1－2－g	条痕をよく残す。			
		9	R－19	1－2－g	条痕をよく残す。			
		10	SB－42	1－2－g	条痕をよく残す。			
		11	S－16	1－2－g	条痕をよく残す。			
		12	J－18	1－2－g	条痕をよく残す。			
		13	SB－39	1－2－g	条痕をよく残す。			
		14	M－17、№13	1－2－f	口辺部がやや厚くなっている。			
		15	SB－06	1－2－g	口辺部がやや厚くなっている。			
		16	L－18	1－2－g	裏に条痕を残す。			
		17	P－18	1－2－g	裏に条痕を残す。			
		18	T－17	1－2－g	口辺部隆帯下に条痕を残す。			
		19	U－19	1－2－g				
		20	O－25	1－2－f	表裏とも条痕を残し、十字形隆帯			
		21	SB－05	1－2－g	裏に条痕			
		22	R－18	1－2－g	口縁部にも刻目			



第 64 図　釈迦堂S－I区　早期の土器（3）

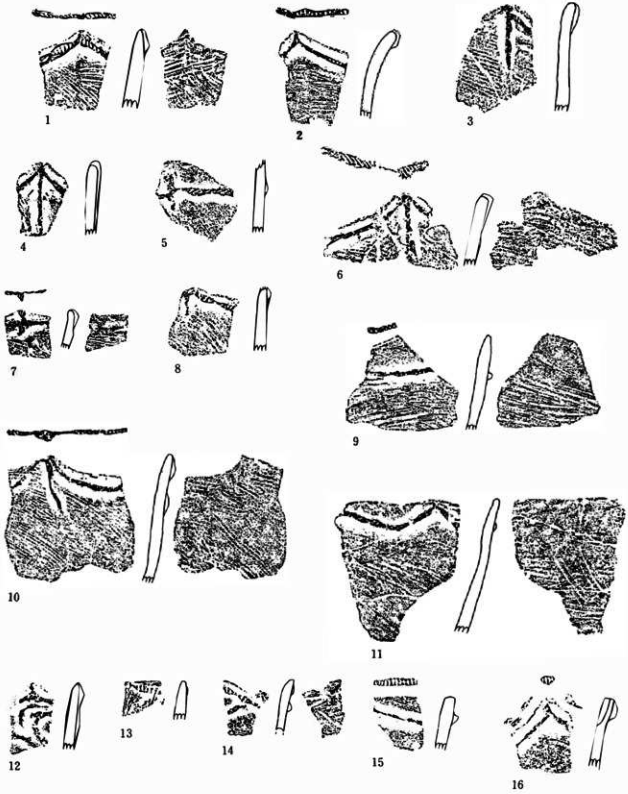


第 65 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（4）

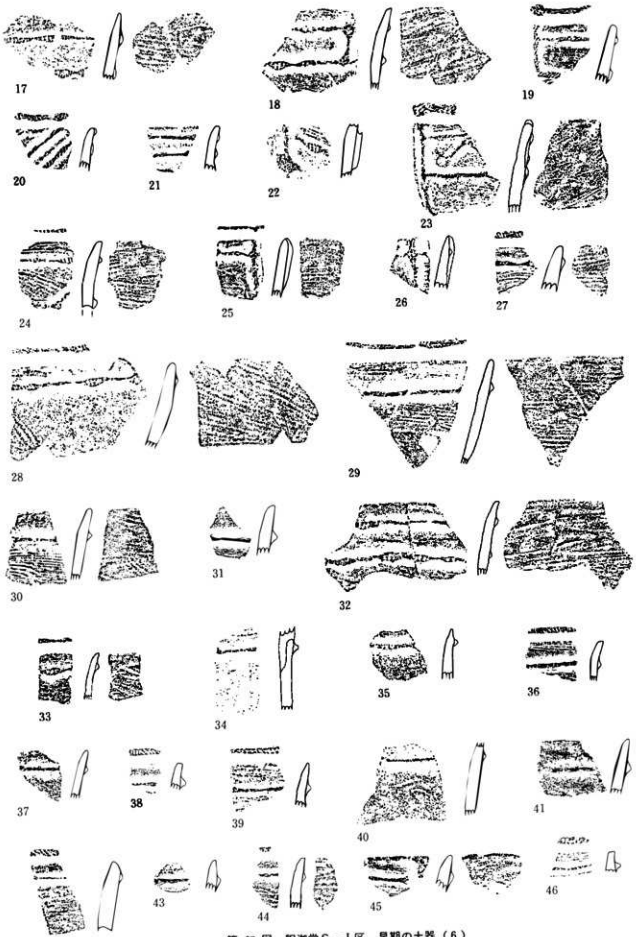
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	64	23	SB−12	1−2−g	条痕を残す。			
36	65	24	SB−27	1−2−c	ワラビナ文をなす。			
		25	K−16	1−2−c	ワラビナ文が入れ違っている。			
		26	SB−39	1−2−c	ワラビナ文の巻き方が逆である。			
		27	SB−05	1−2−c	ワラビナ文			
		28	H−18	1−2−c				
		29		1−2−e	いわゆる樹枝状の隆帯			
		30		1−2−c	ワラビナ文			
		31	T−20	1−2−c	ワラビナ文			
		32	I−17	1−2−c	ワラビナ文の波底部、表裏とも条痕を残す。			
		33	J−16	1−2−c	ワラビナ文か?			
		34		1−2−c	波頂部でワラビナ文になるか?			
		35	SB−07	1−2−c	ワラビ手文の波底部			
		36	N−21	1−2−c	裏に条痕			
		37	SB−27	1−2−c				
		38	U−22	1−2−c	裏に条痕			
		39		1−2−c	ワラビナ文の波底部			
		40	T−15	1−2−c	ワラビナ文に巻る部分			
		41	P−16	1−2−c	ワラビナ文に巻る部分			
		42	SB−06	1−2−g	波底部			
		43	Q−17	1−2−g	条痕の上に縦の波状文を付けている。			
		44	J−16	1−2−f	2および4のようなモチーフ			
		45	SB−21	1−2−c	ワラビナ文につながる部分			
		46	W−17	1−2−c	表裏条痕			
		47	SB−21、№6	1−2−f	平行隆帯か			
		48	SB−12	1−2−f	波頂部から垂下する隆帯と懸垂する平行隆帯、条痕は波状か?			
		49	T−19	1−2−g	裏に条痕、条痕がやや太く高い。			
		50	J−17	1−2−e	口縁刻目、刻部は竹管かもしれない。			

第1群土器　3類
断面三角形帯に貝殻背圧痕を間をあけて施文

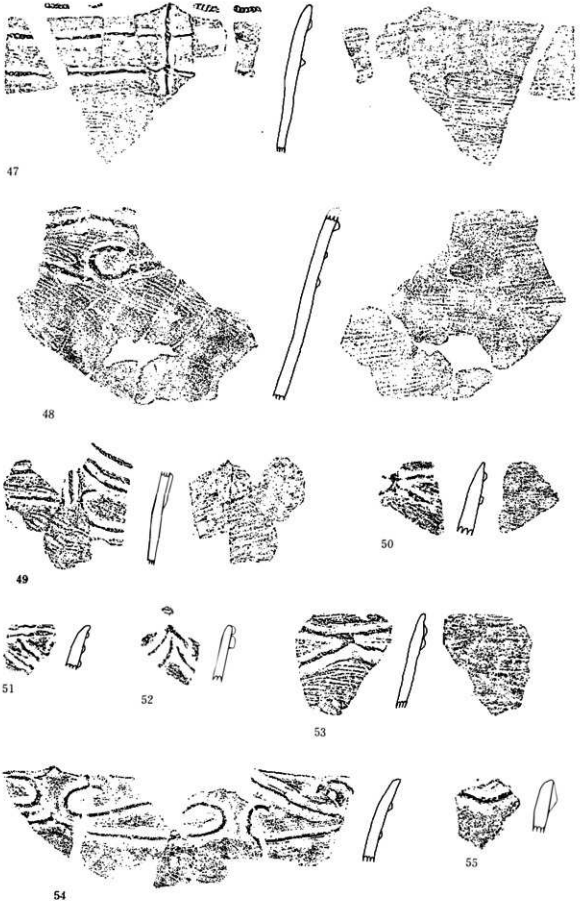
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
36	66	1	I−16	1−3−a	表裏条痕、懸垂曲線			
		2	T−22	1−3−a	条痕は重弧風である。			
		3	S−18	1−3−b	条痕あり、懸垂隆帯の他に波頂部から垂下する隆帯が付く。			
		4	S−19	1−3−b	条痕あり、懸垂隆帯の他に波頂部から垂下する隆帯が付く。			
		5	J−16	1−3−g	垂下する隆帯が十字形をなしている。			
		6	G−19	1−3−b	3、4と同じモチーフ			
		7	T−17	1−3−g	5と同じモチーフ			
		8	I−17	1−3−b	3と同じモチーフ			
		9	T−20	1−3−a	懸垂状隆帯			
		10	R−19	1−3−b	3と同じモチーフ			
		11	S−11	1−3−a	1と同じモチーフ			
		12	SB−41	1−3−h	ワラビ手文をなすのであろう。			
		13	SB−39	1−3−l	モチーフ不明			
		14	X−23	1−3−l	モチーフ不明			
		15	U−23	1−3−a	押圧が浅い。			
		16	SB−06、№46	1−3−a	1と同じモチーフ			
		17	J−16	1−3−e	平行隆帯をもつ。			
		18	P−18	1−3−e	平行隆帯に垂下する隆帯が付く。			
		19	U−18	1−3−e	平行隆帯に垂下する隆帯が付く。			
		20	SB−20	1−3−f	口縁部から斜めに隆帯が付く。			
		21	P−18	1−3−i	3本の隆帯が付く。			
		22	T−17、18	1−3−i	懸垂する2本隆帯と垂下する縦隆帯。			
		23	S−19	1−3−f	垂下する隆帯と平行隆帯の間に鋸歯状隆帯が付く。裏に条痕あり。			
		24	K−14	1−3−f	23と同じようなモチーフ、表裏条痕			
		25	Q−19	1−3−e	十字形隆帯、表裏条痕			
		26	SB−23	1−3−e	十字形隆帯、表裏条痕			



第 66 図　釈迦堂Ｓ－１区　早期の土器（５）



第 67 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（６）



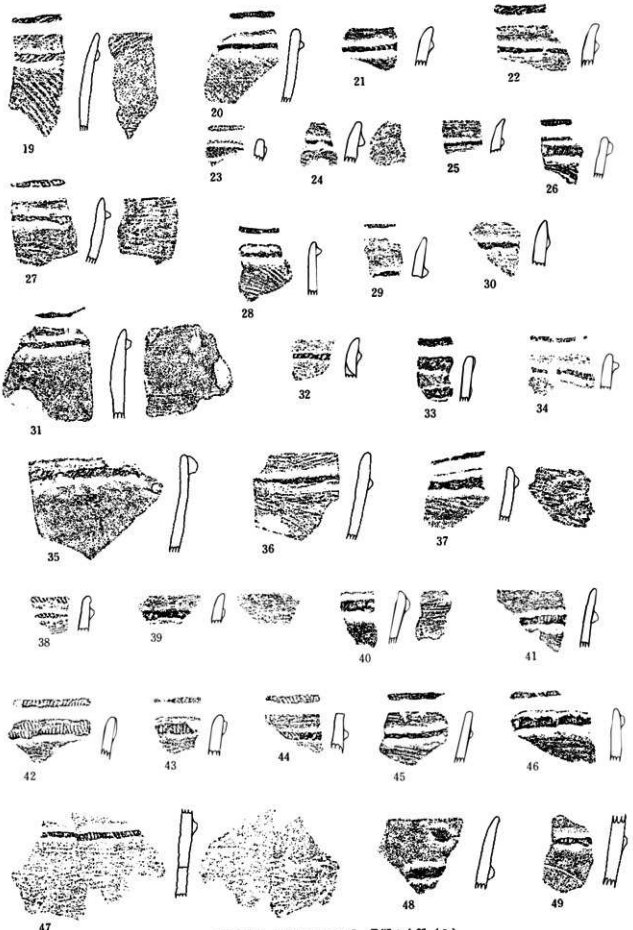
第 68 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（７）

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	文　　様	高さ	容量ℓ	備考
	67	27	S B－51	1－3－i	十字形隆帯、表裏条痕			
		28	S B－09、№24	1－3－g	懸垂隆帯。			
		29	T－21	1－3－g	懸垂隆帯。			
		30	石理設坑	1－3－i				
		31	S B－40	1－3－i	隆帯下に条痕			
		32	S B－12	1－3－e	平行隆帯			
		33	Q－19	1－3－i	裏に条痕			
		34	S－16	1－3－i				
		35	S B－12	1－3－i				
		36	S B－12	1－3－i	条痕を残す、口唇に背圧痕			
		37	Q－15	1－3－i				
		38	S B－51	1－3－i	口唇に背圧痕			
		39	K－17	1－3－i	口唇に背圧痕			
		40	S B－17	1－3－i				
		41	Q－8	1－3－i				
		42	F－22	1－3－i				
		43	S B－45	1－3－i	小片でモチーフ不明			
		44	S B－41	1－3－i	小片でモチーフ不明			
		45	S B－07	1－3－i	小片でモチーフ不明			
		46	V－23	1－3－i	小片でモチーフ不明			
36	68	47	V－18、S B－12、S－19、16	1－3－e	波頂部から垂下する隆帯と水平隆帯、口辺部、裏に条痕			
		48	J－19、№1、S B－50	1－3－c	口辺部、裏に条痕、波頂部下で下の隆帯がワラビテ文化している。			
		49	W－27	1－3－c	波頂部の垂下する隆帯と懸垂隆帯と下の水平隆帯は波頂部でワラビテ文化			
		50	S B－04	1－3－c	ワラビテ文の波底部			
		51	M－17	1－3－f	棚状のモチーフか？			
		52	J－22	1－3－h	懸垂状隆帯が2本下がる。			
		53	S B－07	1－3－c	懸垂状隆帯を波頂部で繰く部分、表裏条痕			
		54	I－18	1－3－c	これらは隆帯上無文で本類ではないが、モチーフ的に類似するので一応含めた。			
		55	J－22	1－3－c	これらは隆帯上無文で本類ではないが、モチーフ的に類似するので一応含めた。			

第1群土器　4類
台形隆帯に貝殻背圧痕を施したもの

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	文　　様	高さ	容量ℓ	備考
37	69	1	N－15	1－4－a	表裏条痕、懸垂隆帯			
		2	S B－43	1－4－a	懸垂隆帯			
		3	S－17	1－4－a	懸垂隆帯			
		4	S B－23	1－4－a	やや丸い懸垂隆帯			
		5	S－19	1－4－a	2本の懸垂隆帯			
		6	R－23	1－4－a	口縁に接して隆帯が付く。			
		7	V－18、U－23	1－4－e	水平3本の隆帯と垂下する隆帯			
		8	N－17	1－4－c	モチーフが不明だが、波底部と思われる。			
		9	S－17	1－4－c	モチーフが不明だが、波底部と思われる。			
		10	S B－03	1－4－b	垂下隆帯と水平隆帯が口縁部に向って上っている新しい要素			
		11	J－19	1－4－e	水平隆帯と垂下する隆帯			
		12	O－15	1－4－e	水平隆帯と垂下する隆帯			
		13	S B－12	1－4－f	半月状の隆帯			
		14	S B－06	1－4－f	半月状の隆帯			
		15	S B－21	1－4－f	半月状の隆帯			
		16		1－4－e	口縁から水平隆帯に向って隆帯が下がる。			
		17		1－4－e	口縁から水平隆帯に向って隆帯が下がる。			
		18	U－24	1－4－f	波頂部に円形文が付いている。図62－7と同じモチーフ			
	70	19	P－16	1－4－g	表裏条痕			
		20	U－21	1－4－g	口縁部に背圧痕			
		21	S B－29、№5	1－4－g				

第 69 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器（8）



第 70 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器（9）

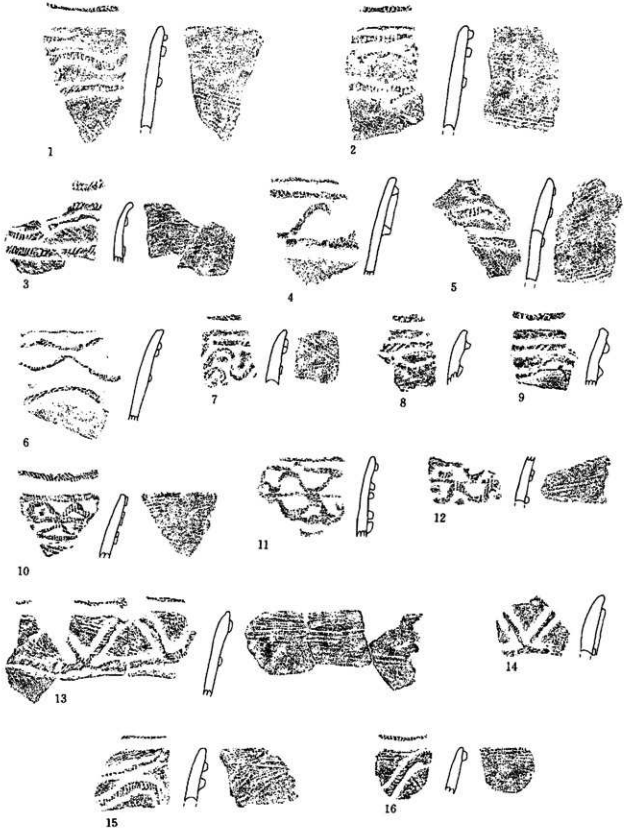
第 71 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（10）

図版	挿図	挿図No.	出 土 地 点	分　類	文　様	高さ	容量ℓ	備考
	70	22	S B－42	Ⅰ－４－ｇ	口縁部に背圧痕			
		23	Ⅰ－17	Ⅰ－４－ｇ				
		24	N－16	Ⅰ－４－ｇ				
		25	S B－03	Ⅰ－４－ｇ				
		26	M－23	Ⅰ－４－ｇ				
		27	S B－03	Ⅰ－４－ｇ	胴に条痕			
		28	J－17	Ⅰ－４－ｇ	胴帯下に条痕、口縁に背圧痕			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量 cc	備考
	70	29	L−16	1−4−g	隆帯下に条痕、口唇に背圧痕			
		30	?	1−4−g				
		31	O−15	1−4−g	口縁部に背圧痕			
		32	O−26	1−4−g				
		33	P−23	1−4−g	口縁部に隆帯が付くので、 g 類に入れておく。			
		34	S−17	1−4−g				
		35	P−18	1−4−g	隆帯がやや太い。			
		36	V−22	1−4−g	条痕を残す。			
		37	K−20	1−4−g	長条条痕、隆帯が太い。			
		38	V−18	1−4−g	口縁部に背圧痕			
		39	?	1−4−g				
		40	SB−45	1−4−g				
		41	S−16	1−4−g	補修孔をもつ			
		42	SB−47	1−4−g	口縁部に折かえし口縁のようである。口縁部背圧痕			
		43	N−23	1−4−g	口縁部に折かえし口縁のようである。口縁部背圧痕			
		44	P−18	1−4−g	口縁部に折かえし口縁のようである。口縁部背圧痕			
		45	U−26	1−4−g	口縁部に折かえし口縁のようである。口縁部背圧痕			
		46	M−25	1−4−g				
		47	R−23	1−4−g	長条条痕			
		48	S−16	1−4−g				
		49	SB−43	1−4−g				
	71	50	S−16	1−4−g	口縁部に隆帯が付く			
		51	Q−18	1−4−g	口縁部に隆帯が付く、長条条痕			
		52	N−23	1−4−g	口縁下に隆帯が付く			
		53	T−18	1−4−g				
		54	SB−12	1−4−g	長条条痕			
		55	V−16	1−4−g	長条条痕			
		56	SB−47	1−4−g	長条条痕			
		57	?	1−4−g				
		58	?	1−4−g				
		59	SB−12	1−4−g				
		60	J−16	1−4−g				
		61	U−18	1−4−g				
		62	SB−43	1−4−g				
		63	Q−15	1−4−g				
		64	S−16	1−4−g				
		65	SB−06	1−4−g				
		66	U−19	1−4−g	隆帯上条痕らしい			
		67	S−21	1−4−g				
		68	M−23	1−4−g				
		69	H−14	1−4−g	長条条痕			
		70	V−23	1−4−h				

第1群土器　5類
平行帯の間に波状および鋸歯状隆帯を配したもの、隆帯上は背圧痕

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量 cc	備考
37	72	1	J−20	1−5−a	裏に条痕			
		2	K−20	1−5−a	裏に条痕			
		3	U−21、SB−07、39、45	1−5−a	裏に条痕			
		4	S−17	1−5−a				
		5	M−17、N−17	1−5−a	裏に条痕			
		6	SB−04、№156	1−5−a	水平隆帯ではなく、上下の隆帯も波状となっている。			
		7	SB−55	1−5−a	裏に条痕、口縁部背圧痕波状の波長が特に短い。			
		8	M−21	1−5−a	口縁部背圧痕			



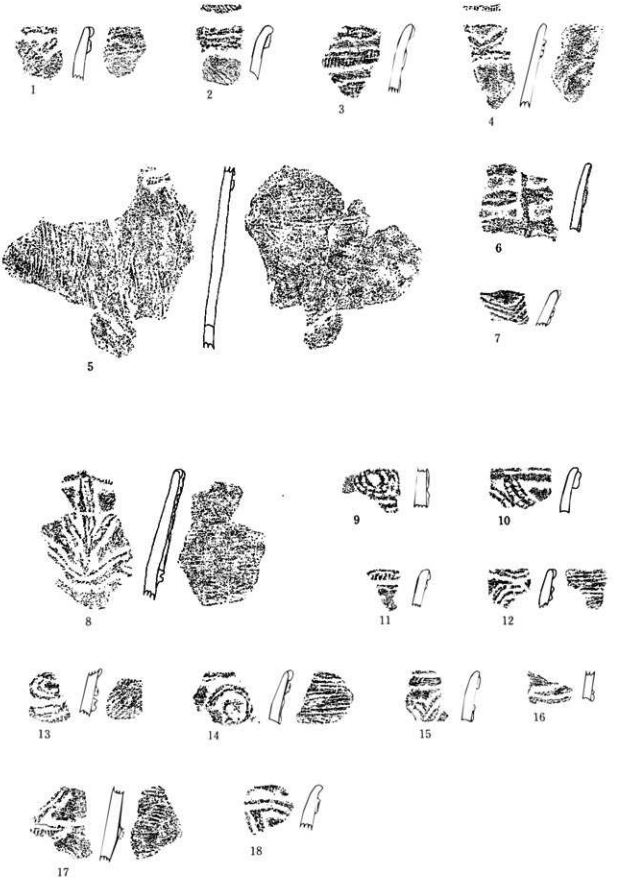
第 72 図　釈迦堂S－I区　早期の土器 (11)

第 73 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器 (12)

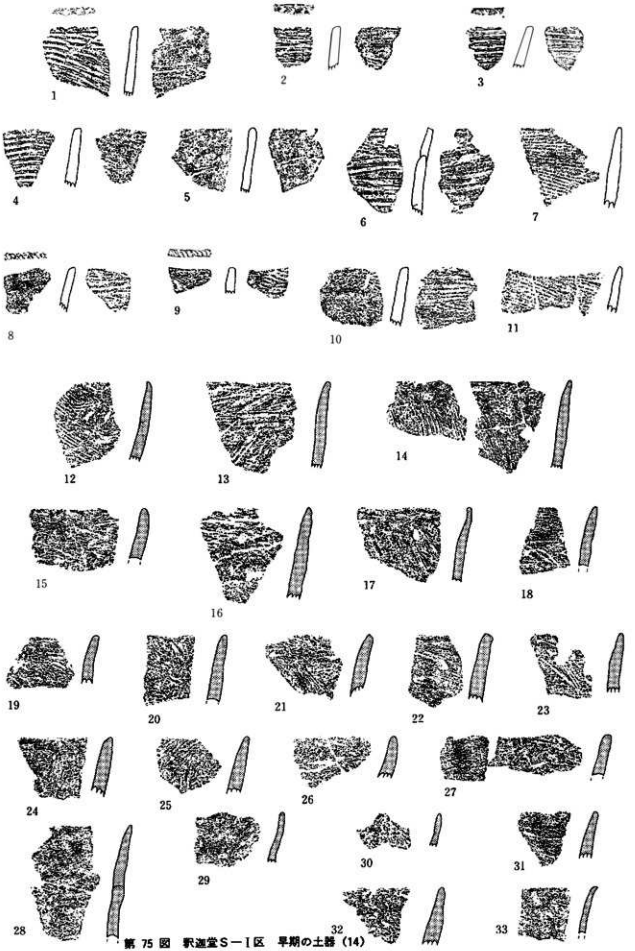
図版	挿図	掲載№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	72	9	M−21	1−5−a	口縁部背圧痕			
		10	?	1−5−b	2段になっている。			
		11	SB−03	1−5−b				
		12	SB−01	1−5−b	裏に条痕			
		13	Q−24	1−5−c	裏に条痕、上の隆帯は失なわれている。			
		14	I−17	1−5−a				
		15	J−16	1−5−f	裏に条痕			
		16	P−21	1−5−c	裏に条痕、13と同じ構成			
37	73	17	L−21	1−5−c	裏に条痕、13と同じ構成、隆帯上背圧痕というより条痕			
		18	L−21	1−5−c	17と同じであろう。			
		19	K−20	1−5−f				
		20	?	1−5−c	裏に条痕			
		21	?	1−5−c	裏に条痕			
		22	L−21	1−5−f				
		23	SH−05	1−5−c	裏に条痕			
		24	J−16	1−5−f	裏に条痕			
		25	L−17	1−5−f				
		26	SH−29	1−5−f				
		27	T−20	1−5−f				
		28	N−16	1−5−d	やや複雑なモチーフを取る。			
		29	T−16、I,−22	1−5−e	裏に条痕、大きな波長となっている。			
		30	SH−03、T−19	1−5−f	裏に条痕、上下の隆帯が失なわれている。			
		31	SB−04、№160	1−5−d	裏に条痕、下端の隆帯はなく、2重の波状隆帯が続く。			
		32	SH−10	1−5−a	隆帯上に背圧痕はない。			
		33	?	1−5−a	隆帯間に2重の波状隆帯が付く。			
		34	I−20	1−5−e	本類に入らないが、樹枝状の隆帯、裏に条痕			

第1群土器　6類
隆帯上に2次施文があるもの

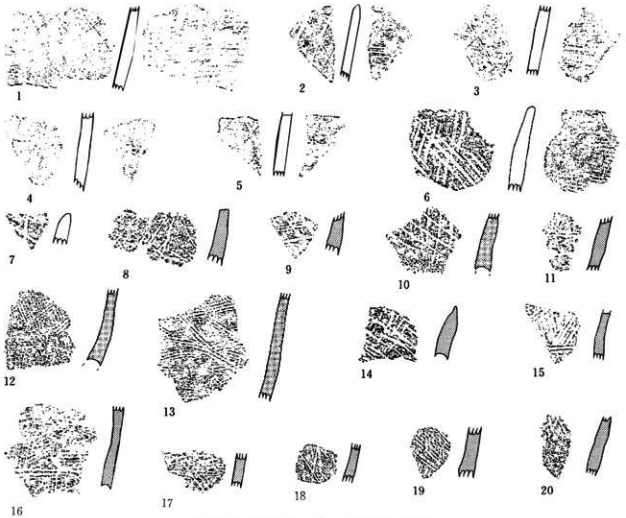
図版	挿図	掲載№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
39	74	1	S−20	1−6−a	裏に条痕、隆帯上に背圧痕を施し、貝殻腹縁による刺突を加える。			
		2	L−18	1−6−a	口縁部背圧痕、隆帯上に背圧痕を施し、貝殻腹縁による刺突を加える。			
		3	H−16	1−6−a	器面に条痕がみえる。			
		4	P−22	1−6−a	口縁部背圧痕、波状隆帯をなすものか?			
		5	M−18、№6	1−6−a	表裏とも条痕、隆帯の一部が残る。			
		6	R−16	1−6−a	隆帯上背圧痕が失なわれている。			
		7	R−21	1−6−a	隆帯上に貝殻腹縁を3列刺突している。			
		8	S−19、22	1−6−b	波状口縁、表裏条痕、隆帯上角押文、樹枝状隆帯			
		9	R−23	1−6−b	円文に角押文を加える。			
		10	R−23	1−6−b	9と同一か。			
		11	T−25	1−6−b	角押文（結節沈線ではなく）単に引いている。			
		12	R−22	1−6−b	表裏条痕、隆帯上角押文			
		13	R−24	1−6−b	表裏条痕、隆帯上角押文			
		14	T−21、№5	1−6−b	表裏条痕、隆帯上角押文			
		15	T−24	1−6−b				
		16	S−23	1−6−b	隆帯上を角押文ではなく沈線化している。			
		17	Q−20	1−6−b	隆帯上は背圧というより刻目に近い。			
		18	R−27	1−6−b	背圧痕が失なわれている。			



第 74 図　釈迦堂S－I区　早期の土器 (13)



第 75 図　駅遺堂S－I区　早期の土器 (14)



第 76 図　釈迦堂Ｓ－Ｉ区　早期の土器 (15)

第１群土器　７類　口縁部無文のもの

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	文　　様	高さ	容量ℓ	備考
38	75	1	ＳＢ－06	1－7－a	表長条痕、口唇部に貝殻腹縁もしくは竹管様工具による施文がある。			
		2	?	1－7－a	表長条痕、口唇部に貝殻腹縁による刺突文			
		3	Ｔ－19	1－7－a				
		4	Ｋ－18	1－7－a				
		5	ＳＢ－05	1－7－a				
		6	ＳＢ－23	1－7－a				
		7	Ｓ－18	1－7－a				
		8	ＳＢ－49	1－7－a				
		9	ＳＢ－47	1－7－a				
		10	ＳＢ－23	1－7－a				
		11	Ｓ－19	1－7－a				
		12	Ｌ－18	1－7－b	含繊維のもの			
		13	Ｖ－23	1－7－b	含繊維のもの			
		14	Ｖ－20	1－7－b	含繊維のもの			
		15	Ｕ－24	1－7－b	含繊維のもの			
		16	Ｌ－21	1－7－b	含繊維のもの			
		17	Ｔ－18	1－7－b	含繊維のもの			
		18	Ｔ－18	1－7－b	含繊維のもの			
		19	Ｕ－24	1－7－b	含繊維のもの			
		20	Ｌ－21	1－7－b	含繊維のもの			

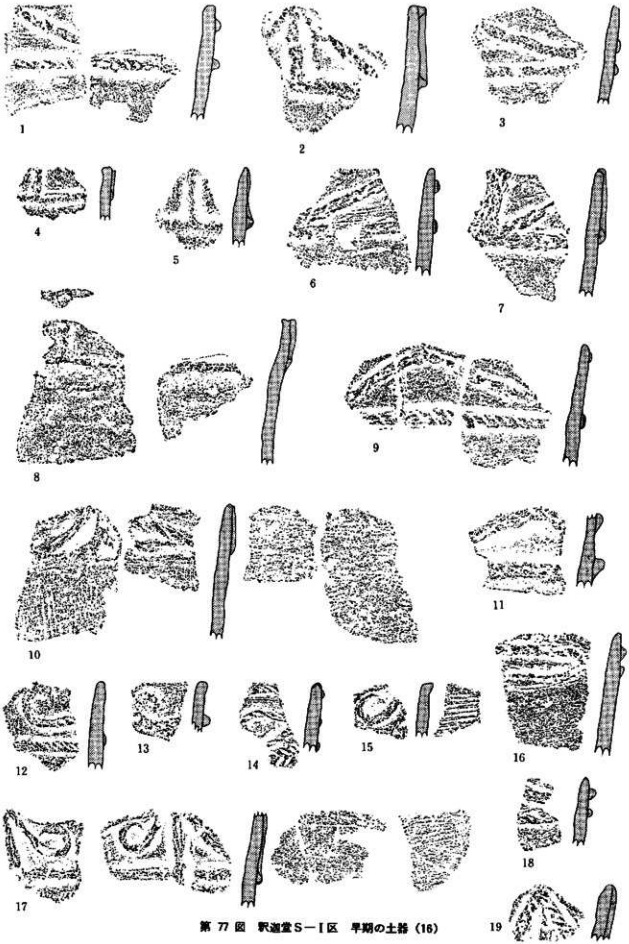
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	75	21	T−18	1−7−b	含繊維のもの			
		22	T−18	1−7−b	含繊維のもの			
		23	N−25	1−7−b	含繊維のもの			
		24	V−16	1−7−b	含繊維のもの			
		25	O−21	1−7−b	含繊維のもの			
		26	K−23	1−7−b	含繊維のもの			
		27	P−19	1−7−b	含繊維のもの			
		28	H−20	1−7−b	含繊維のもの			
		29	P−18	1−7−b	含繊維のもの			
		30	P−22	1−7−b	含繊維のもの			
		31	O−25	1−7−b	含繊維のもの			
		32	P−18	1−7−b	含繊維のもの			
		33	T−17	1−7−b	含繊維のもの			

第1群土器　8類　格子目文を有するもの

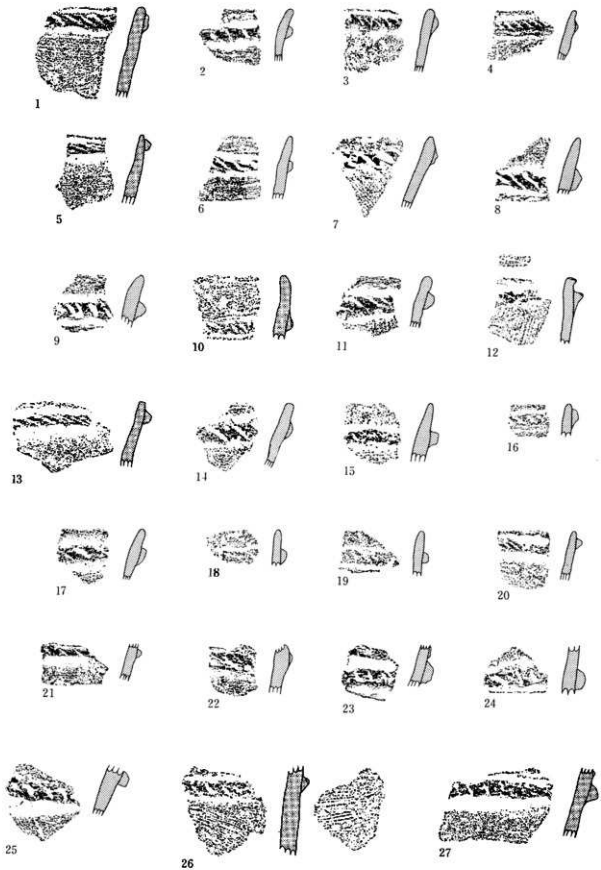
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
38	76	1	P−18、Y−23	1−8−a	裏に条痕、浅い沈線で格子目文			
		2	P−17	1−8−a	裏に条痕、浅い沈線で格子目文			
		3	Y−23	1−8−a	裏に条痕、浅い沈線で格子目文			
		4	X−23	1−8−a	裏に条痕、浅い沈線で格子目文			
		5	P−17	1−8−a	裏に条痕、浅い沈線で格子目文			
		6	X−25	1−8−a	裏に条痕、櫛歯状工具で格子目文			
		7	X−21					
		8	P−16	1−8−b	含繊維、一本引き沈線による格子目文			
		9	P−18	1−8−b	含繊維、一本引き沈線による格子目文			
		10	SB−04	1−8−b	含繊維、一本引き沈線による格子目文			
		11	L−19	1−8−b	含繊維、一本引き沈線による格子目文			
		12	M−19		含繊維、条痕による格子目文			
		13	T−20	1−8−c	条痕による格子目文			
		14	L−18	1−8−c	条痕による格子目文			
		15	J−17	1−8−c	条痕による格子目文			
		16	T−20	1−8−c	条痕による格子目文			
		17	?	1−8−c	条痕による格子目文			
		18	W−20	1−8−c	条痕による格子目文			
		19	SB−05	1−8−c	条痕による格子目文			
		20	N−22	1−8−c	条痕による格子目文			

第1群土器　9類　繊維土器のうち、口辺部に刻目隆帯で文様を描くもの

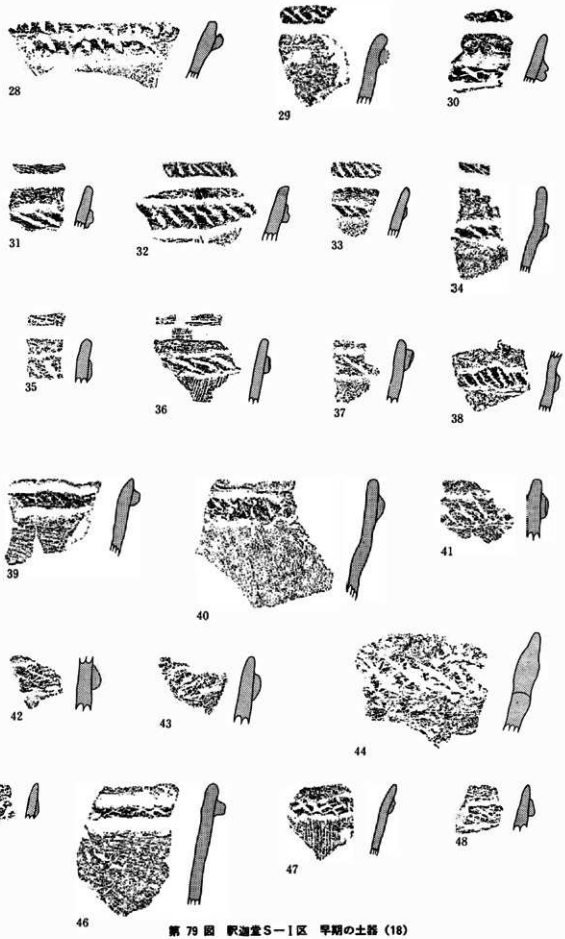
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	77	1	U−19、V−19	1−9−a	波状口縁波頂部からの懸垂隆帯と水平隆帯で構成される。これに波頂部から縦の隆帯が付く。			
		2	?	1−9−a	波状口縁波頂部からの懸垂隆帯と水平隆帯で構成される。これに波頂部から縦の隆帯が付く。			
		3	T−22	1−9−a	波状口縁波頂部からの懸垂隆帯と水平隆帯で構成される。これに波頂部から縦の隆帯が付く。			
		4	V−22	1−9−c	波頂部から水平隆帯に縦の隆帯が接続する。			
		5	V−21	1−9−c	波頂部から水平隆帯に縦の隆帯が接続する。			
		6	Q−18	1−9−a	1、2と同じであろうか。			
		7	S−18	1−9−a	1、2と同じものの波底部であろうか。			
		8	R−16、S−18	1−9−c	4と同じ構図			
		9	SB−03、No.40	1−9−d	懸垂隆帯と水平隆帯があり、縦の隆帯がない。			
		10	N−17、No.56	1−9−e				



第 77 図　釈迦堂S－I区　早期の土器 (16)



第 78 図　釈迦堂S－I区　早期の土器（17）



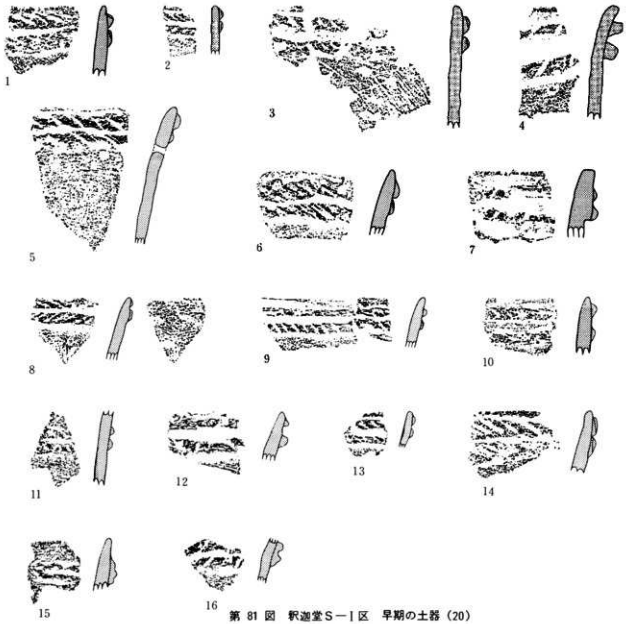
第 79 図　釈迦堂S－I区　早期の土器（18）

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	分　　様	高さ	容量	備考
	77	11	Q－18	1－9－d	9と同じモチーフ			
		12	S－16	1－9－b	懸垂隆帯の端がワラビテ文化したもの			
		13	U－19	1－9－b	懸垂隆帯の端がワラビテ文化したもの			
		14	G－19	1－9－b	懸垂隆帯の端がワラビテ文化したもの			
		15	SB－28	1－9－b	懸垂隆帯の端がワラビテ文化したもの			
		16	I－18	1－9－e	上下の隆帯が接続している。			
		17	SB－09	1－9－b	懸垂隆帯が小さくワラビテ文化している。			
		18	I－18	1－9－a	おそらく懸垂隆帯がワラビテ文化するのであろう。			
		19	S－19	1－9－a	波頂部に懸垂隆帯と縦の隆帯がみられる。			

第1群土器　10類
タガ状隆帯をめぐらす繊維土器

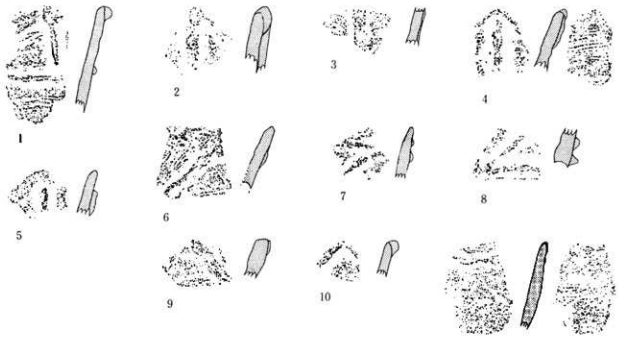
図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	分　　様	高さ	容量	備考
37	78	1	R－18	1－10－a	口縁に接して太く丸い隆帯が付く			
		2	R－18	1－10－a				
		3	R－18	1－10－a				
		4	SB－08	1－10－a				
		5	SB－12	1－10－a				
		6	W－22	1－10－a				
		7	SB－04	1－10－a	刻目が深く、隆帯下に条痕が残る。			
		8	V－18	1－10－a				
		9	V－23	1－10－a				
		10	J－16	1－10－a	口縁下から少し離れて隆帯が付く。			
		11	V－15	1－10－a				
		12	I－17	1－10－a	口唇にも刻目、隆帯下に条痕			
		13	SB－02、№51	1－10－a				
		14	SB－05	1－10－a	低く太い隆帯が付く。			
		15	SB－03	1－10－a				
		16	M－13	1－10－a				
		17	SB－03	1－10－a				
		18	M－25	1－10－a				
		19	M－17	1－10－a				
		20	SB－45、№13	1－10－a				
		21	Q－18	1－10－a				
		22	SB－03	1－10－a				
		23	W－22	1－10－a	貝殻腹縁による刺突の可能性もあり			
		24	M－24	1－10－a				
		25	SB－03	1－10－a				
		26	I－17	1－10－a	表裏に条痕			
		27	W－22	1－10－a				
	79	28	SB－03、31	1－10－a	口唇にも刻目			
		29	R－19	1－10－a	口唇にも刻目			
		30	R－25	1－10－a	口唇にも刻目			
		31	V－24	1－10－a	口唇にも刻目			
		32	SB－03	1－10－a	口唇にも刻目			
		33	SB－12	1－10－a	口唇にも刻目			
		34	V－18	1－10－a	口唇にも刻目			
		35	L－18	1－10－a	口唇にも刻目			
		36	M－25	1－10－a	口唇に条痕			
		37	L－13	1－10－a				
		38	P－21	1－10－a				
		39	S－21	1－10－a	隆帯下に条痕を残す。			
		40	S－18	1－10－a	隆帯下に条痕を残す。			
		41	I－17	1－10－a				

第 80 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器（19）



第 81 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（20）

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　類	文　様	高さ	容量	備考
	79	42	K－21	1－10－a				
		43	M－20	1－10－a				
		44	S－21	1－10－c	幅３cmにもの低い隆帯に刻目が付く。			
		45	J－16	1－10－c	隆帯上に右左の刻目を施し、格子目状になっている。			
		46	Q－18	1－10－c	隆帯上に右左の刻目を施し、格子目状になっている。			
		47	T－24	1－10－c	隆帯上に右左の刻目を施し、格子目状になっている。			
		48	O－19	1－10－c	隆帯上に右左の刻目を施し、格子目状になっている。			
	80	49	SB－07、Nо85、O－16	1－10－b	隆帯上に左さがりの刻目を施すもの。			
		50	SB－09	1－10－b				
		51	P－18	1－10－b				
		52	P－17	1－10－b				
		53	T－17	1－10－b				
		54	W－22	1－10－b				



第 82 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（21）

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　類	文　様	高さ	容量 ㎖	備考
	80	55	Ｖ－22	Ⅰ－10－b				
		56	ＳＢ－51	Ⅰ－10－b	口唇に刻目			
		57	Ｔ－22	Ⅰ－10－b	口唇に刻目			
		58	Ｒ－25	Ⅰ－10－b				
		59	Ｊ－17	Ⅰ－10－b	隆帯はやや細い。			
		60	Ｊ－17	Ⅰ－10－b				
		61	Ｊ－16	Ⅰ－10－b	ほとんど隆帯は失なわれている。			
		62	Ｍ－21	Ⅰ－10－b				
		63	Ｏ－25	Ⅰ－10－b				
		64	Ｑ－18	Ⅰ－10－b				
		65	Ｊ－21	Ⅰ－10－b	低く太い隆帯			
		66	Ｐ－17	Ⅰ－10－b				
		67	Ｒ－16	Ⅰ－10－b				
		68	ＳＢ－01	Ⅰ－10－b				
		69	Ｌ－18	Ⅰ－10－b				
		70	Ｊ－16	Ⅰ－10－b	条痕残し、高い隆帯に刻目、条痕をよく残す。			
		71	ＳＢ－20	Ⅰ－10－b				
		72	Ｒ－14	Ⅰ－10－b				
		73	ＳＢ－02	Ⅰ－10－b	口唇に刻目			

第１群土器　11類
２重隆帯がめぐるもの

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　類	文　様	高さ	容量 ㎖	備考
38	81	1	Ｎ－25	Ⅰ－11－a	口縁直下に２重の隆帯がめぐる。右傾刻目			
		2	Ｏ－14	Ⅰ－11－c	上の隆帯は右傾、下は左傾刻目			
		3	Ｑ－18	Ⅰ－11－a	右傾刻目、条痕			
		4	Ｋ－19	Ⅰ－11－b	高い隆帯に左傾の刻目			
		5	Ｐ－7	Ⅰ－11－a	右傾刻目			
		6	Ｑ－20	Ⅰ－11－a	右傾刻目			
		7	ＳＢ－47、№3	Ⅰ－11－b	左傾刻目			

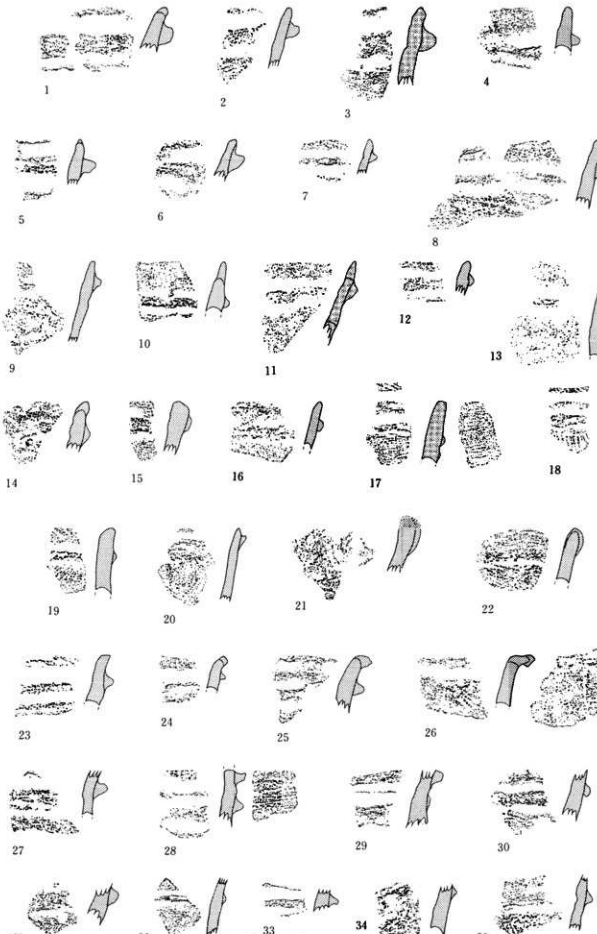
図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	文　　様	高さ	容量ℓ	備考
	81	8	S B－31	1－11－c	上は右傾、下は左傾の刻目			
		9	N－16、S B－20	1－11－b				
		10	M－18	1－11－b	右傾刻目			
		11	J－20	1－11－b	右傾刻目			
		12	U－22	1－11－e	右傾、左傾が併用されている。			
		13	S B－10	1－11－a	右傾刻目			
		14	L－17	1－11－a	右傾刻目			
		15	P－17	1－11－e	隆帯に沈線を施すことによって2本の隆帯のようにしている。			
		16	U－23	1－11－a	左傾刻目			

第1群土器　12類　繊維土器のうち隆帯で文様を描くが、隆帯上に刻目のないもの。

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	分　　様	高さ	容量ℓ	備考
	82	1	T－17	1－12－b	縦の隆帯と水平隆帯がみられる。			
		2	R－19	1－12－c	縦の隆帯と水平隆帯がみられる。			
		3	R－19	1－12－c	縦の隆帯と水平隆帯			
		4	K－17	1－12－c	裏に条痕、縦の隆帯			
		5	R－19	1－12－c	裏に条痕、縦の隆帯			
		6	J－17	1－12－d	口縁部から斜めに隆帯が下がる。波状隆帯の一部か。			
		7	T－18	1－12－d				
		8	S－18	1－12－d	波底部か。			
		9	V－18	1－12－a				
		10	T－16	1－12－a				
		11	W－25	1－12－a	壁垂隆帯か。			

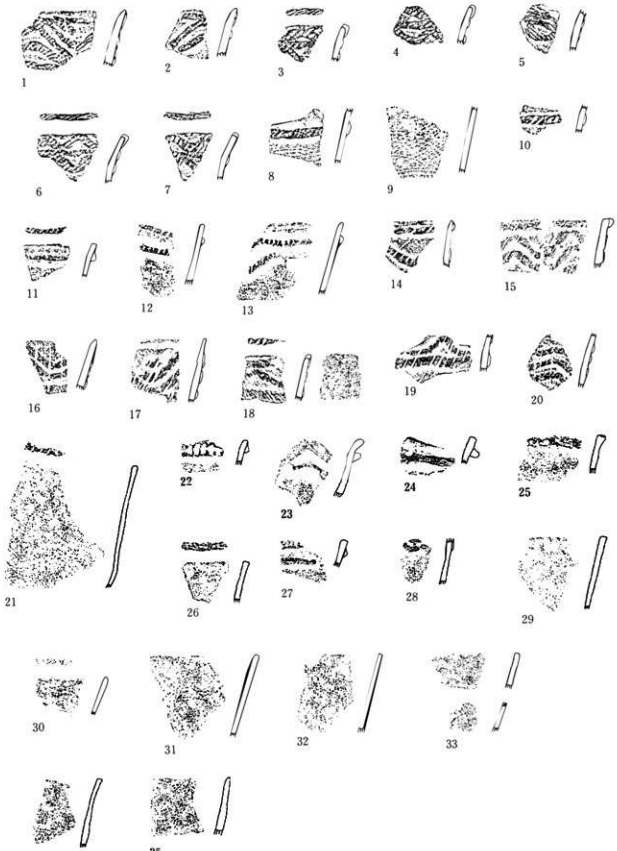
第1群土器　13類　繊維土器のタガ状隆帯に刻目のないもの

図版	挿図	挿図No.	出　土　地　点	分　　類	分　　様	高さ	容量ℓ	備考
	83	1	U－25、S B－01、№95	1－13－a	無文のタガ状隆帯を付ける。			
		2	S－19	1－13－a				
		3	M－21	1－13－a				
		4	U－18	1－13－a				
		5	S B－21	1－13－a				
		6	K－17	1－13－a				
		7	S B－21	1－13－a				
		8	U－2、S B－09	1－13－a				
		9	S B－04	1－13－a				
		10	T－17	1－13－a				
		11	K－17	1－13－a				
		12	H－20、№3	1－13－a				
		13	L－18	1－13－a				
		14	S B－03	1－13－a				
		15	R－18	1－13－a				
		16	S B－09	1－13－a				
		17	S－18	1－13－a	口縁部に刻目			
		18	S B－28	1－13－a	口縁部に刻目、条痕を残す。			
		19	M－16	1－13－a				
		20	S B－31	1－13－a				
		21	K－16	1－13－a				
		22	S－18	1－13－a				
		23	S B－06、№322	1－13－a				
		24	S B－03	1－13－a				
		25	S B－01	1－13－b				

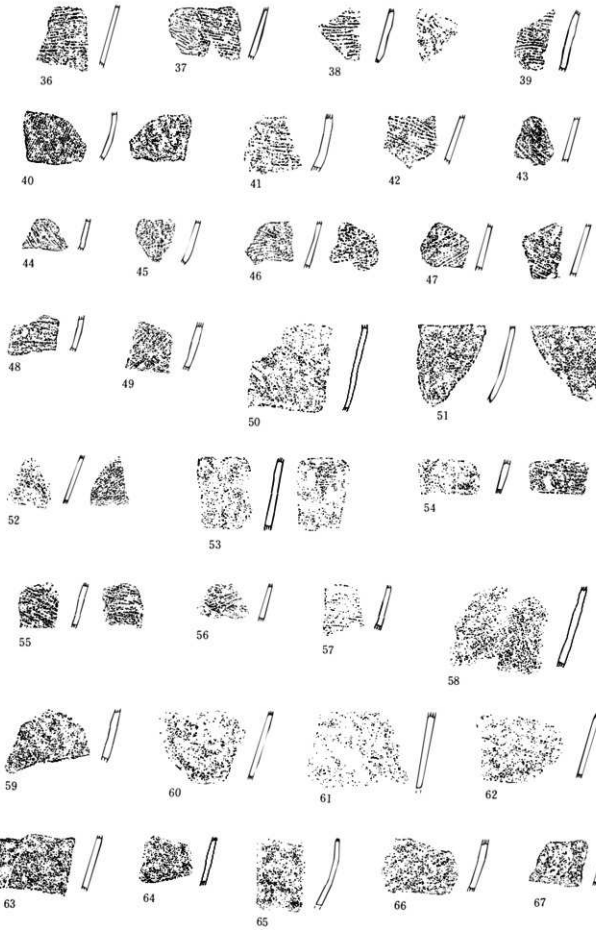


第 83 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器 (22)

第 84 図　釈迦堂S－Ⅰ区　早期の土器 (23)



第 85 図　釈迦堂Ｓ－１区　早期の土器（24）



第 86 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　早期の土器（25）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	83	26	R－16	1－13－a	裏に条痕			
		27	R－18	1－13－a				
		28	R－19	1－13－b	2本の隆帯			
		29	R－16	1－13－b	2本の隆帯			
		30	T－18	1－13－a				
		31	SB－02、03	1－13－a				
		32	SB－02	1－13－a				
		33	SB－28	1－13－a				
		34	SB－01	1－13－a				
		35	SB－42	1－13－a				

第1群土器　14類
東海系土器

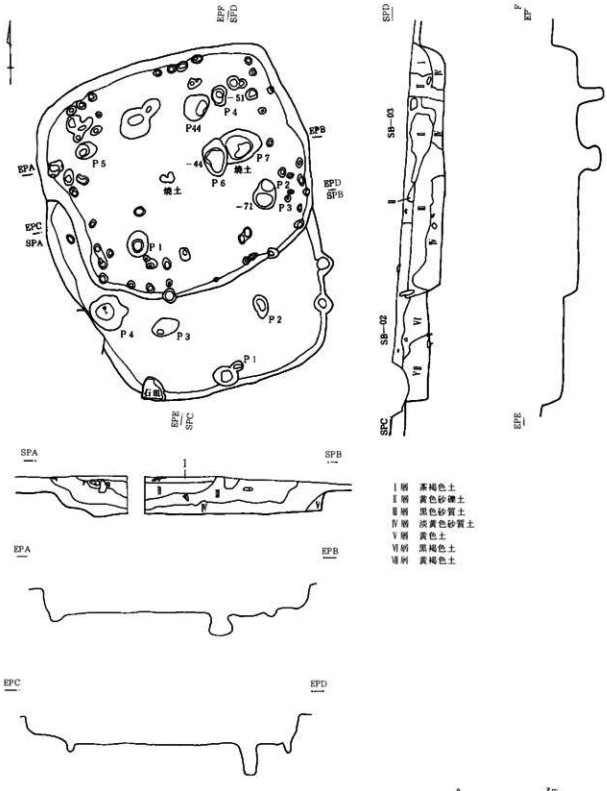
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	分様	高さ	容量ℓ	備考
39	85	1	SB－43	1－14－a	隆帯上に背圧痕を施すもの、平行隆帯の間に波状隆帯			
		2	SK－183	1－14－a				
		3	SB－31	1－14－a				
		4	W－21	1－14－a				
		5	U－23	1－14－a				
		6	L－21	1－14－a				
		7	SB－31	1－14－a				
		8	T－18	1－14－a	隆帯下に波状条痕			
		9	SB－43	1－14－a	8と同一個体であろう。			
		10	SB－03	1－14－b				
		11	SB－07	1－14－b	隆帯上に刻目を施すもの。			
		12	G－19	1－14－b				
		13	G－19	1－14－b				
		14	SK－76	1－14－c	隆帯上から器面にかけて、沈線文を引くもの。			
		15	L－21	1－14－c				
		16	Q－8	1－14－c				
		17	I－19	1－14－c				
		18	SB－03	1－14－c				
		19	SB－05	1－14－c				
		20	SB－12	1－14－c				
		21	M－15　No.4	1－14－e	口唇に刻目			
		22	M－17	1－14－c	口唇に太い刻目			
		23	I－19	1－14－d	隆帯上無文のもの。			
		24	I－16	1－14－d				
		25	T－19	1－14－d				
		26	SB－03	1－14－e				
		27	S－16	1－14－d				
		28	R－15	1－14－d				
		29	N－15	1－14－f	無文の口縁			
		30	N－15	1－14－f	条痕を有するもの。			
		31	N－15	1－14－f				
		32	P－15	1－14－f				
		33	S－16、M－17	1－14－f				
		34	J－17	1－14－f				
		35	I－17	1－14－g				
		36	R－18	1－14－g				
		37	U－22	1－14－g				
		38	R－19	1－14－g				
		39	V－23	1－14－g				

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	分様	高さ	容量㎥	備考
	86	40	SB−12	1− 14− g				
		41	J−17	1− 14− g				
		42	T−16	1− 14− g				
		43	SB−31	1− 14− g				
		44	SB−31	1− 14− g				
		45	V−23	1− 14− g				
		46	T−22	1− 14− g				
		47	U−24	1− 14− g				
		48	Q−19	1− 14− g				
		49	SB−31	1− 14− g				
		50	H−18	1− 14− g				
		51	SB−39	1− 14− g				
		52	SB−02	1− 14− g				
		53	K−17	1− 14− g				
		54	P−17	1− 14− g				
		55	P−19	1− 14− g				
		56	T−18	1− 14− g				
		57	J−17	1− 14− g				
		58	T−16	1− 14− g				
		59	J−18	1− 14− g				
		60	SB−39	1− 14− g				
		61	T−20	1− 14− g				
		62	M−17	1− 14− g				
		63	T−18	1− 14− g				
		64	SB−39	1− 14− g				
		65	N−16	1− 14− g				
		66	V−20	1− 14− g				
		67	S−16	1− 14− g				

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	分様	高さ	容量㎥	備考
	84	1	J−19No.	1−3−c	新面三角形隆帯に貝背圧痕を施文			
		2	V−18	1−4−e	台形隆帯に貝圧痕を施文			
		3		1−14	東南系土器の胎土である。平行隆帯の間に2本の波状隆帯をめぐらす。隆帯の上に貝殻腹縁を斜突し、やや引いているようである。			
		4		1−14	東南系土器　折り返し口縁の上に半截竹管様工具で沈線を加えている。上の山Z式に比定されよう。			
		5			含繊維土器で口辺部に三角形状隆帯が付くもので、第77図2のようなモチーフとなる。			
		6		1−13−a	含繊維土器　口辺部に1本のタガ状隆帯がめぐる。			
		7		1−	含繊維土器　タガ状隆帯に左結刻目			
		8		1−	含繊維土器　タガ状2本の隆帯、隆帯上無文			
		9−17			〃			

第４章　縄文時代前期

第　1　節　　前期の住居と出土遺物



第 87 図　釈迦堂Ｓ－１区ＳＢ－02・03（１：80）

S－I区　SB－02

SB－02はSB－03に切られた住居址である。おそらく一辺が約500cmの隅丸方形プランである。主柱穴は4個と思われるが、2個はSB－03に切られて不明である。SB－03と違い壁柱穴はない。炉址も不明である。南側の壁にかかって、板状の大きな石皿がある。

前期の釈迦堂Z3式の出土状態の大きな特色として、大きな破片が多く、復元できることは少ないのである。またSB－03から諸磯a～b式土器を出土し、SB－03との切り合い関係があることから、この釈迦堂Z3式は諸磯a式より古いことは明らかである。黒浜式、北白川下層式土器の伴出があることから、その時間的位置も自から明らかである。

石器は石鏃4、稜磨石3、磨石6、玉石1、石皿1、打斧2、礫器2、黒曜石134g、水晶64gである。中期に比較して稜磨石の出土が多い。

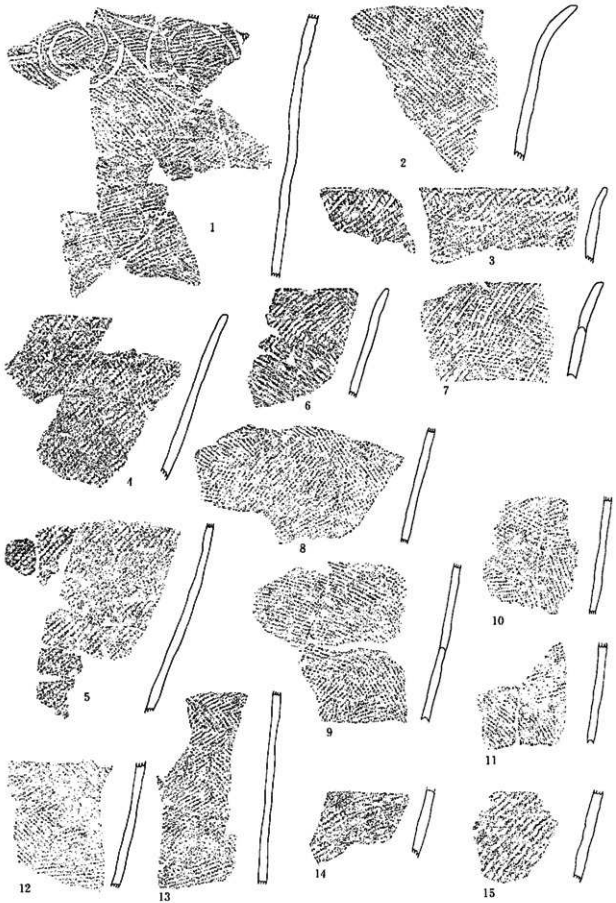
SB－03

諸磯a～b式の住居址である。主柱穴4個の隅丸方形プランで、炉址は住居中央部にある地床炉である。またその北東側の2個のピットは貯蔵穴様のものである。住居の壁際には壁柱穴が並んでいる。

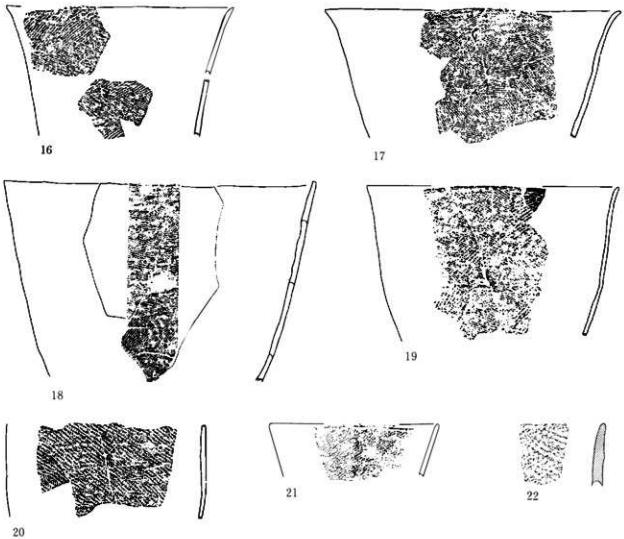
出土遺物のうち土器はいわゆる竹管文を有する土器群がある。これらは諸磯a式に属するものと、諸磯b式の古い部分に属する巾広爪形文土器などの出土がある。石器は、石鏃21、ドリル3、コア1、ピエス・エスキーユ1、石匙2、稜磨石3、磨石7、玉石2、石皿1、磨斧3、打斧18、礫器3、黒曜石703g、水晶163gである。石鏃の出土量が多いことに気付く。また石器の種類が多いことも特色の一つである。

SB－02

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
45	88	1	SB－02 №17	2－1	縄文地に一本引成縄で円文等を描いている。縄文はLRとR？を結束第1種としたものである。			
		2	№5	2－1	異った撚りの縄を使用している。LRとRL			
		3	№26	2－1	直前段の縄の太さが異なる縄　LR			
		4		2－1	斜縄文　LR			
		5	№7	2－1	4と同一個体であろう			
		6	№39	2－1	LLとRRか			
		7	№56	2－1	LLとRRか			
		8	№4	2－1	LLとRRか			
		9	№11、14、15	2－1	LLとRRか			
		10	№9	2－1	LLとRRか			
		11	SB－03 №137 №26	2－1	LLとRRか			
		12		2－1	LLとRRか			
		13		2－1	LLとRRか			
		14	№24	2－1	LR			
		15	№25	2－1	LLとRRか			
	89	16	№4	2－1	LRとRLが併用されている。菱形縄文をなしている。			
		17	№2　№118	2－1	Rとして菱形縄文をなしている。あるいは反の撚りか？			
40		18	№47　№58	2－1	RRとLLと思われる。一見単なるRとしのようだが、条が直線的にそろわない点が目立つ。			
		19	№143	2－1	多様な縄が使われている。RとLRとRにLの縄を間をあけて巻きつけたものもある			
		20	№3	2－1	RL			
		21	№122	2－1	LR			
		22		2－5	関東系土器　黒浜式　おそらく縄を軸としとRを並べて巻きつけている。			



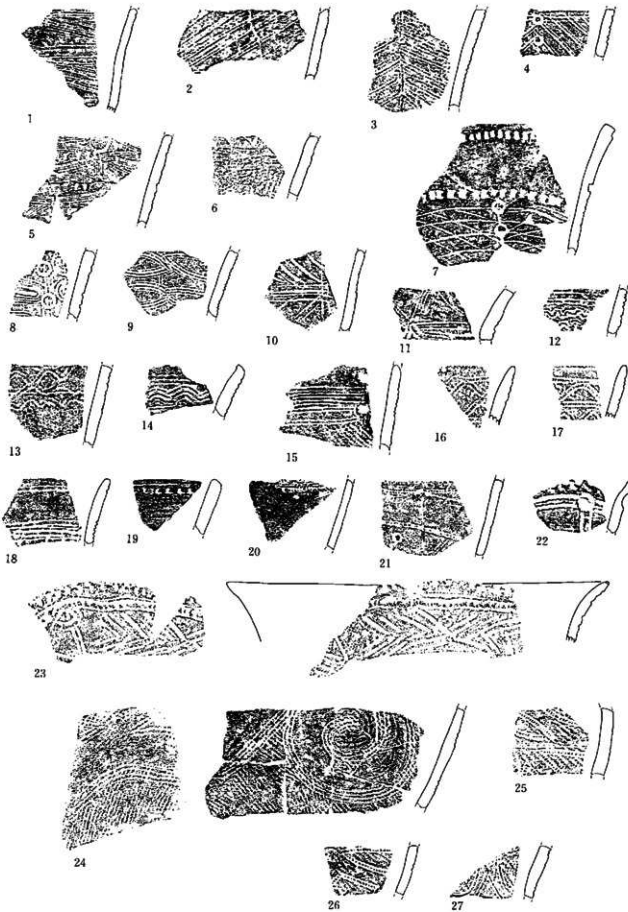
第 88 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－02出土土器（１）



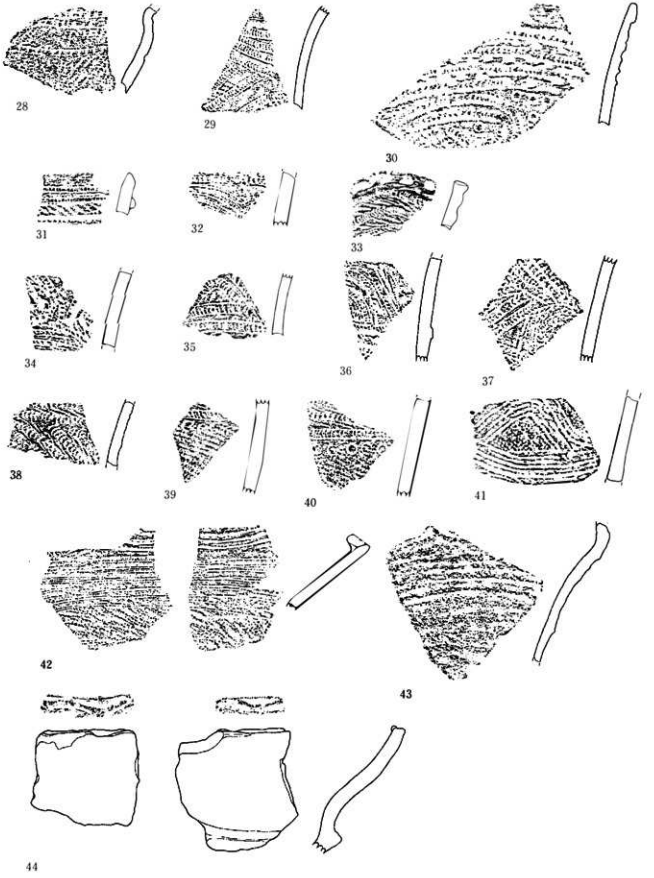
第 89 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－02出土土器（2）（16～21は１：６）

SB－03

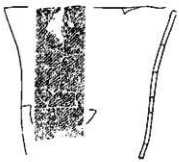
図版	挿図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
45	90	1		2－2－a	櫛描文で菱形文を描く			
		2		2－2－b	木枝状半截竹管文　助骨文			
		3		2－2－b	木枝状半截竹管文　助骨文			
		4		2－2－b	木枝状半截竹管文　交点に円形竹管文地文はL R			
		5		2－2－b	櫛描助骨文　交点に円形竹管文			
		6		2－2－b	縄文地に櫛描文			
		7	№67	2－2－c	口縁にヘラ状刺突文　胴部に格子目状沈線で蔵に円形竹管文			
		8		2－2－b	櫛描文と円形竹管文			
		9		2－2－b	櫛描文			
		10		2－2－b	櫛描文			
		11		2－2－e				
		12		2－2－e	コンパス文			
		13		2－2－e	無文地に波状文			
		14		2－2－e	無文地に波状文			
		15	№97	2－2－e	無文地に平行沈線と円形丸棒状刺突文			
		16		2－2－e	縄文地に波状文			
		17		2－2－e	縄文地に波状文			
		18		2－2－c	無文地に押引文			
		19		2－2－c	口縁に刺突文			
		20		2－2－d	あるいは木の葉状文をなすものか。爪形文が見える。			



第 90 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－03出土土器（1）



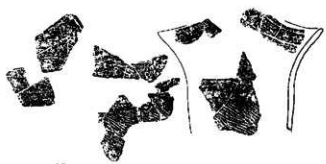
第 91 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－03出土土器（２）



45

46

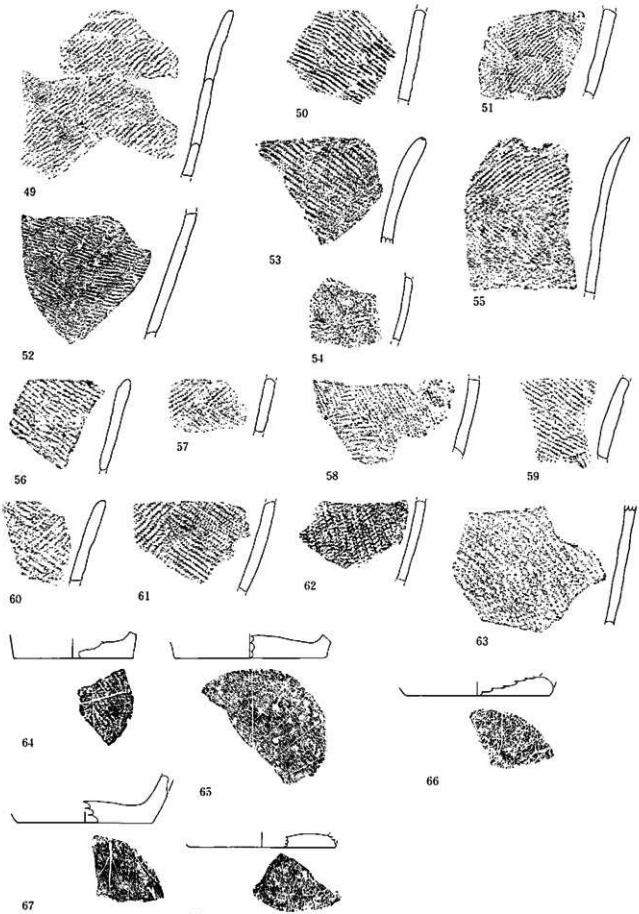
47



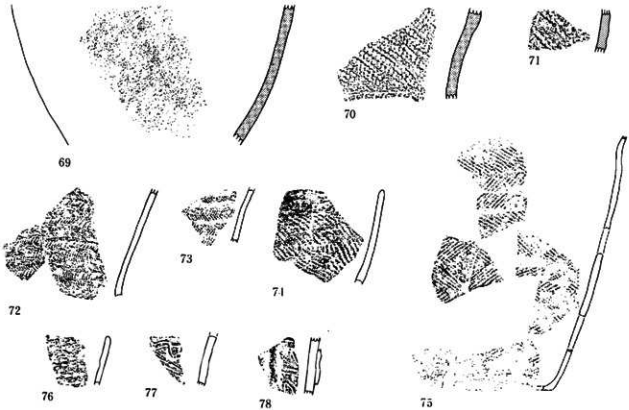
48

第 92 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－03出土土器（３）（45～48は１：６）

図版	挿図	図中No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	90	21	№56	2－2－c	細い連続爪形文がみえる。			
		22		2－2－c	無文地に平行沈線文と丸棒状刺突文			
		23	№39、109	2－2－c	縄文地に半截竹管文			
		24	№121	2－2－d	連続爪形文で区画し、磨消縄文をなしている。ＲＬ			
		25		2－2－d	木の葉状文　ＲＬ			
		26		2－2－d	木の葉状文　ＲＬ			
		27	№70	2－2－d	木の葉状文　ＲＬ（1～27までが諸磯ａ式）			
	91	28	№57	2－2－c	縄文地に巾広連続爪形文			
		29		2－3－a	巾広連続爪形文			
		30	№76	2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		31		2－3－a	降帯上刻目			
		32		2－3－a	縄文地に弧線文と円形竹管文			
		33		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		34		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		35		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		36		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		37		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		38		2－3－a	巾広連続爪形文と降帯に押圧痕			
		39		2－3－a	巾広連続爪形文と胴下部は縄文帯			
		40		2－3－a	巾広連続爪形文と胴下部は縄文帯			
		41	№74	2－3－c	縄文地に平行沈線文　ＲＬ			
		42	№14	2－3－c	縄文地に平行沈線文　浅鉢か？			
		43	№17	2－3－b	縄文地に浮線文			
		44	№71	2－3－e	無文の浅鉢か　口縁部に浮線文（28～44までが諸磯ｂ式）			
40	92	45	№79、85、122、93	2－2－e	縄文ＲＬ			
		46	№119	2－2－e	ＲＬの斜縄文と結節縄文がみられる。（複接文）			
		47	№99	2－2－e	ＲＬの斜縄文と結節縄文がみられる。			
45		48		2－2－d	口辺部無文地に肋骨文を描く、胴下部は斜縄文（45～48諸磯ａ式）			
	93	49		2－1	斜縄文　ＬＬか			

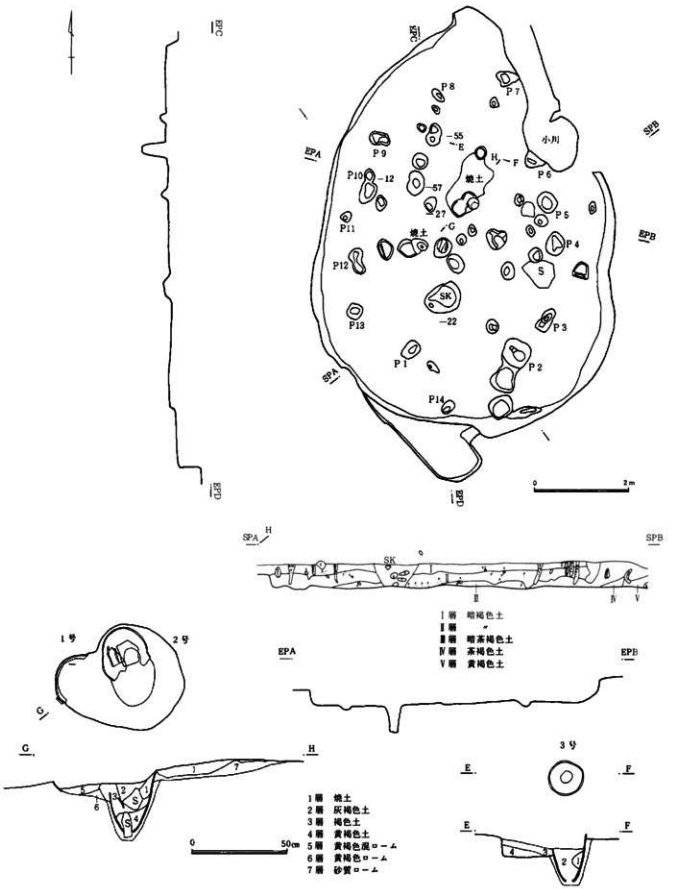


第 93 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－03出土土器（4）



第 94 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－03出土土器（5）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	93	50		2－1	斜縄文　LLか			
		51		2－1	斜縄文　LLか			
		52		2－1	斜縄文　横縦縄文　RL　内面調整は粗			
		53		2－1	RL			
		54		2－1	RLにLを巻いている。			
		55		2－1	RLとLR			
		56		2－1				
		57		2－1	RLとLR			
		58		2－1	RLとLR			
		59		2－1	RR			
		60		2－1	LLとRR			
		61		2－1	LLとRR			
		62		2－1	LLとRR			
		63		2－1	LLとRR			
		64		2　1	底部　縄文地に木の葉文			
		65		2　1	底部　縄文地に木の葉文			
		66		2　1	底部　縄文地に木の葉文			
		67		2　1	底部　縄文地に木の葉文			
		68		2　1	底部　縄文地に木の葉文			
	94	69	№82	2－5	関東系土器　胴下部			
61		70		2－5	関東系土器　RLの底面段3条か			
		71		2－5	関東系土器　縄軸にRとLを非べて巻いた縄軸絡条体			
64		72	№124	2－6－c	近畿東海系土器　北白川下層Ⅱa式シュロ状文			
		73		2－6－c	近畿東海系土器　北白川下層Ⅱa式シュロ状文			
63		74	№72	2－6	近畿東海系土器　口辺部表裏に赤彩あり　RL			
		75		2－6	近畿東海系土器　RLとLR			
		76		2－6－f	近畿東海系土器　口辺部に孔点を持つ　SB－06、42の埋設8に類例あり			
		77		2－6－f	近畿東海系土器　隆帯と平行沈線文			
		78		2－6－f	近畿東海系土器　隆帯と平行沈線文			



第 95 図　釈迦堂S－I区SB－05（1：80）炉は（1：20）

S－I区SB－05

長軸850cm、短軸620cm、壁高46cm、柱穴は基本的には4個と思われるが、壁にそったピットをも含めれば10個となる。焼土の広がりは2ヶ所あり、1号～3号埋甕は同じ焼土の広がりの中にある。1号と2号は近接してあり、1号は関東系黒浜式土器の胴部を利用している。2号は釈迦堂Z3式で口辺部は欠損しているが胴から底部にかけて残る。3号埋甕も2号よりやや小型の土器である釈迦堂Z3式である。

なお、この住居址の南側に落ち込みがあり、あるいは、別の住居址が重複している可能性がある。また北側は小川によって流されている。

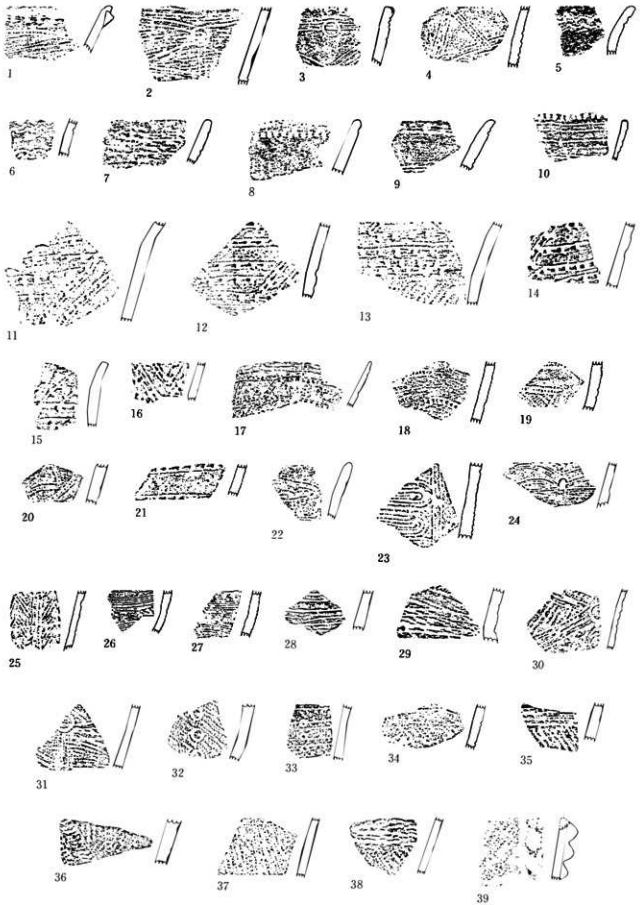
出土遺物は豊富である。土器は全縄文の釈迦堂Z3式が多いが、竹管文をもつもののもある。住居址の時期は3基の埋甕炉から決定される。石器は石鏃11、ドリル1、コア1、ポイント1、石匕2、磨磨石12、磨石23、石皿4、磨斧7、打斧8、礫器6、黒曜石593g、水晶239gである。

また土偶の出土がある。図254－1・2はSB－05から下半身が出土し、顔の一部と胸部はSK－227から出土接合する。また、3と4は同一個体で胴部もまたSB－05の上層である。顔に爪形文（人の爪）があり、右手もあることから、両脚も備えたものであろう。6は頭に孔を有するもので、類例は東海地方から東北地方までである。SB－27出土の住居址と接合する。7には乳房の表現までである。

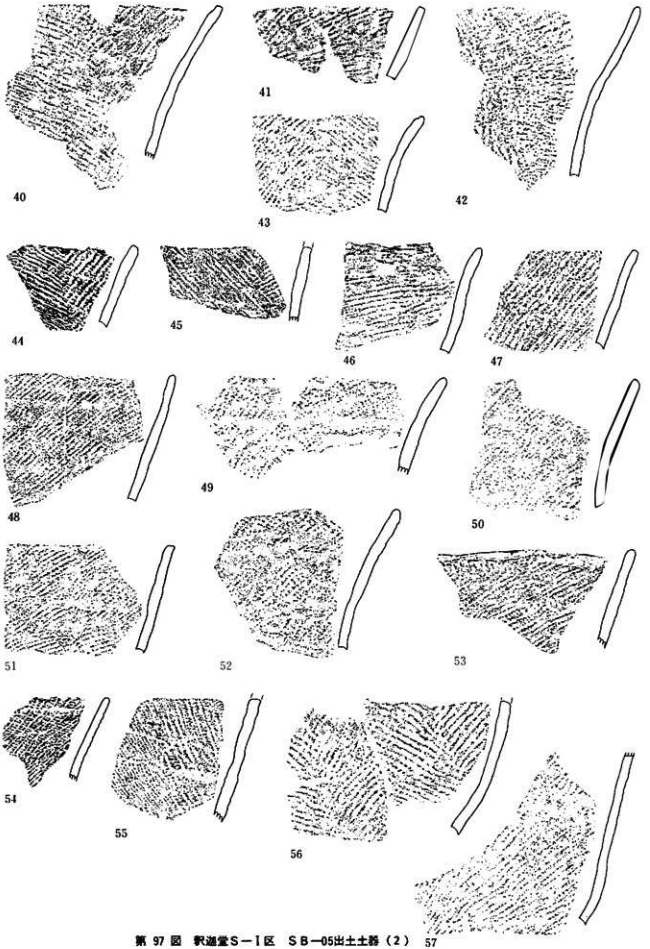
前期釈迦堂Z3式期の土偶がSB－05に集中していることおよび埋甕炉を3基もつことから何か特別な住居ではなかったかと思われる。

SB－05

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
47	96	1		2－2－a	2重口脈に押引文　胴部竹管文　ミガキはよいが指頭圧痕あり。			
		2		2－2－a	縄文地RLに菱形文と交点に円形竹管文			
		3		2－2－a	口脈部に爪形文　内面ミガキ			
		4		2－2－a	半截竹管沈線と交点に円文　内面のミガキはやや粗い。			
		5	№177	2－2－e	コンパス文			
		6		2－2－e	コンパス文			
		7	№239	2－2－e	縄文地に押引文　内面ミガキ			
		8		2－2－c	無文の口辺に爪形文　内面ミガキ			
		9		2－2－e	無文の口辺に押引文　内面ミガキ			
		10		2－2－e	口脈部にミガキ			
		11		2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		12		2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		13	№220	2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		14	№226	2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		15		2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		16		2－2－e	器面にハケ痕のようなものが残り、裏面指頭圧痕や擦痕が残る。有尾式か			
		17		2－2－e	無文地に爪形文			
		18		2－2－c	木の葉状入組文（？）を爪形文で区画			
		19		2－2－d	縄文RL			
		20	№220	2－2－d	木の葉状入組文　内面ミガキ			
		21		2－2－c	無文地に押引文　ミガキは中程度			
		22	№23	2－2－e	無文地に沈線文			
		23		2－2－e	擦痕の残る器面に流水状沈線、ミガキは中程度			
		24		2－2－b	肋骨文			
		25		2－2－b	半截竹管による羽状文と押引文			
		26		2－2－b	無文地に集合沈線による肋骨文			
		27	№23	2－2－b	無文地に集合沈線による肋骨文			
		28		2－2－e	無文地に沈線文			
		29		2－2－e	縄文地に半截竹管沈線			
		30		2－1	縄文地LR			
		31		2－1－d	縄文地LR			
		32		2－1	縄文地RLに円形竹管文			

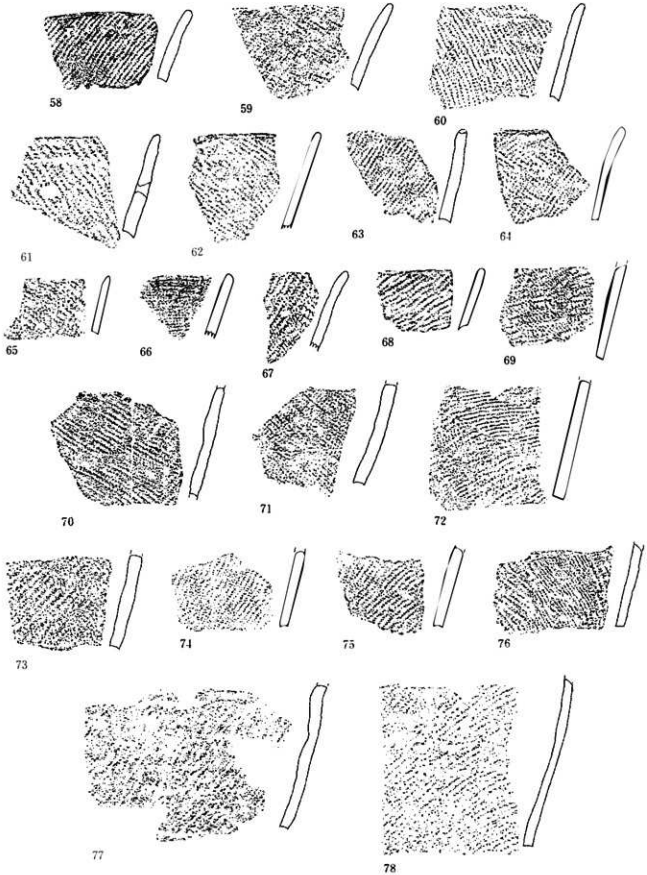


第 96 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－05出土土器（１）

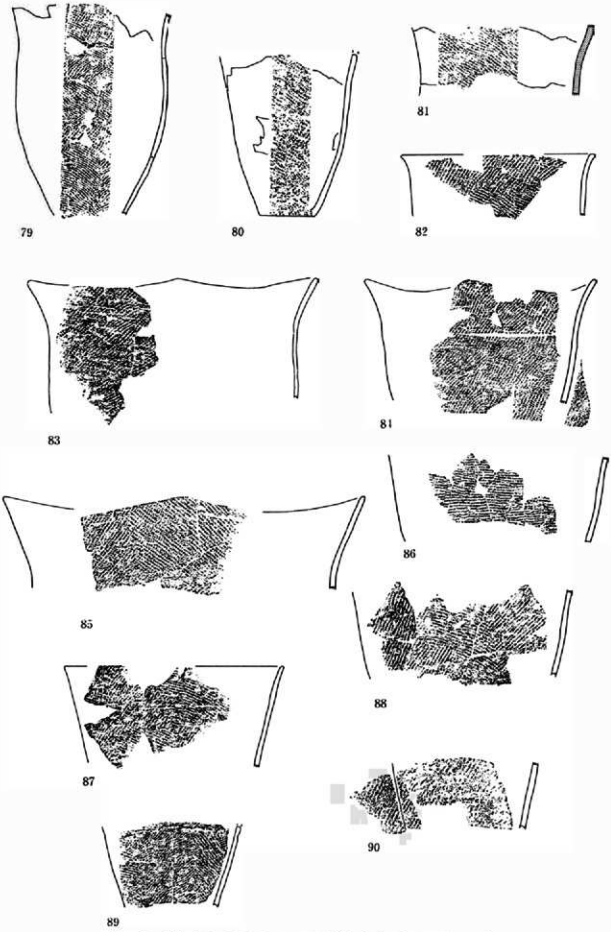


第 97 図　釈迦堂S－1区　SB－05出土土師（2）

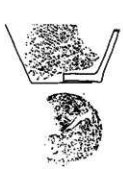
図版	第図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		33		2－1	縄文地ＲＬに沈線と円形竹管文　ミガキは粗い			
		34		2－1	縄文地ＬＲに半截竹管文と綾繰文			
		35		2－1	縄文地に沈線			
		36		2－1	平行沈線内に爪形文　内面ミガキ			
		37		2－1	縄文地ＬＲに半截管沈線　ミガキはていねい			
		38		2－1	縄文地ＬＲ　縄文地ＬＲに半截管による波状文			
		39		2－1	縄文地ＬＲに指頭圧痕のある隆帯			
	97	40	№266	2－1	ＬＬとＲＲによる羽状縄文			
		41	№247	2－1	ＬＬか			
		42		2－1	ＬＬとＲＲの反の捻り			
		43		2－1	ＬＬとＲＲの反の捻り			
		44		2－1	ＲＲとＬＲで羽状縄文			
		45	№104	2－1	ＲＲとＬＲの羽状縄文			
		46	№55	2－1	ＬＲ			
		47	№123	2－1	ＬＲ			
		48	№4	2－1	斜縄文ＲＬ			
		49	№257	2－1	ＬＲ			
		50		2－1	斜縄文ＬＲと綾繰文			
		51	№144	2－1	斜縄文ＲＬ			
		52	№154	2－1	斜縄文ＬＲ			
		53	№56	2－1	縄文ＬＲとＲＬを併用			
		54		2－1	Ｒにｒをし巻きした縄			
		55	№76	2－1	斜縄文　ＲとＬＲ			
		56	№248	2－1	ＬＬとＲＲと思われる			
		57		2－1	２種類のＬＲ			
	98	58		2－1	ＬＲ			
		59		2－1	ＬＲとＲＬの羽状縄文			
		60	№155	2－1	縄文ＲＬ			
		61		2－1	縄文ＲＬ			
		62	№121	2－1	縄文ＲＬ			
		63		2－1	ＬＲ			
		64	№356	2－1	縄文ＲＬとＬＲ			
		65		2－1	ＲＬ			
		66		2－1	ＲＬ			
		67		2－1	縄文ＲＬとＬＲ			
		68		2－1	ＬＲ			
		69		2－1				
		70	№280	2－1				
		71		2－1				
		72	№132	2－1	縄文ＬＲ			
		73	№269	2－1				
		74	№333	2－1				
		75		2－1				
		76	№76	2－1				
		77	№43	2－1	縄文ＬＲ			
		78	№245	2－1	縄文ＬＲ			
40	99	79	№130	2－1	埋甕炉　ＲＲとＬＬで羽状縄文			
		80	№130	2－1	埋甕炉　ＬＲとＲＬを併用			
		81	№130	2－1	埋甕炉　関東系土器、黒浜式土器			
		82	№273	2－1	羽状縄文　ＬＲとＲＬ			
		83	№273	2－1	捻りのゆるいＬＲ			
		84	№336	2－1	縄文ＬＲ			
47		85	№225	2－1	縄文ＬＲとＲＬ			
		86		2－1	斜縄文Ｌ			
		87		2－1	ＲとＬＬもしくはＲとＲＲか			



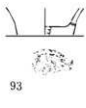
第 98 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－05出土土器（3）

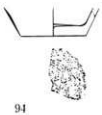


第 99 図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－05出土土器（４）（79～90は１：６）


91

92


93

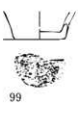

94

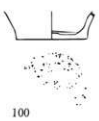
95

96

97

98


99


100

101

102

103

104

105

106

107

109

108

第100図　駅遊堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－05出土土器（５）（91～106は１：６）

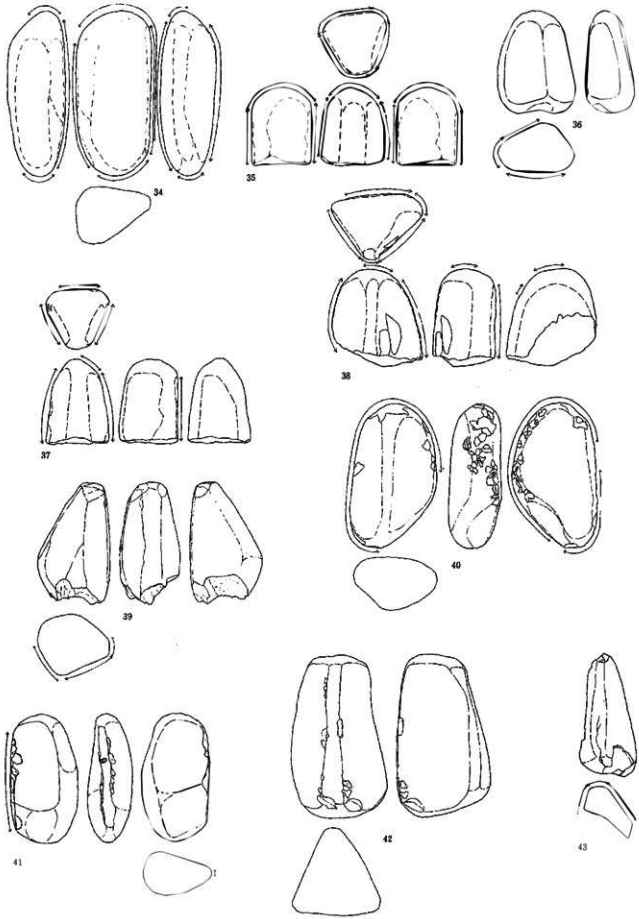
図版	挿版	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	99	88		2－1	LLとRR			
		89	№320	2－1	RLに部分的にLR			
		90	№251	2－1	LLであろう			
	100	91	№163	2－1	底部 木の葉底RL			
		92	№274	2－1	底部 木の葉底にさらにRを施文			
48		93		2－1	底部 木の葉底			
		94	№346	2－1	底部 木の葉底			
		95	№151	2－1	底部 木の葉底			
		96	№619	2－1	底部 木の葉底			
		97	№2	2－1	底部 木の葉底			
		98	№246	2－1	底部 木の葉底			
		99	№188	2－1	底部 木の葉底			
		100	№40	2－1	底部 木の葉底			
		101	№112	2－1	底部 木の葉底			
		102	№268	2－1	底部 木の葉底			
		103	№295	2－1	底部 木の葉底			
		104	№82	2－1	底部 木の葉底			
61		105	№279,230,SB－07,39,M－18 M－21	2－5	関東系土器、黒浜式 口縁部にコンパス文 胴部にLRにrを巻いたものとRLにrを巻いたものを結束した羽状縄文			
		106	P129	2－5	関東系土器、黒浜式 口縁部に爪形文 胴部にR［L／L／L］の直前段3条			
63		107		2－6	近畿東海系土器 北白川下層式			
		108	№52	2－6	近畿東海系土器 北白川下層式 底部			
		109		2－6	近畿東海系土器 口辺部に半截竹管による列点、清水ノ上Ⅱ式に続くものであろう。			SB－04 K－23 SB－07

SB－05 出土石器

№.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考	№.	名称	出土地点	大きさ	重さ	備考
1	磨製石斧	№25	12.7×5.0×2.6			23	磨石	№21	9.0×7.5×4.0		凹
2	磨製石斧	№1	10.5×6.7×4.0			24	磨石	№9	11.6×7.0×4.6		凹
3	磨製石斧	№7	7.0×3.6×2.3			25	磨石	№9	10.0×6.0×6.0		
4	磨製石斧	№20	9.0×2.5×1.8			26	磨石	№17	12.3×7.2×3.8		凹
5	磨製石斧	№33	6.7×2.3×1.7			27	磨石	№4	8.1×7.3×3.4		凹
6	打製石斧	№5	7.2×5.7×2.0			28	磨石	№29	7.5×6.0×4.0		
7	打製石斧		9.1×6.0×1.5			29	磨石	№1	9.4×9.6×4.0		凹
8	打製石斧	№40	9.7×6.0×13			30	磨石	№7	7.3×8.6×4.2		凹
9	打製石斧		9.6×4.0×0.7			31	磨石	№9	14.0×9.2×6.0		凹
10	打製石斧	№10	13.3×7.2×1.8			32	磨石	№18	9.8×11.0×4.7		凹
11	磨器	№27	12.3×16.3×4.2			33	磨石	№30	8.0×8.7×2.0		
12	磨器		10.2×10.2×4.2			34	敲磨石		5.5×7.7×6.0		
13	磨器	№24	8.1×10.6×3.7			35	敲磨石		8.0×6.6×6.9		
14	磨器	№25	7.0×7.5×2.7			36	敲磨石	№29	10.7×8.0×5.2	645	
15	石匙	№32	4.2×7.0×1.0			37	敲磨石		8.8×6.7×6.2		
16	石匙		2.7×7.0×0.5			38	敲磨石		10.0×4.2×6.7		
17	？		10.2×3.9×1.2			39	敲磨石	№22	12.7×6.2×6.5		
18		№1	4.7×4.3×1.2			40	敲磨石	№1	15.1×8.8×5.5		
19	スクレイパー	№6	4.5×3.7×0.4			41	敲磨石	№8	13.5×7.2×4.6		
20	磨石	№12	11.2×8.2×5.0		火熱変色している。	42	敲磨石	№16	17.0×9.8×9.2		
21	磨石	№31	11.0×9.5×4.0			43	敲磨石	№14	12.2×5.8×5.7		
22	磨石		13.5×7.3×4.3								

第101図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－05出土石器（１）（１：４）

第102図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－05出土石器（2）



第103図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－05出土石器（３）

S－I区　SB－06

住居址の中央部を小川によって、浸蝕されている。長軸820cm、短軸800cmの隅丸方形プランである。周溝が住居プランより100cm以上に小さく廻る。周溝深さ10cmで中に小穴がいくつかある。柱穴は4個と思われるが、2個は小川によって失なわれている。P2は直径50cm深さ75cmを測るもので、それほど深いものではない。壁高は60cmを測り、深く掘り込まれている。炉址は住居址中央部北側に東海系土器を埋設している。焼土もその周囲に見られた他、住居内4ケ所の床面から検出されている。

出土遺物は釈迦堂Z3式を中心とした土器の出土が多い。住居址の時期決定には埋甕炉の東海系実底土器の位置付けが問題となる。これはSB41、42の第3埋甕炉の土器と同一型式と思われる。口辺部に数条の列点を廻らし、胴部と内面に条痕様の沈線をもつものと思われる。この土器は東海地方でも未名の型式であるが、黒浜式に併行する型式と考えておきたい。

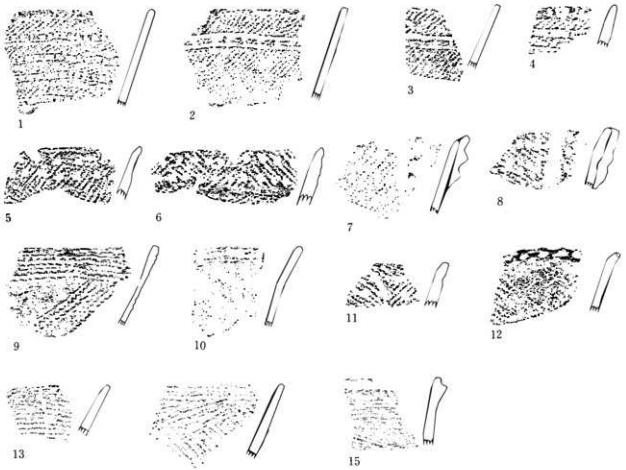
石器は石鏃24、ドリル1、コア1、ポイント1、石匙2、稜磨石11、磨石18、石皿2、磨斧2、打斧2、礫器1、玉石7、石皿2、黒曜石385g、水晶273gである。

SB－06

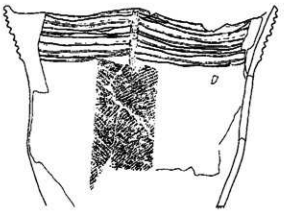
図版	挿版	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ml	備考
49	105	1～4		2－1	縄文地LRに押引文を施す。			
		5～6		2－1	縄文地LRに茎状工具の先端で刺突したもの			
		7～8		2－1	縄文地LRに口唇部から縦の隆帯が垂下する。			
		9	№168	2－1	コンパス文の退化した波状沈線を施す。			
		10	№57	2－1	無文地に波状沈線			
		11		2－1	縦の羽状縄文			
		12		2－1	口縁部に押圧文			
		13～14		2－1	口辺部に平行沈線文			
		15		2－1	二重口縁に押引文　無文地に平行沈線による菱形文			
40	106	16	№139、194	2－1	LLとRRの地文の上に口辺部は平行沈線を施し、その上に縦の隆帯が付く。			
		17	№124	2－1	LLとRRの菱形縄文			
		18	№225、255	2－1	RLとLRの羽状縄文地一本引き沈線、口辺部に縦の隆帯。			
41		19	№194、295、434	2－1	口辺部に屈折をもち、底の小さい深鉢形　RLとLR羽状縄文			
		20	№15、16、17	2－1	RLとLRの縄文			
		21	№70、77	2－1	RLとLRの縄文　口縁部刻目			
		22	№185	2－1	RLとLRの縄文			
		23	№471	2－1	RLとLRの縄文			
	107	24	№305	2－1	RRとLLの無節と思われる。			
		25	№124	2－1	RRとLLの無節と思われる。			
		26	№429	2－1	LL			
		27	№278	2－1	L？			
		28	№284	2－1	RR			
		29	№340	2－1	RL			
		30	2№20、	2－1	口辺部に押引文、LRの縄文			
		31	№357	2－1	LR			
		32	№305	2－1	LLとRRの羽状縄文			
		33	№254、256	2－1	RLとLR			
		34		2－1	無文の小形土器			
	108	35	№185	2－1	LRとRLの羽状縄文			
		36		2－1	RL			
		37		2－1	RL			
		38	№446	2－1	RLとLRの羽状縄文			
		39	№171	2－1	RL			
		40	№185	2－1	LあるいはLLか、RRの反の擦りか			
		41	№109、299、305、445	2－1	LLとRRの反の擦り			

第104図　釈迦堂S－Ⅰ区　.SB－06（1：80）炉は（1：20）

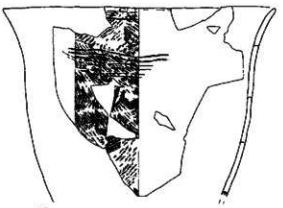
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分期	文様	高さ	容量ℓ	備考
	108		№418	2－1	LLとRRの反の撚り			
		43	№305	2－1	LLとRRの反の撚り			
	109	44	№294	2－1	RLとLR			
		45	№499	2－1	RLとLR			
		46	№296	2－1	RLとLR			
		47	№306	2－1	RLとLR			
		48	№305	2－1	LLとRRの反の撚り			
		49	№308	2－1	RLとLLの反の撚り			
		50	№423	2－1	LLとRRの反の撚り			
		51	№48	2－1	LL			
		52	№324	2－1	49と同一か			
		53	№172	2－1	LR			
		54	№446	2－1	RRとLL			
		55	№297	2－1	RL			
	110	56	№13	2－5	関東系土器　口辺部に爪形文　胴部にRL縄文、筋例多い。			
		57		2－5	関東系土器　爪形文			
		58	№278	2－5	関東系土器　無文地の口辺に垂れたコンパス文と			
		59	№96	2－5	関東系土器　LRとRLの羽状縄文			SB－07と接合
		60	№355	2－5	関東系土器　LR（O段多条か）の地文に波状文			
		61	№4	2－5	関東系土器　RLとLRの羽状縄文			
62		62	262	2－5	関東系土器　LLの反の撚り			
		63		2－5	関東系土器　LLの反の撚り			
		64	276	2－5	関東系土器　RLと思われる。			
		65	T－119、N－17 SK－13	2－5	関東系土器　網目状撚糸文			



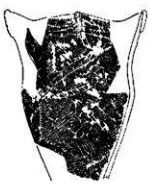
第105図　釈迦堂S－I区　SB－06出土土器（1）



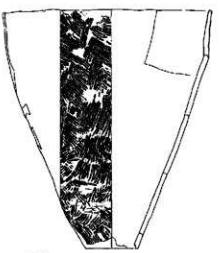
16



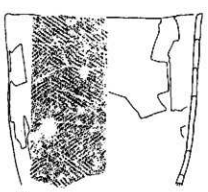
17



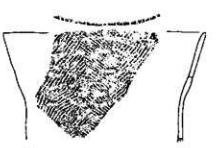
18



19



20

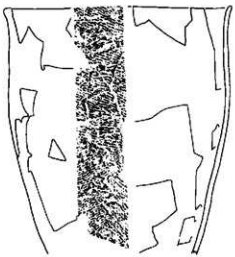


21

22

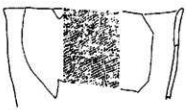
23

第106図　駅遺堂S－Ⅰ区　SB－06出土土器（2）（16～23は1：6）



24

25



26

27

28

29

30

31

32

33

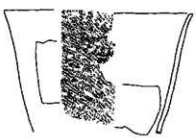
34

第107図　釈迦堂S－I区　SB－06出土土器（3）（24～34は1：6）

図版	挿図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	110	66	No.317	2－5	無文地に隆帯			
40		67	埋甕(1)	2－6	近畿東海系土器　口辺内側に条線　器厚の厚い、実氏土器　SB－42の埋甕(1)と同形式と思われる。			
63		68		2－6	近畿東海系土器　口縁部に刻目　LRのO段3条とRLのO段3条の羽状縄文			
		69		2－6	近畿東海系土器　北白川下層Ⅰ式条痕あり　頸部に刻目あり。			

35

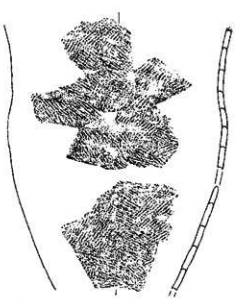
36


37

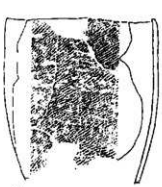
38

39

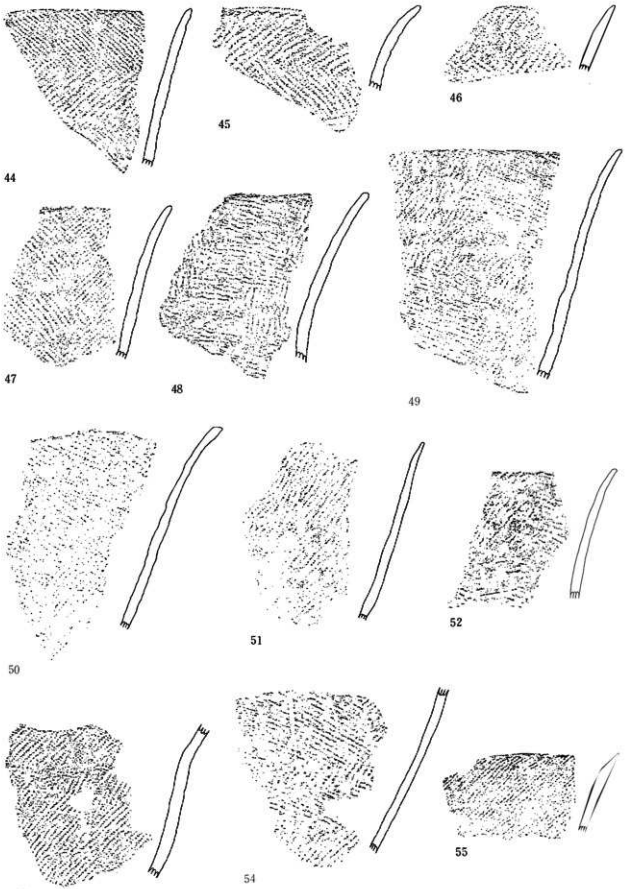
40


41

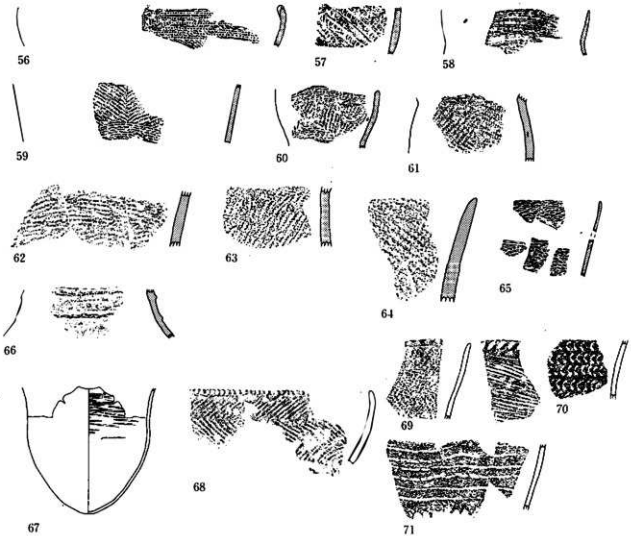
42


43

第108図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－06出土土器（４）（35～43は１：６）



第109図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－06出土土器（5）



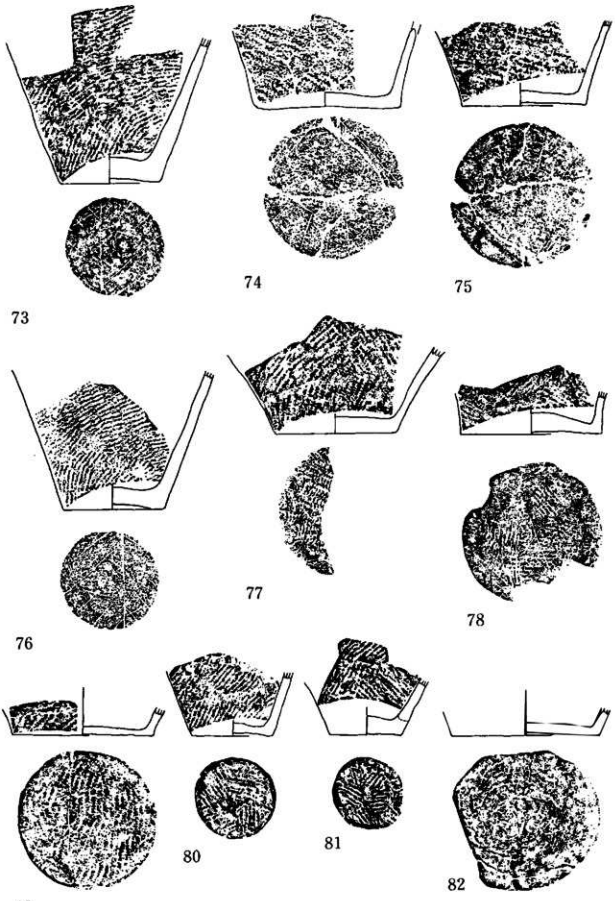
第110図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－06出土土器（６）（56、58～61、65～67は１：６）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量	備考
	110	70		2－6	近畿東海系土器　北白川下層Ⅱａ式			
63		71		2－6	近畿東海系土器　口辺部に平截竹管による列点、頸部に刻目			ＳＢ－26
	111	73			底部73～82は底部で、前期の土器製作法の一端を示す。			
		74			底部			
		75	No.176	2－6	底部ＲＬ			
		76	No.258	2－6	底部ＬＬ			
		77	No.261	2－6	底部木の葉文と縄文　ＬＬ			
		78	No.417	2－6	底部木の葉文と縄文　底部の縄文は不明、胴部はＬＬとＲＲ			
		79	No.350	2－6	底部縄文			
		80	No.198	2－6	底部縄文　底部にＬ、胴部はＬとＲ			
		81	No.280	2－6	底部縄文			
		82	No.349	2－6	底部無文			

Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－07

長軸620㎝、短軸600㎝の隅丸方形プランの住居址である。壁高62㎝、ピットの深さは60～70㎝で、６柱穴とも思われるが、西辺中央のピットが中期土坑の撹乱のため不明である。周溝が一部東壁際に見られる。炉は地床炉である。

この住居は発掘の順序を誤っているが、五領ケ台式期のＳＢ－23、藤内式期のＳＢ－29に床を張られ、釈迦堂



第111図　釈迦堂S－1区　SB－06出土土器（7）（73～82は1：4）

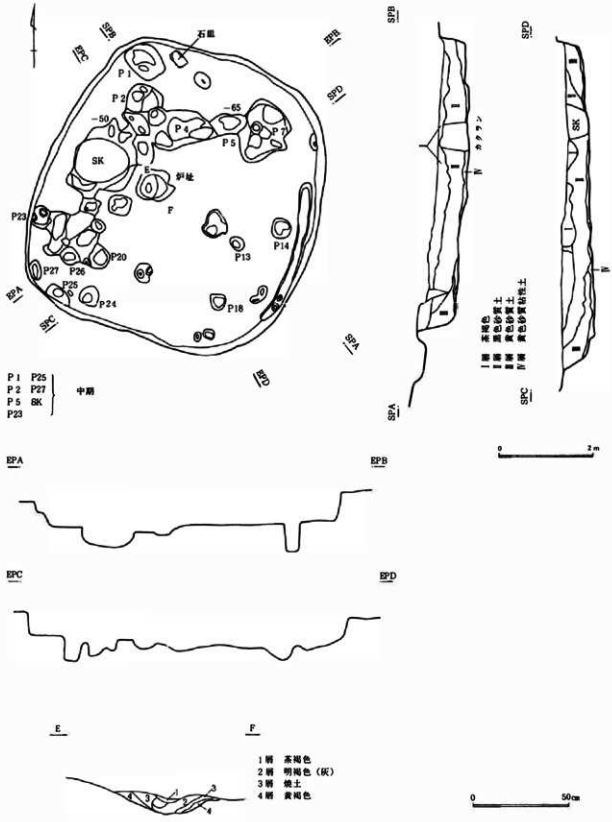
Ｚ３式期のＳＢ—38、55を切り、さらに、早期末のＳＢ—54をも切っている。しかも中期の土坑ＳＫ—23、24、25、26、27に切られている。

出土遺物は、諸磯ａ式、ｂ式が中心である。しかも、図114—38は縦方向の縄文を地文とした浮線文土器である。縦位の縄文は中期的である。石器は石鏃18、ドリル２、コア４、ピエス・エスキーユ３、石匙７、磨製石２、磨石８、玉石２、石皿１、磨斧４、打斧21、礫器３、黒曜石601ｇ、水晶333ｇである。

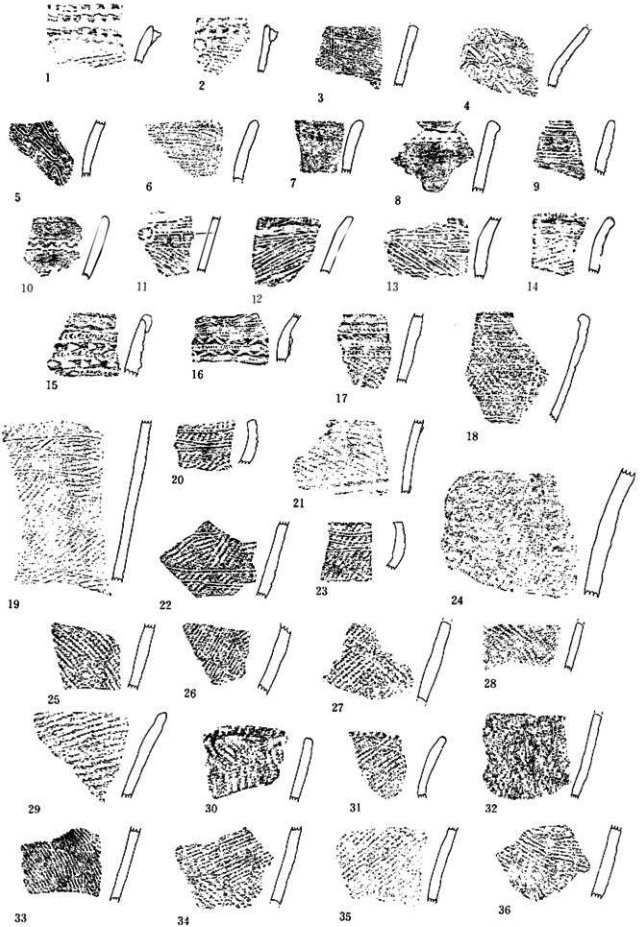
土偶（図224—10）が１点出土している前期諸磯ｂ式の土偶としては、本県では大泉村天神遺跡のものが、知られているにすぎない。また全国的には東京都板橋区四枚畑遺跡の例が知られている。なお住居の北側隅に板状石皿が備え付けられていた。

ＳＢ—07

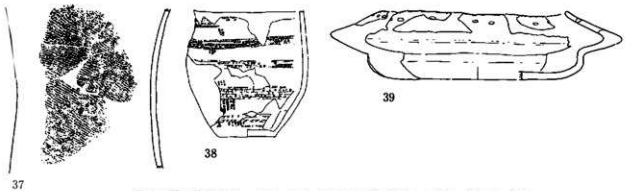
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
51	113	1		2—2—a	二重口縁に押引文　ミガキは良好			
		2		2—2—a	二重口縁に押引文　ミガキは良好			
		3		2—2—b	ＲＬの地文に半截竹管による助骨文			
		4		2—2—b	無文地に半截竹管による沈線沈線文、ミガキはやや良好			
		5		2—2—c	無文地に半截竹管による沈線沈線文、ミガキはやや良好			
		6		2—2—b	半截竹管内側による押引文とその沈線による助骨文　ミガキ良好			
		7	№78	2—2—c	口縁下に押引文　ミガキ良好			
		8		2—2—c	口縁下に押引文　ミガキはやや良好			
		9		2—2—b	助骨文の変形か			
		10		2—2—c	コンパス文　ミガキ良好、ミガキは良好だがハケ痕を残す。			
		11		2—2—a	集合沈線による菱形文			
		12		2—2—a	集合沈線による菱形文			
		13	№44	2—2—a	集合沈線による菱形文			
		14		2—2—a	集合沈線による菱形文			
		15		2—3—a	爪形文に隆帯上刻み			
		16		2—3—a	爪形文に隆帯上刻み、割合巾の狭い爪形文			
		17		2—3—a	爪形文に隆帯上刻み			
		18	№87	2—2—b	ＲＬの地文に半截竹管で円子様の文様を描き、交点に円形刺突文			
		19	№55	2—1	ＬＲの地文に半截竹管沈線ミガキは良好であるが、凹凸がある。№20と同一			
		20		2—1	ＬＲの地文、ミガキは良好であるが、やや凹凸がある。			
		21		2—3—c	（諸ｂ）			
		22		2—1				
		23		2—1				
		24	№63	2—1	ＲＬを粗い器面に施す。ミガキは良好			
		25—26		2—1	ＲＬ			
		27		2—1	ＲＬ			
		28		2—2—e	ＲＬの縄文　ミガキは良好			
		29	№61	2—1	ＬＲの縄文　ヘラ状工具による粗いミガキ			
		30		2—2—e	ＲＬの縄文　口頭部刻目　ミガキ良好			
		31		2—1	口頭部刻目、ＬＲの縄文			
		32		2—1	ＲＬ　ミガキ粗			
		33		2—1	内面はケズリを残す。ＲＲか			
		34		2—1	竹管様工具による条線　ミガキは粗　ＬＬか			
		35		2—1	ＬＬの無節縄文　内面は指頭圧痕を残し、ミガキはやや良			
		36		2—1	ＬＬの反の撚り　ミガキやや良			
	114	37	№70	2—2—c	口辺部と胴部を押引文で区画し、胴部を縄文ＲＬと綾絡文			
42		38	№76	2—3—c	縦の縄文に浮線文を貼り、その上に刻目と円形刺突を加えている。			
		39	№66	2—3—e	有孔土器			



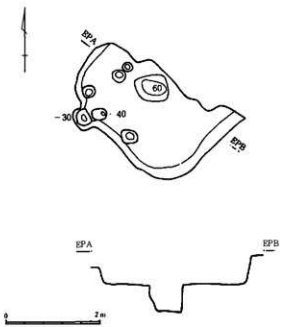
第 112 図　駅迦堂S－I区SB－07（1：80）炉は（1：20）



第113図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－07出土土器（1）



第114図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－07出土土器（2）　（37～39は1：6）



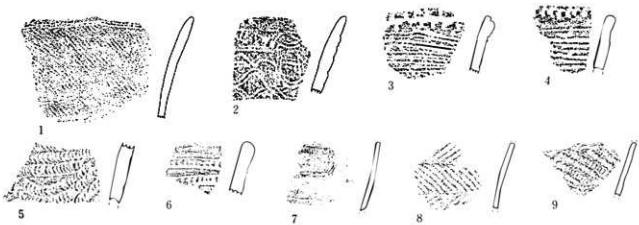
第155図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－08（1：80）

S－Ⅰ区　SB－08

小河川によって浸蝕された小型住居である。おそらく一辺が320cmの隅丸方形プランと思われる。炉址は明らかでなく、柱穴と確定できるピットはない。前期には集落内にこうした小型住居址が組み込まれることが多い。

出土遺物は少ないが、諸磯a式期の住居と思われる。中期の土坑も重複していたと思われ、藤内式土器（図228－82）も出土している。前期の住居内に掘り込まれた中期の土坑は、その検出はまったく不可能であった。

石器は石鏃13、ピエス・エスキーユ1、磨石1、磨斧2、黒曜石275g、水晶37gと極く少ない。

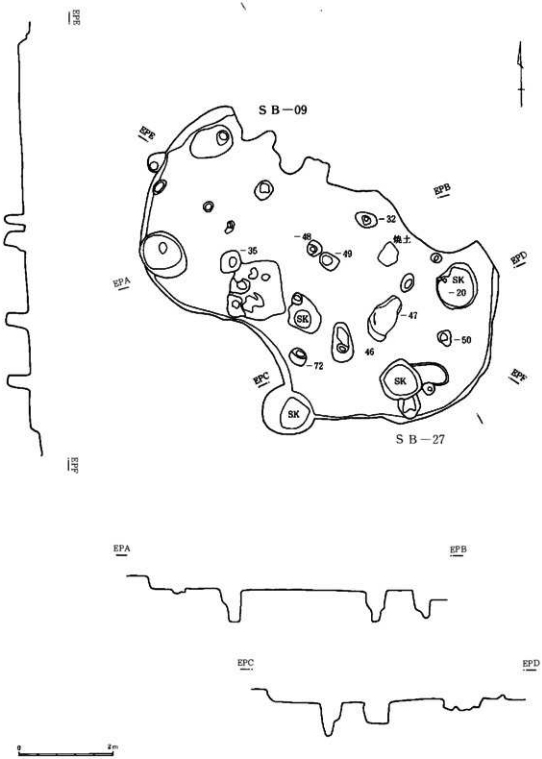


第116図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－08出土土器

SB－08

図版	挿図	縮尺%	出土地点	類	文様	高さ	容量ℓ	備考
51	116	1		2－2－c	口縁部に半截竹管内側による押引文とRL縄文と縄線文　内面ミガキ			
		2		2－2－e	縄文地に半截竹管文			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	116	3		2－2－a	口縁部に二重の押引文を施し、口辺部に竹管文を施す。			
		4		2－2－a	口縁部に二重の押引文を施し、口辺部に竹管文を施す。			
		5		2－2－a	越畑b式の巾広爪形文			
		6		2－2－c	平行沈線内爪形文			
		7		2－6－c	近畿東海系土器　北白川下層Ⅰa式			
		8		2－6	近畿東海系土器　ＬＲの０段２条とＲＬの０段３条の羽状縄文			
		9		2－6	近畿東海系土器　ＲＬの０段３条			



第117図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－09・27（１：80）

S－Ⅰ区　SB－09、27

SB－09を調査中、壁が異方向に伸びることを知って、これによって知られるプランからSB－27を設定したこれらの住居内には、中期の土坑がいくつか切り込んでいると思われる。

住居プランは09、27ともに隅丸方形もしくは円形プランを示す。柱穴は確定できない。また焼土ははあるが炉址とするには位置がおかしい。いずれにしても両住居址ともに不明確な部分が多い。

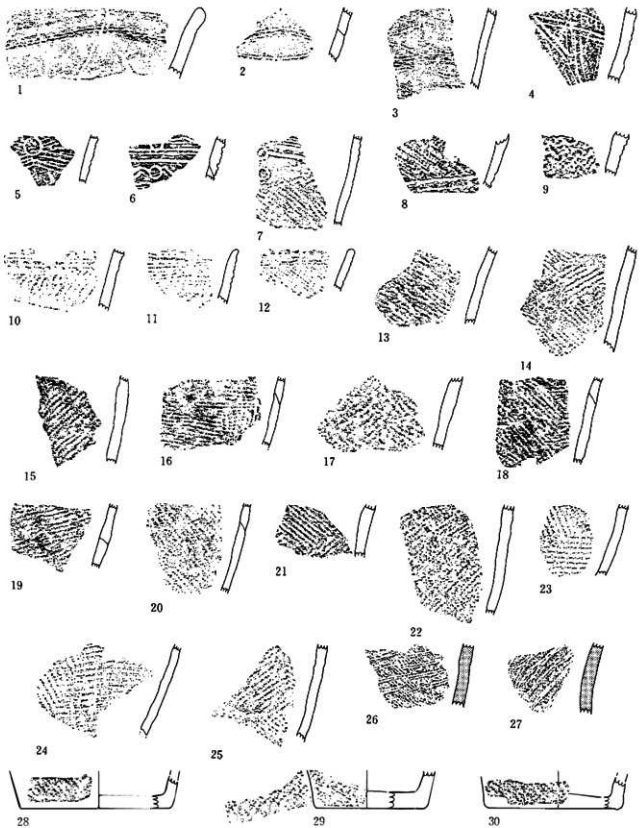
出土遺物はSB－09で、釈迦堂Z3式～諸磯a式までの出土遺物が少量あるが、これもまた釈迦堂Z3式期に位置付けたいと思うのである。

石器はSB－09で石鏃19、コア1、スクレイパー1、石匙2、稜磨石6、磨石8、玉石1、磨斧2、打斧3、礫器3、黒曜石653g、水晶181gである。

SB－27では石鏃1、石匙1、稜磨石1、磨石1、打斧1、礫器2、玉石3、黒曜石32g、水晶17gで出土遺物は少ない。他に土偶の胴部が出土している。

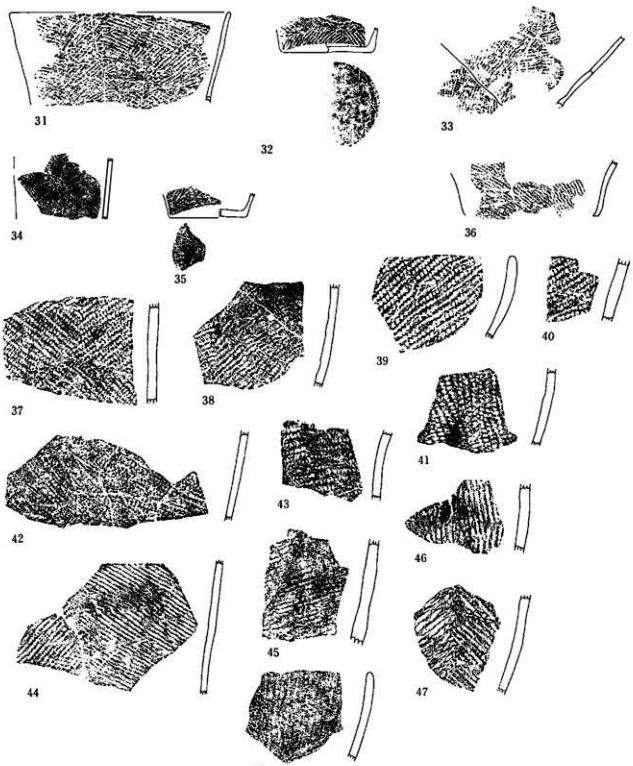
SB－09

図版	挿図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	118	1	pit1	2－2－c	無文地に押引文　内面ミガキ良好			
		2		2－2－b	助骨文			
		3		2－2－b	助骨文			
		4		2－2－e	RLを区画した磨消縄文			
		5		2－2－a	交点に円形竹管文			
		6		2－2－a	交点に円形竹管文　円形竹管は最後に刺突			
		7		2－2－a	無文地に平行沈線と円形竹管文、LRの縄文と綾繰文			
		8		2－2－e	RLとコンパス文の残映の残る沈線			
		9		2－2－e	縄文地にコンパス文			
		10	pit15	2－2－c	無文地に竹管文とその下に縄文			
		11	pit23	2－2－c	無文地に竹管文とその下に縄文			
		12		2－2－c	平行沈線とロ縁部押引文			
		13		2－1	無節の斜縄文RR			
		14		2－1	無節のRとLの羽状縄文に見えるが、これもRRとLLではなかろうか。			
		15		2－1	斜縄文LR			
		16		2－1	無節のLLとRRの羽状縄文			
		17		2－1	単節の羽状縄文　RLとLR			
		18		2－1	無節のLLとRRの羽状縄文			
		19		2－1	無節の斜縄文　LL			
		20		2－1	RLの斜縄文			
		21		2－1	無節LとRの羽状縄文			
		22	pit11	2－1	LR			
		23		2－1	LRとRLの羽状縄文			
		24～25		2－1	LRとRLの羽状縄文			
		26		2－5	関東系土器　おそらく縄軸にRを2本右巻と左巻にしたもの			
		27		2－5	関東系土器　おそらく縄軸にRを2本左巻にしたもの			
		28～30		2－1	底部			
51	119	31		2－1	LRとRLを併用			
		32	№35	2－1	LRとRLを併用　胴部の底部の製作法がよくわかる。			
		33		2－1	LLの斜縄文			
		34	pit5	2－1	RL			
		35	№17	2－1	底部　RとL			
		36	№37	2－1	胴部　R か			
		37	№38	2－1	LRとRLの羽状縄文			
		38	№9	2－1	LR			
		39		2－1	LR　黒浜式と同じような粕土			
		40		2－1	LR			
		41	№6	2－1	LR			
		42	pit2	2－1	RL			

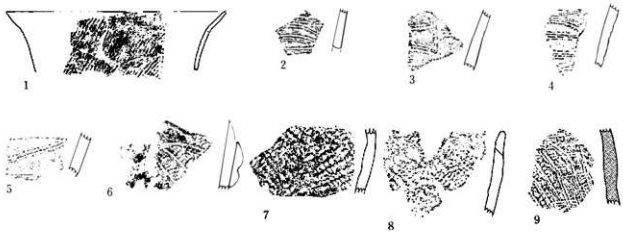


第118図　釈迦堂S－I区　SB－09出土土器（1）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	119	43	No.25	2－1	RL			
		44	No.32	2－1	羽状縄文LRとRL			
		45	No.20	2－1	LLの無節			
		46		2－1	無節縄文が施文してあるが判読不能			
		47		2－1	無節羽状縄文だが、一方はLLの反の撚りとR			
		48	No.37	2－1	不明LRか			



第119図　釈迦堂S－1区　SB－09出土土器（2）（31～36は1：6）



第120図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－27出土土器（1は1：6）

SB－27

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
55	120	1	No.4	2－1	RRの反の撚り			
		2	pit10	2－2－b	助骨文			
		3	pit10	2－2－b	助骨文			
		4	pit10	2－2－b	助骨文			
		5	pit10	2－2－b	助骨文			
		6		2－1	口縁部から垂下する刻目隆帯が付き、縄文地に沈線文			
		7		2－1	RLの単節斜縄文			
		8	pit5	2－1	RL			
		9		2－5	関東系土器　黒浜式　無節のLにRを2本右巻きと左巻きにしたものか、あるいは正反の合か			

S－Ⅰ区　SB－12

長軸750cm、短軸640cmの楕円形プランをなす。またこれに内接する住居が存在したと思われ長軸はほぼ90°異なっている。

柱穴は6～7本と思われるが、内接する住居址の柱穴と重複すると思われる。また壁柱穴が廻る。炉は焼土がなく不明である。

この住居址に付属すると思われる大きな頂蔵穴SK－83、89がある。これらの土坑の中には黒色土が充満しており、有機質が多量に入っていたと思われる。また出土遺物も、SB－12の覆土中のものと接合するので、この土坑も住居址と同一時期のものと思われる。こうした大きな頂蔵穴はSB－41・42にも見られる。

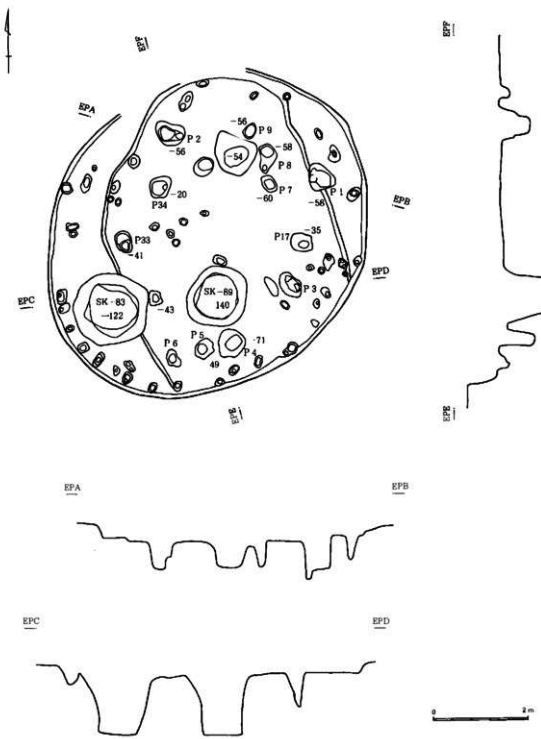
さて前期の住居址にはほとんど白色の砂礫層がレンズ状堆積の上部に見られた。このSB－12でも同様であり、その砂礫層の上部に黒色土があり、これに人頭大以上の石を用いて配石を行っている。こうした例はSB－45で明らかで、SB－06でも若干見られた。

出土遺物は豊富である。諸磯a式もあるが諸磯b式が主体を占める。中でも浮線文土器の好資料が多く、諸磯b式のやや古い部分に位置付けたいと思う。

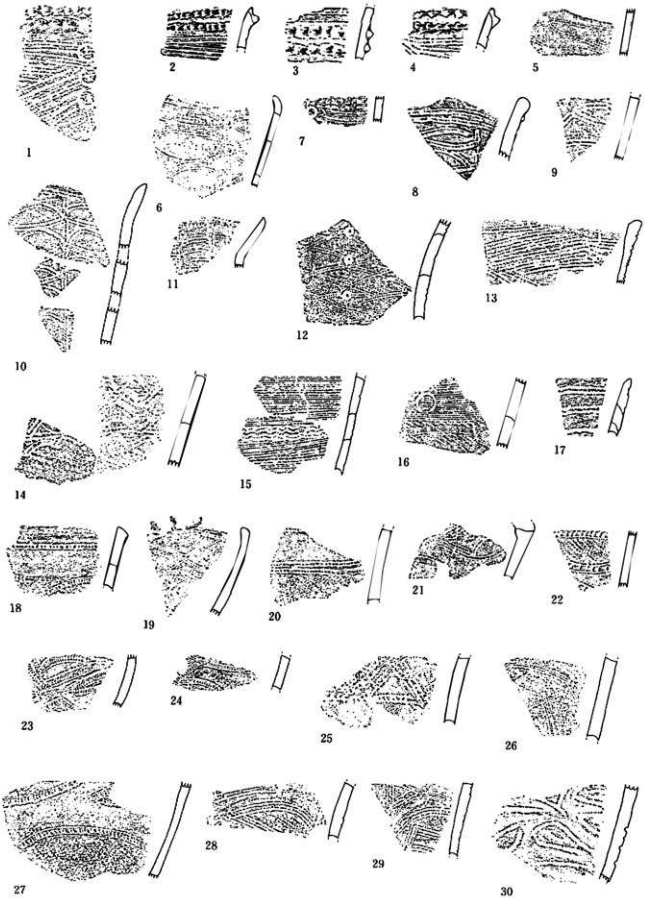
石器は石鏃20、ドリル1、コア1、ピエス・エスキーユ1、石匕9、磨石10、磨石17、玉石4、石皿2、磨斧3、打斧5、礫器7、黒曜石1.314g、水晶133gである。

SB－12

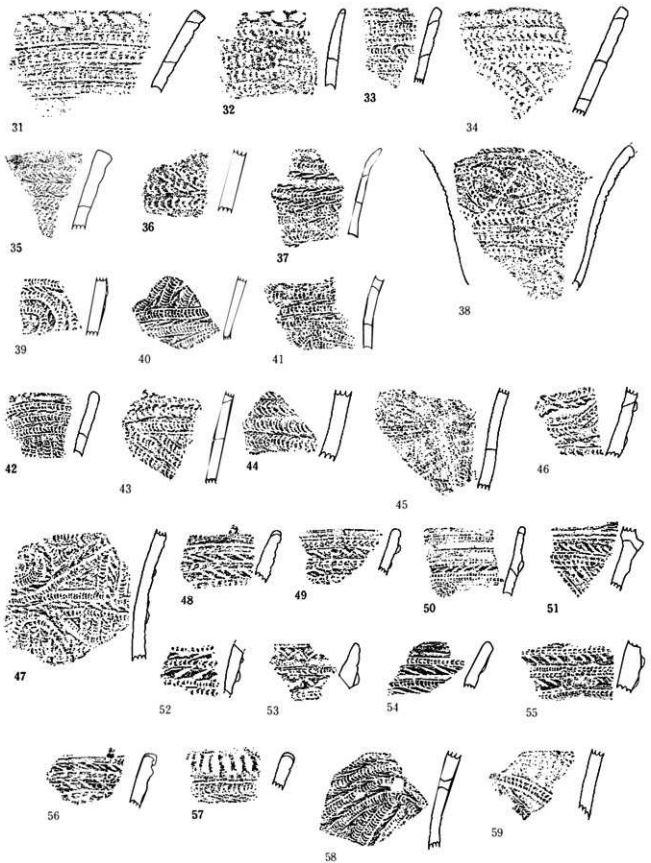
図版	挿図	挿図№	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	122	1	№153	2－2－a	二重口縁に押引文　胴部は菱形文か？交点に円形刺突文			
		2		2－2－a	二重口縁に押引文　胴部は菱形文か？交点に円形刺突文			
		3		2－2－a	無文地に隆帯上押引文			
		4		2－2－a	1、2と同じ			
		5		2－2－b	無文地に助骨文　交点に円窪文			
		6	№58	2－2－b	櫛歯状工具による助骨文と刺突文がある。			
		7		2－2－b	櫛歯状工具による助骨文と刺突文がある。			



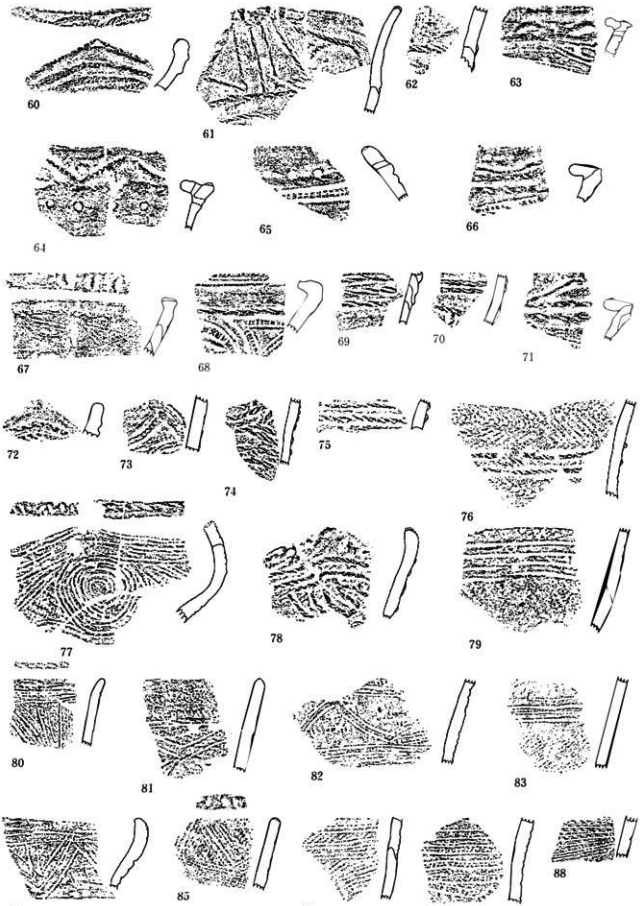
第121図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－12（1：80）



第122図　釈迦堂S－1区　SB－12出土土器（1）

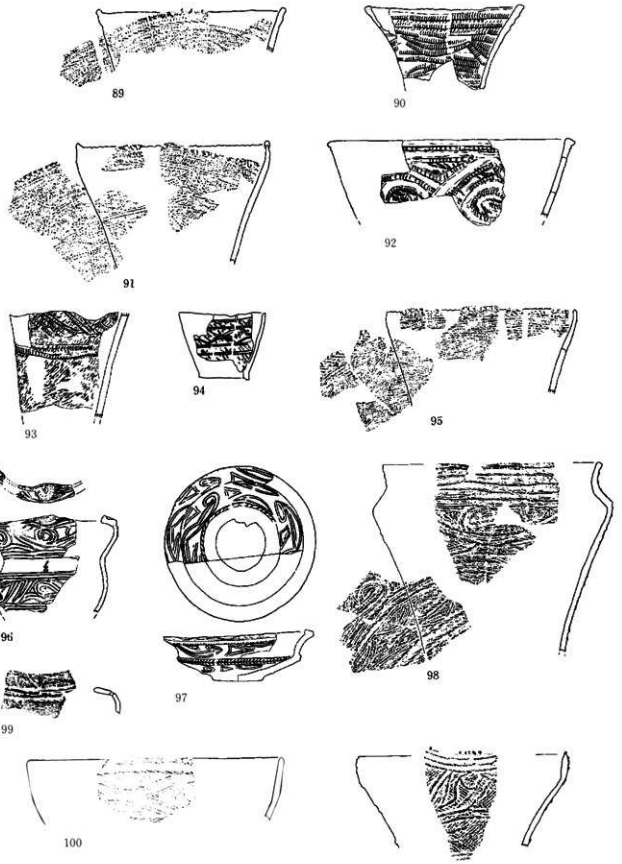


第123図　釈迦堂S－I区　SB－12出土土器（2）



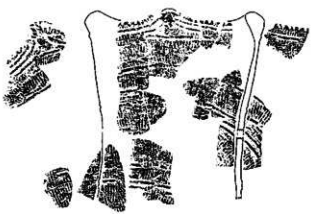
第124図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－12出土土器（3）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	122	8		2－2－b	助骨文			
		9		2－2－b	助骨文			
		10	pit27	2－2－b	助骨文　交点に円文なし			
		11		2－2－b	助骨文			
		12	pit14	2－2－b	無文地に格子目文　円形刺突文			
		13	№144	2－2－a	無文地に菱形文			
		14		2－2－e	縄文地に波状沈線			
		15		2－3－c	縄文地に集合沈線			
		16		2－3－c	縄文地に櫛描沈線			
		17	pit	2－2－e	無文地に波状の平行沈線　コンパス文の退化か			
		18	№56	2－2－d	磨消縄文をもつもの			
		19		2－2－d	磨消縄文をもつもの　内側ミガキがよい。			
		20		2－2－c	磨消縄文をもつもの			
		21		2－2－d	磨消縄文をもつもの			
		22		2－2－d	磨消縄文をもつもの			
		23		2－3－a	爪形文の巾がやや広い。			
		24		2－2－d	爪形文の巾がやや広い。			
		25		2－3－a	爪形文の巾が広くなっている。			
		26	№90	2－2－d	平行沈線で区画　縄文はＲＬ			
		27	№60	2－2－d	木の葉状入組文　縄文はＲＬ			
		28		2－2－d	木の葉状入組文			
		29		2－2－d	木の葉状入組文			
		30	№27	2－3－e	木の葉状入組文の退化したものであろうか？　ＲＬ			
52	123	31		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文　口縁部に押圧			
		32	№20	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		33		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文　隆帯刻みあり。			
		34		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		35		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		36		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		37	pit7	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		38	№44、45	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		39		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		40		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		41		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		42	№104	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		43	№46	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		44	№81	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		45		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		46		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		47	№161	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		48		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文　隆帯上刻目			
		49		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		50		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		51	№111	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		52	pit	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		53	pit8	2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		54		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		55		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		56		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		57		2－3－a	平行沈線間に巾広爪形文			
		58	pit1	2－3－a	口縁部に刻目　に巾広爪形文			
		59	pit	2－3－a	木の葉状入組文か？			
	124	60		2－3－b	浮線文			
		61		2－3－b	〃			
		62		2－3－b	〃			

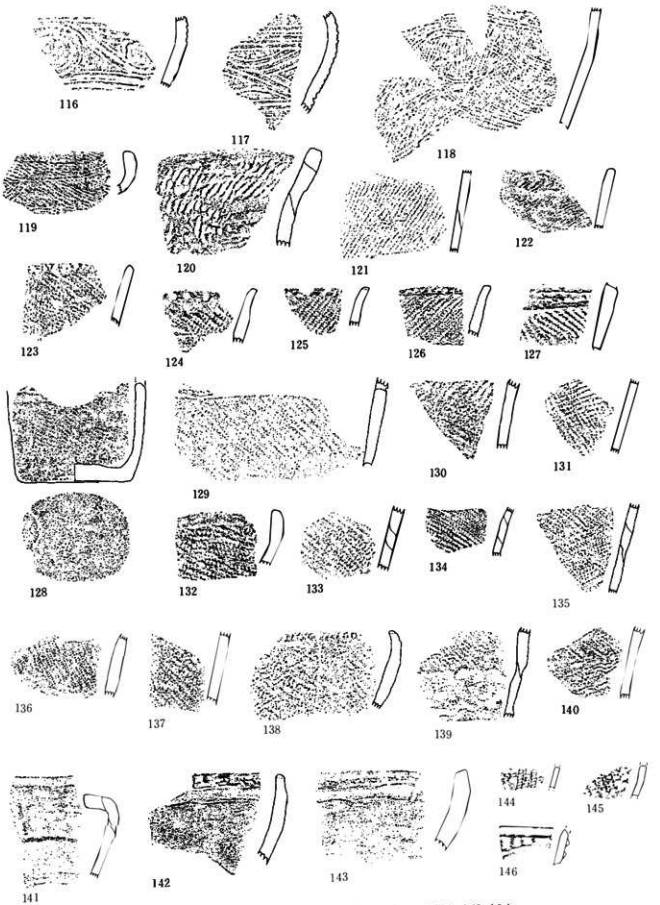


第125図　釈迦堂S－I区　SB－12出土土器（4）（89～101は1：6）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	124	63		2－3－b	口辺部に浮線 胴部に沈線文の浅鉢			
		64	No64	2－3－b	浅鉢形土器			
		65		2－3－b	有孔土器			
		66		2－3－b	浅鉢形土器			
		67	No101	2－3－b	口縁部に浮線文 胴部に沈線文			
		68		2－3－b	口縁部に浮線文 胴部は玉抱き三叉文か			
		69		2－3－b	浮線文			
		70		2－3－b	浮線文			
		71		2－3－b	浮線文			
		72		2－3－b	浮線文			
		73		2－3－b	浮線文			



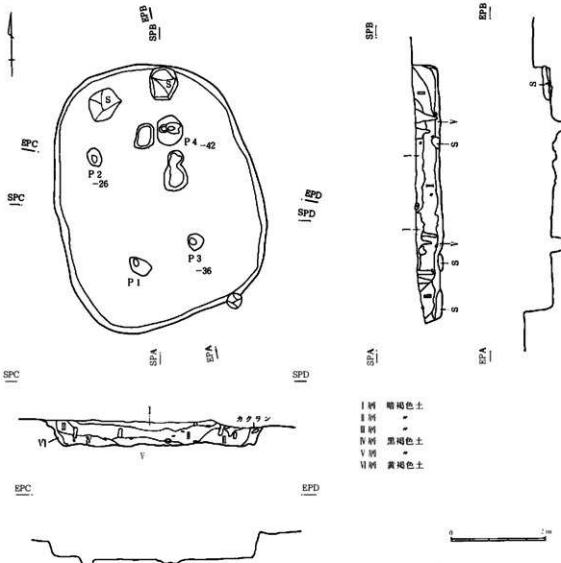
第126図 釈迦堂S－Ⅰ区 SB－12出土土器（5）（102～107は1：6）



第127図　釈迦堂S－I区　SB－12出土土器（6）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	124	74		2－3－b	浮線文			
		75		2－3－b	浮線文			
		76	No.83、No.129	2－3－b	RLとLRの結束羽状縄文を地文			
		77		2－3－c	縄文地に玉抱き三叉様沈線文　胎土の中に木の葉あり			
		78		2－3－b	浮線文			
		79	No.117	2－3－c	縄文地に沈線文			
		80		2－3－c	縄文地に沈線文			
		81		2－3－c	縄文地に沈線文			
		82	No.12	2－3－c	縄文地に沈線文			
		83	No.107	2－3－c	縄文地に沈線文			
		84	No.1	2－3－c	縄文地に沈線文			
		85	No.149	2－3－c	縄文地に沈線文			
		86	No.160	2－3－c	縄文地に沈線文			
		87	No.133	2－3－c	縄文地に沈線文			
		88		2－3－c	縄文地に沈線文			
52	125	89		2－3－a	巾広爪形文土器			
		90		2－3－a	巾広爪形文土器			
		91		2－3－a	無節の縄文Lに爪形文　円形竹管文は半截竹管2つの組み合せ			SK－83 No.142－27No.12、112、130、137SK－83の28
		92	No.1、No.51、No.96	2－3－a	連続爪形文で木の葉状入組み文を描き、LRの縄を全面に施文し間隔を磨消している			
		93	No.100、102、112、124	2－3－c	反の撚りLLを地文として平行沈線と爪形文			
		94	No.77	2－3－e	縄文RLを施文し、磨消部に赤彩している。内面にも帯状赤彩あり			
		95	No.3	2－3－c	Lの無文地に平行沈線文			
		96		2－3－c	口辺部に平行沈線文で玉抱き三叉文　全体に無節の縄文を地文としている。			
		97		2－3－c	浅鉢、胴部に木の葉状入組文で磨消縄文はない。			
53		98		2－3－b	LRの縄文地に刻目浮線文と沈線文			
		99	No.128	2－3－b	白色をした有孔土器			
		100	No.2	2－3－b	浮線文と玉抱き三叉文を有し、三角形の中にRLの縄文			
		101	No.9	2－3－b	羽状縄文　異段の結節縄文　RLとLに浮線文			
	126	102	No.43、47	2－3－b	無節のLを縦に施文し、浮線文を付ける。中期的な縄文の付け方　SB－07に類例あり			
		103	No.23、26、29	2－3－b	単節のLRを施文　浅鉢形土器			
		104	10＋98＋134	2－3－b	浅鉢形土器			
		105	No.46、7、8	2－3－d	縄文RL			
		106	No.95	2－3－d	Lの縄を使用			
54		107		2－3－d	縄文RL　粗い繊維の縄			
		108		2	底部			
		109		2	底部			
		110		2	底部			
		111		2	底部			
		112		2	底部			
		113	No.11	2	底部			
		114		2	底部			
	127	115		2	底部			
		116	No.97	2－3－c	地文にRLを施文し、半截竹管文			
		117		2－3－c	地文にRLを施文し、半截竹管文			
		118		2－3－c	Lの地文に沈線文			
		119		2－3－c	地文Rを地文に沈線文			
		120	No.11	2－1	LLの反の撚り			
		121	No.61	2－2or3	LでLの綾線文が見られる。ミガキは中程度			
		122		2－1	LLを施文　内面整形に凹凸が見られるのでやや古拙か？			
		123		2－2	口唇部に爪形文　RLの縄文			
		124		2－1	口唇竹管文　内面はケズリRL			
		125		2　1				

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	127	126		2－1	口縁部に縄文　LRの縄文　内面ミガキは中程度			
		127		2－3－c	縄文地RLに浮線文			
		128		2－2or3	底部は楕円形をなしている。LR			
		129	№8	2－3－c	RL			
		130		2－1				
		131		2－1				
		132		2－2or3	RL			
		133		2－2or3	LR			
		134		2－2or3				
		135		2－1	LR			
		136		2－2or3				
		137		2－2or3				
		138		2－2or3	口縁に刻目、RL、縄の末端をLの縄で結んでいる。ミガキ良好			
		139		2－2or3	接合部の粘土がはがれている。RL			
		140		2－2or3				
	127	141	№102	2－3－b	沈線か			
		142	№89	2－3－e				
		143	№80	2－3－e				
		144		2－6	近畿東海系土器　条痕か			
		145		2－6	近畿東海系土器　条痕か			
		146		2－6－e	近畿東海系土器　ハジロ状浮線文（凸帯文）			



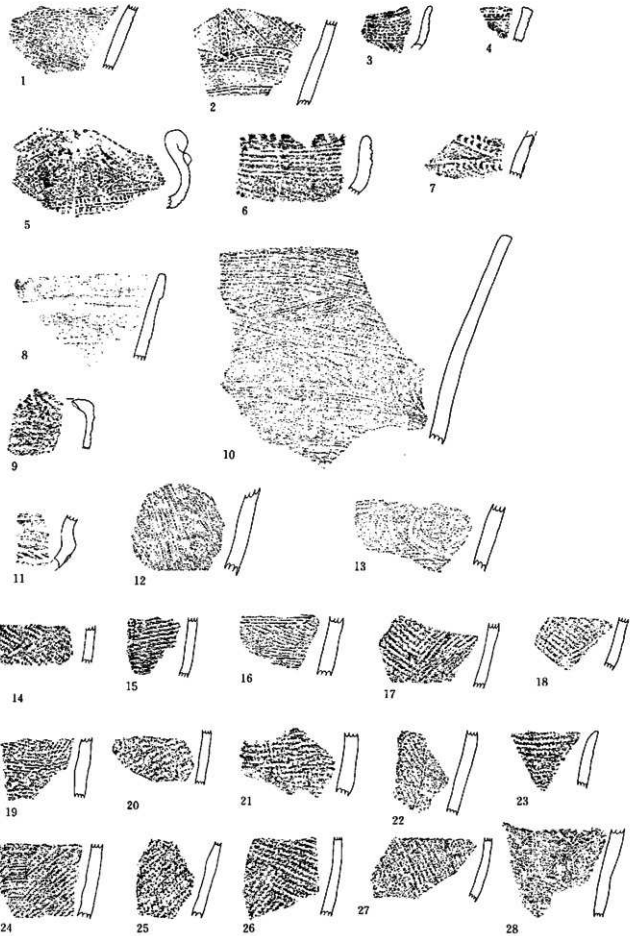
第128図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－20（1：80）

S－I区 SB－20

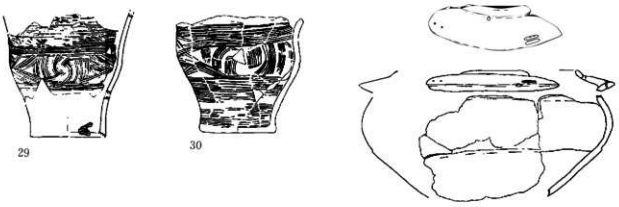
S－1区の中では離れた存在の住居址であり、時期的にも諸磯b式の新しい部分に属するもので、これも独立した時期である。長軸550㎝、短軸430㎝の楕円形プランで、隅丸方形との中間的なプランともいえる。炉址と思われる窪みがあるが、焼土の存在は明瞭ではなかった。

出土遺物は第130－29・30のような沈線文と張り出した底部は後出の諸磯c式および五領ヶ台式の萌芽的なものであろう。有孔鍔付土器もまた浅鉢形ではあるが、中期のそれに近いものと思われる。石器は石鏃7、磨石2、打斧1、礫器1、玉石1、黒曜石178g、水晶48gである。

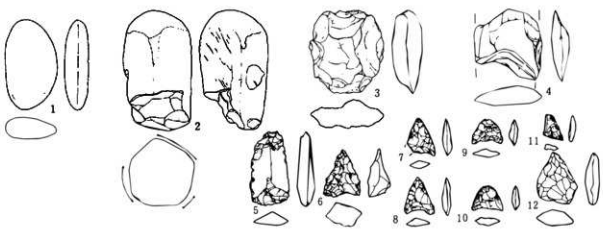
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
54	129	1	No.1	2－2－c	無文地に平行沈線間爪形文			
		2		2－2－c	無文地に平行沈線間爪形文			
		3		2－2－c	無文地に平行沈線間爪形文			
		4		2－2－c	無文地に平行沈線間爪形文			
		5	No.4	2－2－c	胴曲した口縁　平行線間爪形文で玉抱き三叉状文を描く			
		6		2－3－c	口縁に刻目、RLの地文に平行沈線文			
		7		2－3－a	巾広爪形文			
		8	No.42	2－3－e	折り返し口縁となり、無文地に平行沈線間爪形文			
		9		2－3－b	浮線文			
		10	No.39	2－3－c	地文RLに集合半截竹管文で玉抱き三叉状文をなす。			
		11		2－3－b	浮線文			
		12	No.45	2－3－c	10と同一か			
		13	No.20	2－3－c	10と同一か			
		14		2－2or3	RLの縄文			
		15		2－1	無節縄文か			
		16		2－3－c	無節の縄文を地文としている。			
		17		2－1？	RLとLの羽状縄文			
		18		2－1	RLとLRの変形文			
		19		2－1	反の捻り　LLとRR			
		20		2－1	反の捻り　LLである。			
		21		2－2or3	LR			
		22		3	RLの縄文の末端結節（五領ヶ台式）			
		23		2－2or3	RL			
		24		2－1	LLの斜縄文			
		25		2－1	LRの斜縄文			
		26		2－1	RLとLRの羽状縄文			
		27		2－1	Rの斜縄文			
		28	No.20	2－1				
	130	29	No.32	2－3－c	地文RLの上に半截竹管による集合沈線で玉抱き三叉状文を描く			
42		30	No.44	2－3－c	地文の縄文は不明で29とほぼ同様底部が諸磯c式に近い。			
55		31	No.2	2－3－e	有孔鍔付土器　中期のそれと類似			



129図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－20出土土器（1）



第130図　釈迦堂S－I区　SB－20出土土器（2）（29～31は1：6）



第131図　釈迦堂S－I区　SB－20出土石器（1～4は1：4　5～12は1：2）

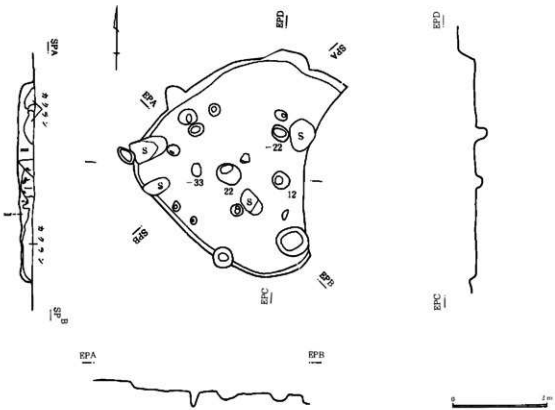
SB－20　出土石器

No.	名　称	出土地点	大　き　さ	重　さ	備　考	No.	名　称	出土地点	大　き　さ	重　さ	備　考
1	磨製石斧	No.5	9.4×5.5×2.5			7	石　錐		2.0×　×0.4		
2	磨　石	No.2	12.5×7.3×7.2			8	石　錐		1.9×1.7×0.4		
3	敲　石	No.3	8.7×8.0×4.2			9	石　錐		1.2×1.6×0.5		
4	打　斧	No.4	×7.2×2.9			10	石　錐		1.2×1.7×0.4		
5						11	石　錐		×0.3		
6	石　錐		2.4×2.0×1.2			12	石　錐		2.6×2.1×0.7		水晶

SーI区　SB－21

台形の隅丸方形プランを示し、SB－12によって切られている。ピットはいくつかあるが、柱穴とは位置的に確定し難い。炉址と思われる焼土の広がりはない。掘り込みは32cmで浅い。

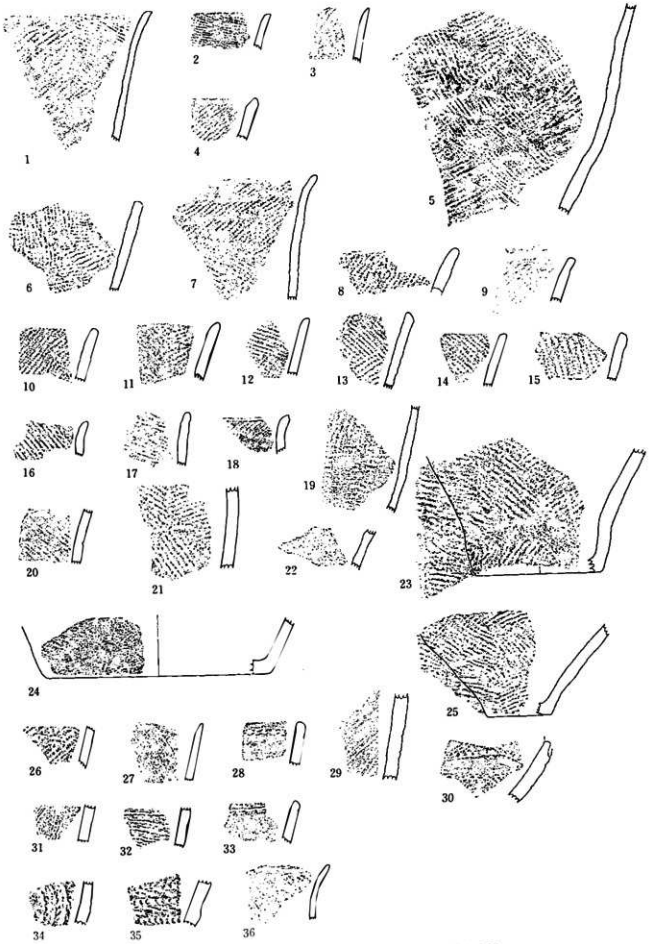
出土土器は釈迦堂Z3式を中心として、出土量は多くない。石器も少なく石錐3、打斧2、コア1で黒曜石108g、水晶44gである。



第132図　釈迦堂S－I区　SB－21（1：80）

SB－21

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
21	133	1	No.14	2－1	LRとRとRR			
		2		2－1	R			
		3		2－1	RRではないかと思われる。条の深さが一様ではない。			
		4		2－1	LL			
		5	No.14	2－1	LRとRとR {R, R} →R {ℓ, ℓ, ℓ, ℓ} と一部無節縄軸がみられる。全体として、菱形縄文			
		6	No.19	2－1	LLとRR			
		7	No.11	2－1	LRとRの羽状縄文　あるいはRR			
		8		2－1	LR			
		9		2－1	口唇部に刻目、LLの地文に沈線文			
		10		2－1	LR			
		11		2－1	LLとRR			
		12		2－1	LLとRL			
		13		2－1	LRとRL			
		14		2－1	LR			
		15		2－1	LR			
		16		2－1	RRであろう。			
		17		2－1	RRであろう。			
		18		2－1	LR			
		19		2－1	RRの縄を使用			
		20		2－1	RLか			
		21		2－1	LLとRRの羽状縄文			
		22		2－1	Lを2本絡条体にしたもの、おそらく縄軸であろう。黒浜式の模倣。			
		23	No.13	2－1	繊維の粗いRRとLLの羽状縄文			
		24		2－1	RLの斜状文			
		25	No.15	2－1	RRとLL羽状縄文			
		26		2－1	LR			



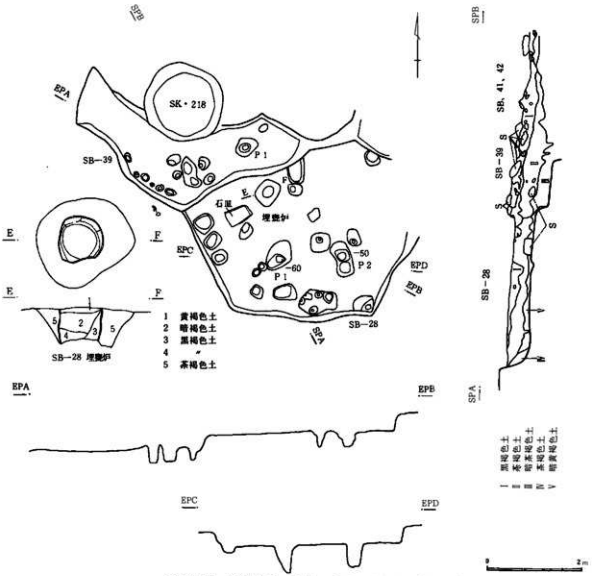
第133図　釈迦堂S－1区　SB－21出土土器

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	133	27		2－2－e	無文地に格子目状沈線文			
		28		2－2－c	無文地に押引文			
		29		2－2－e	無文地に平行沈線文			
		30		2－2－c	磨消縄文が半截竹管内側による押引文で区画される。			
		31		2－3－c				
		32		2－2－e	コンパス文が退化し、波状文になっている。			
		33		2－2－c	無文地に爪形文 表裏とも赤彩あり			
		34		2－3－b				
		35		2－3－a	超磯b式の山広爪形文			
		36		2－1	無文のミニチュア			

S－Ⅰ区　SB－28

SB－28はSB－42によって切られた住居址である。おそらく隅丸方形をしたプランと思われる。柱穴と思われるものはP1、P2である。壁柱穴も認められる。炉は埋甕炉で釈迦堂Z3式の深鉢の胴部を利用している。板状石皿もまた炉の脇に設置されていた。

出土遺物は多くない。全縄文のものの割合が多い。また関東系土器には17のように爪形文を多用したものも見られる。石器は石鏃2、ドリル2、ピエス・エスキーユ1、砥磨石5、磨石4、石皿3、打斧5、磨斧1、礫器2、軽石3、黒曜石171g、水晶105gである。



第134図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－28・39（1：80）

SB—28

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量d	備考
43	135	1	埋甕か	2—1	LRを全面に施文し、一部Lがみえる。			
		2	No.2	2—1	LRの斜縄文			
		3		2—1	LRの斜縄文 内側のミガキは良好諸磯式か？			
		4		2—1	LRとRLの羽状縄文			
		5		2—1	RL			
		6	No.3	2—1	RRの反の撚り			
		7		2—1	折返口辺にLを施文したもの			
		8	No.16	2—1	RRとLLの羽状縄文			
		9		2—1	無文の口辺に連続爪形文			
		10	No.2	2—1	RLとLR			
		11		2—1	縄文地に沈線文			
		12		2—1	RLとLR			
		13	No.7	2—1	RRか			
		14	No.14	2—1	LLとRR			
		15		2—1	RL			
		16		2—5	関東系土器 黒浜式 LRの0段4条？とRLの羽状縄文			S13
62		17		2—5	関東系土器 黒浜式 無文地に平行線間爪形文			
		18		2—5	関東系土器 黒浜式 おそらく縄軸にRとLを並べて巻いたもの。			

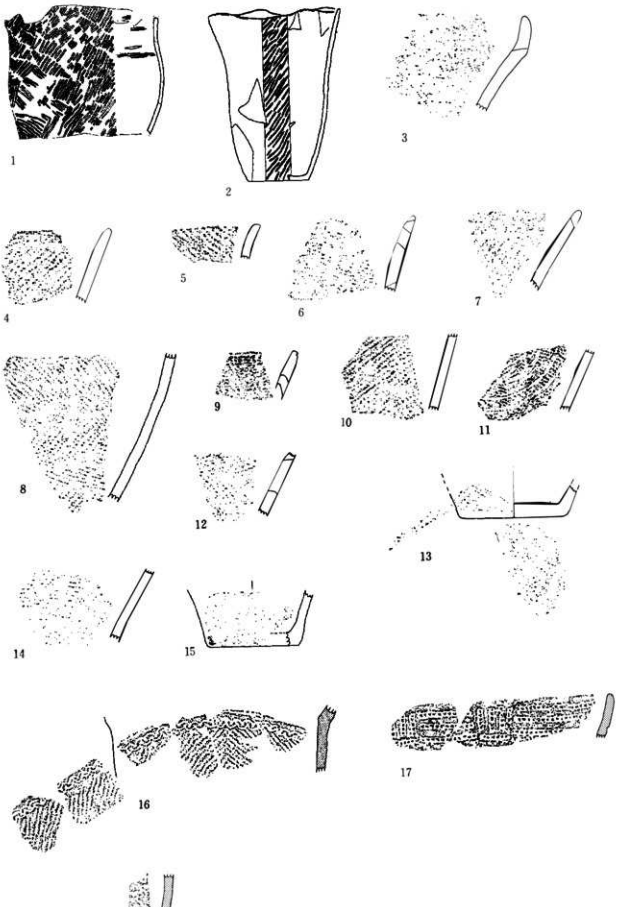
S—I区 SB—39

SB—28と重複関係を持つが、セクションの検討からは、前後関係が判明できなかった。また住居址との一部を残すのみで、大半はSB—41、42と重複し、前後関係は不明である。柱穴と考えられるのはP1である他は壁柱穴が6個検出されている。

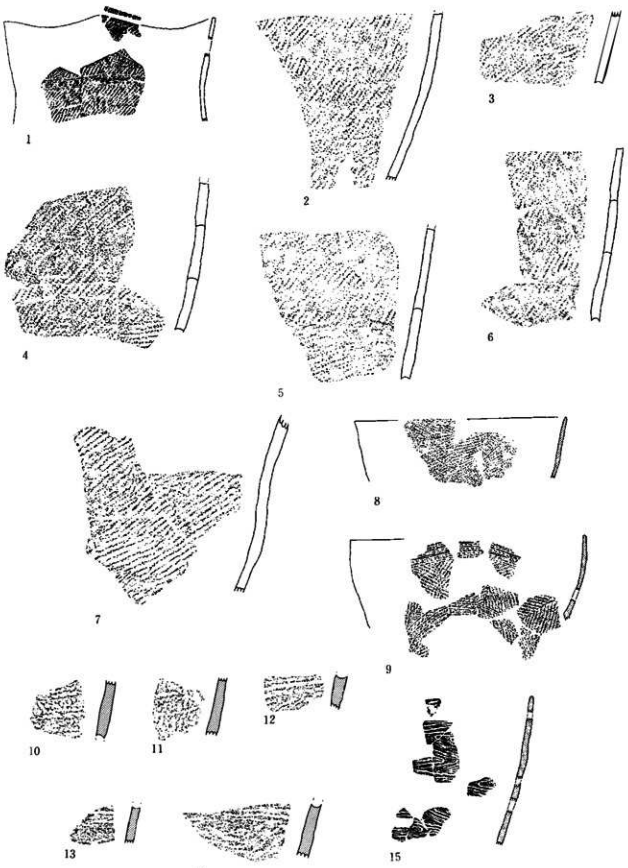
出土土器のうち1は磨消縄文に円形竹管文、肋助文および内面のミガキはあるが、砂粒等が移動した凹部を残すことから、諸磯a式に属するものとしてよいと思われる。諸磯a式の標式遺跡であるバンシン台貝塚のものに近い土器と考える。他の土器は縄文のみしか残っていないので、確定はできないが、内面に指頭圧痕を残すことから、釈迦堂Z3式に比定される。石器は石錐2]、ドリル5、ピエス＝エスキーユ2、石匕1、磨磨石3、磨石11、石皿1、打斧1、礫器1で黒曜石400g、水晶400gである。

SB—39

図版	挿図	掲載No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量d	備考
56	136	1	No.4	2—2—e	口縁部押引文 口辺部は縄文（LR）に半裁竹管文 類部に磨消縄文帯を持ち、そこに円形竹管文、ミガキはあるが粗い。諸磯a式			
		2	No.16	2—1	LR			
		3	No.2	2—1	LR			
		4	No.16	2—1	LR			
		5	No.16	2—1	LR			
		6	No.12	2—1	LR			
		7	No.3	2—1	おそらくLRと思われるが、縄文の節を消しているようである。			
62		8		2—5	関東系土器 縄軸にLを右巻きと左巻きに重ねて巻いている。			
		9		2—5	関東系土器 口縁部に押引文と類部に押引文、地文にRLとLRの羽状縄文。			
		10		2—5	関東系土器 縄軸にRとLを並べて巻いたもの。			
		11		2—5	関東系土器 縄軸にRとLを並べて巻いたもの。			
		12		2—5	関東系土器			
		13		2—5	関東系土器			
		14		2—5	関東系土器			
		15	SB—41 No.2	2—5	単軸絡状体 Lを右巻きと左巻きにしたもの。横位の木目状撚糸文			O—15, J—15



第135図　釈迦堂S－1区　SB－28出土土器（1、2、16、17は1：6）

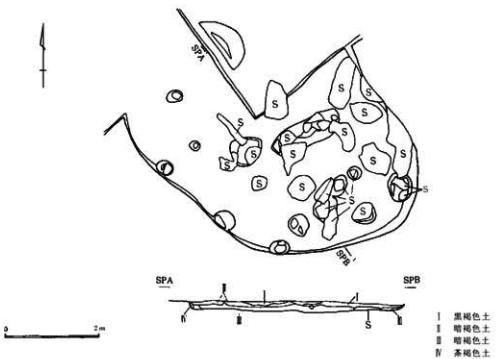


第136図　釈迦堂S－I区　SB－39出土土器（1、8、9、15は1：6）

S－Ⅰ区　SB－37

S－1区1号墳の周溝調査中に発掘された住居址であり、一部掘り過ぎの部分もある。壁にそって、柱穴の配列がみられる。地山の花崗岩の巨石が露出して、床面の確認も困難であった。炉址と思われる焼土の確認はできなかった。

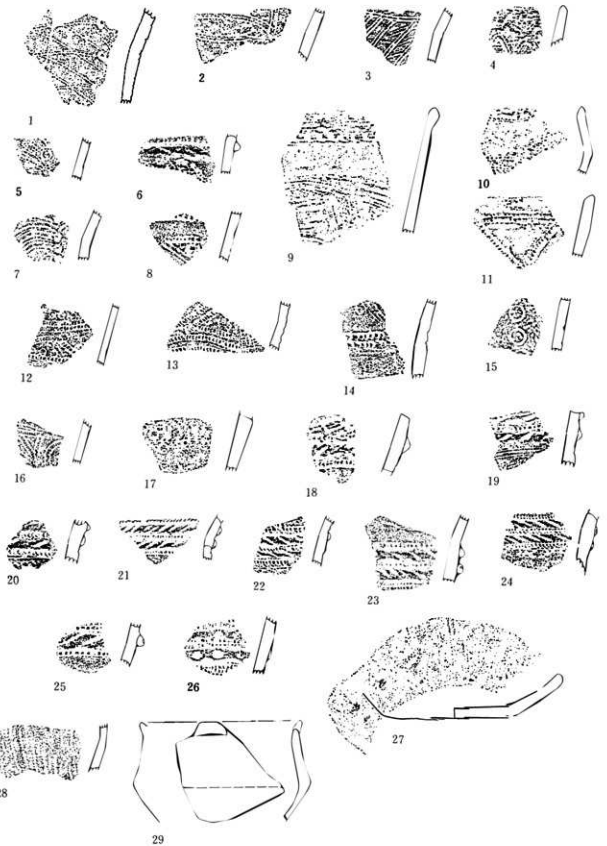
出土遺物は巾広爪形文を施した諸磯b式土器が多く、住居址の時間的位置付けをしたいと思う。石器は石鏃2、石皿1、磨斧1、黒曜石148g、水晶21gである。



第137図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－37（1：80）

SB－37

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
56	138	1		2－2－b	格子目文　円形竹管文			
		2		2－2－b	助骨文			
		3		2－2－e	格子目文？			
		4		2－2－e	波状文			
		5		2－2－b	助骨文　円形刺突文			
		6		2－3－a？	刻目隆帯をもった爪形文			
		7		2－2－b	助骨文			
		8		2－2－b	木の葉状入組文			
		9		2－3－a	木の葉状入組文　磨消縄文（LR）			
		10		2－2－d	木の葉状入組文　（LR）			
		11		2－2－d	木の葉状入組文			
		12		2－2－d	木の葉状入組文　磨消縄文ではなく、円形竹管文を充填している。			
		13		2－2－d	木の葉状入組文			
		14		2－3－a	爪形文			
		15		2－3－e	縄文地に円形竹管文			
		16		2－2－d	木の葉状入組文			
		17		2－3	円形竹管文			



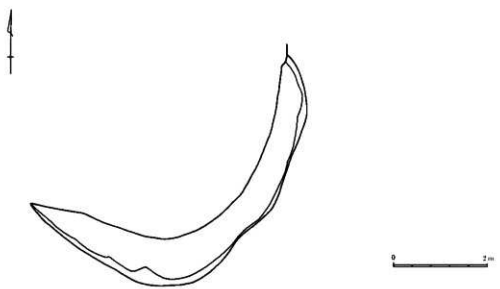
第138図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－37出土土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	138	18		2－3－a	爪形文と隆帯上刻目			
		19～26		2－3－a	爪形文と隆帯上刻目			
		27	№5	2－3	LR			
		28		2－3	LR			
		29	№2	2－3	無文の鉢形土器			

S－I区　SB－38

SB－07によって切られた住居址で、南北600㎝、東西600㎝（推定）の隅丸方形プランの住居址である。一部しか残っておらず、炉址や柱穴も失なわれている。

出土遺物は釈迦堂Z3式の小片がわずかに出土しているにすぎず、石器もピエス＝エスキーユ1、磨石1、黒曜石8g、水晶6gである。



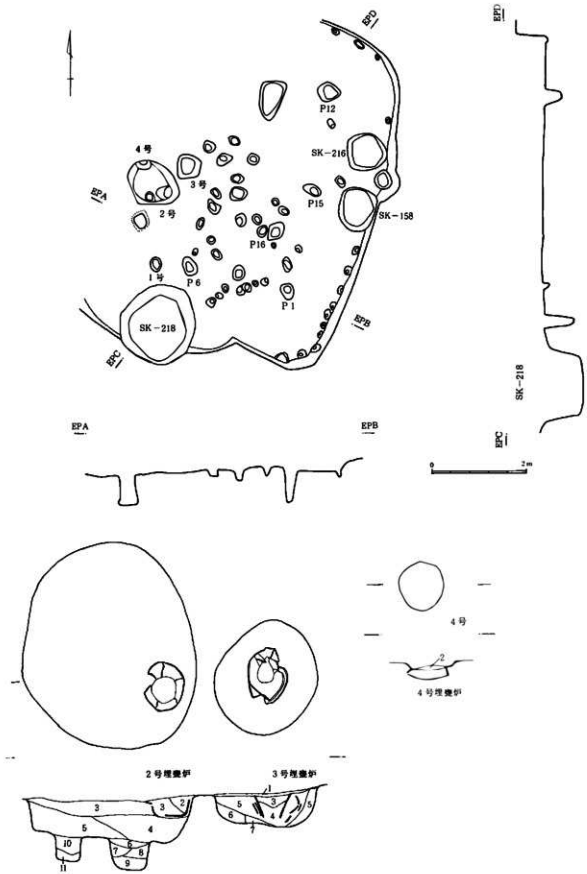
第139図　釈迦堂S－I区　SB－38（1：80）

SB－41、42

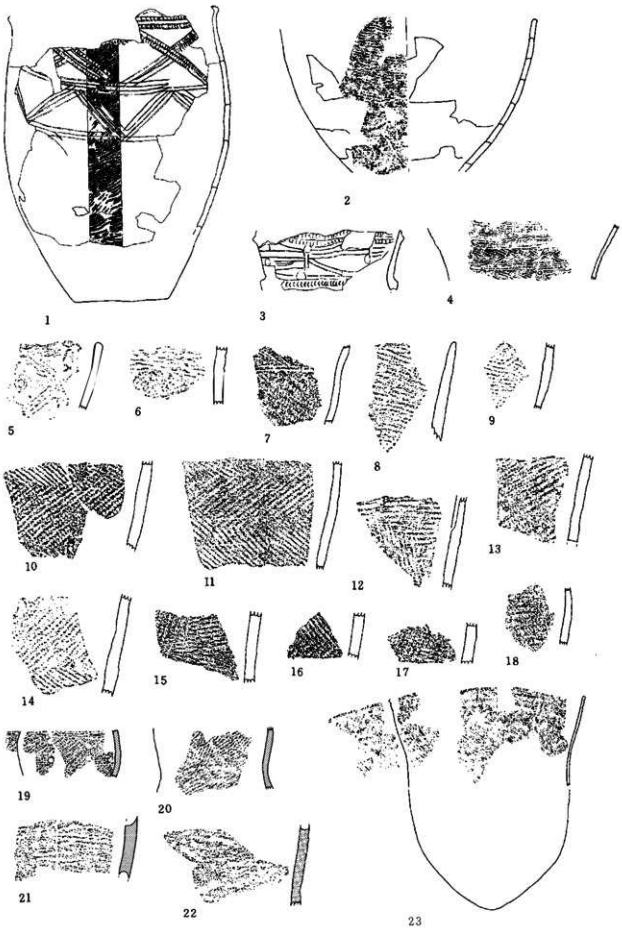
畑の境である高さ150㎝ほどの石垣に北側約半分が削り取られている。南側のSB－41の南辺が残っている。北側のSB－42は南西の壁が認められる。この壁に接しているSK－218もまたSB－12内のSK－83、89同様住居内の頂蔵穴と思われ、黒色土が充満していた。

さてSB－41は壁柱穴を持つ住居でP1、P15、P12、P6が主柱穴と思われる。おそらく6個であったと思われるが、P12に対応するものが検出されていない。また南壁近くには炭火材がいくつか発見されているので、おそらく火災住居かと思われる。炉址と思われる焼土の堆積はなかった。

SB－42は南西の一部とピット列から、おおよそのプランが想定される。埋甕炉が1号から4号まで発見されている。このうち1号埋甕と2号埋甕の一部は、図示できないが、3号埋甕炉と4号埋甕は良好な資料を提示できる。2号埋甕は釈迦堂Z3式の東海系土器が埋設されていたものである。なお東海系土器はこの炉址の上部覆土中の破片と接合する。またSB－06の埋甕炉は口辺部を欠損するものであるが、この2号埋甕炉とほぼ同時期のものであろう。3号埋甕炉もまたいくつかの土器片からなりたっている。図141－1はLRの縄文地に半截竹管による沈線で連続三角文を描き、中には平行沈線間に爪形文を施している部分もある。2はおそらく反の縄を施文したものと思われる。3は二重口縁の土器で、本遺跡では、諸磯a式土器として扱って来た。この住居址の



第140図　釈迦堂S－I区　SB－41、42（1：80）炉は（1：20）



第141図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－41・42出土土器（1、2、3、23は1：6）

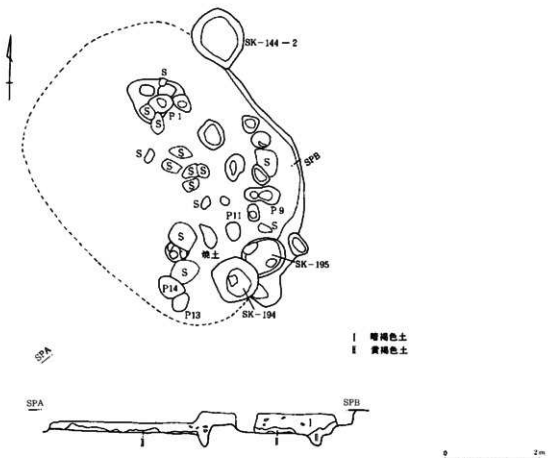
出土状況を見ると、諸磯ａ式の古い部分もあると考えておきたいと思う。

石器はＳＢ－41で石鏃１、稜磨石３、磨石２、打斧１、石皿１、黒曜石124ｇ、水晶90ｇである。ＳＢ－42は石鏃２、稜磨石１、磨石10、磨斧２、磨器３、玉石１、黒曜石111ｇ、水晶85ｇである。

なおこの住居址、Ｐ16は深さ10cmほどの小さなピットであったが、そこから、黒曜石のフレイク８点、硅質砂岩のフレイク５点が出土している。このうち１点はドリルである。こをらは、石鏃やドリルといった小型石器材料を保管しておいたピットと思われる。

ＳＢ－42

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
43	141	1	2号埋甕炉	2－1	ＬＲの縄文地に平行沈線で三角形を描く、中には連続爪形文を施すものもある。内面のミガキは良好だが多少凹凸をのこす。			
		2	3号埋甕炉	2－1	無文で器面調査痕が残る。			
		3	4号埋甕炉	2－2－a	二重口縁に押引文　平行沈線で菱形文と丸棒状円形刺突文			
		4	№19	2－2－e	平行沈線による波状文、縦沙文　円形竹管文　ミガキ良好			
		5		2－6	異系統の土器　口縁から指頭圧痕のある縦の隆帯、半截竹管による菱形文と円形竹管文　おそらく近畿東海系であろう。			
		6		2－1	縄文地に沈線文　ＲＬ			
		7		2－1	縄文地に沈線文　ＲＬ			
		8	№14	2－1	ＲＬ			
		9	2号埋甕炉	2－1	ＲＲか			
		10	№24	2－1	ＲＲとＬＲの羽状縄文			
		11	№26	2－1	ＲＬとＬＲ			
		12		2－1	ＲＬとＬＲか			
		13		2－1	ＬＲ			
		14	№24	2－1	10と同一か			



第142図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－43（１：80）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	141	15		2－1	RRとしLか			
		16		2－1	RRとしLか			
		17		2－1				
		18		2－1				
		19		2－5	関東系土器			
		20		2－5	関東系土器			
		21		2－5	関東系土器			
		22		2－5	関東系土器			
43		23	2号埋甕P1	2－6	近畿東海系土器　口縁部に刻みを施し,口辺部に列点を廻し,その下部に条線を施す。内面に条線が若干ある。			

S－Ⅰ区　SB－43

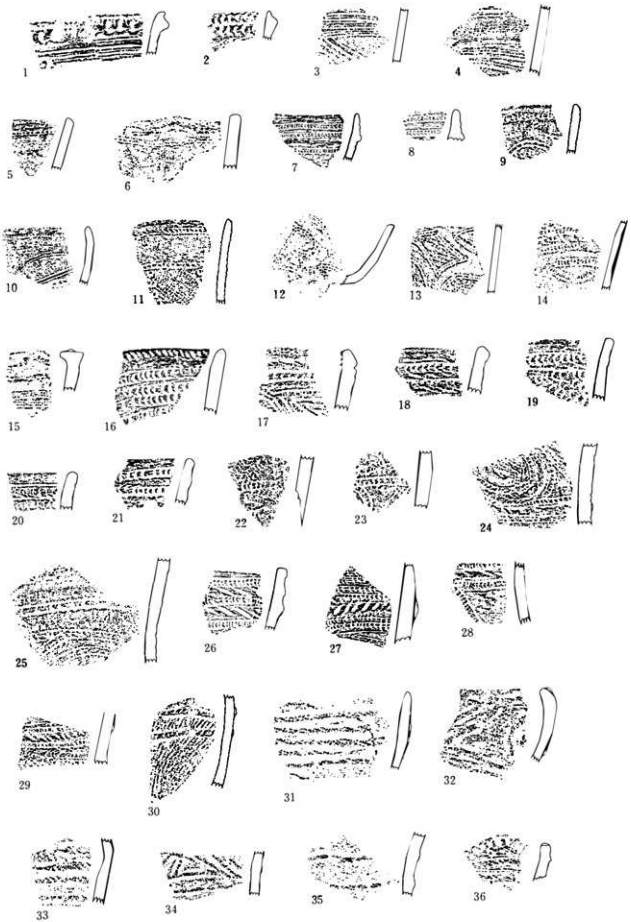
SX－01の下部から発見された住居址で北東の壁のみが残っている。壁高20cmを測る。柱穴と思われるピットはP1、P8～10およびP13ないし14であると思われる。炉址と思われる柱穴は南側の隅に位置している。床面に地山の花崗岩が露頭している。

また西側はSB－44と重複しており、床面の高さがほぼ同一なので、プランの範囲は不明である。

出土遺物は、諸磯b式土器のやや古い部分を中心とした小破片が出土している。石器は石鏃6、玉石2、磨斧1、打斧1、磨石1、礫器3、黒曜石323g、水晶109gである。

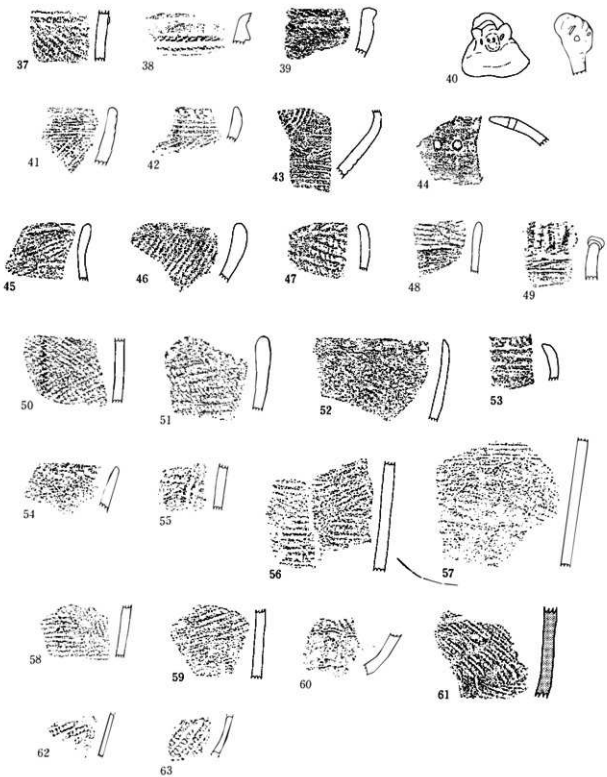
SB－43

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
57	143	1	SB－43	2－2－a	口縁部に隆帯上押引文と平行沈線文　ミガキ良好			
		2		2－2－a	二重口縁に押引文　ミガキは粗			
		3		2－2－a	集合沈線による助骨文　ミガキ良好			
		4		2－2－a	櫛歯状工具による助骨文　ミガキ良好			
		5		2－2－c	無文地に押引文			
		6		2－2－c	無文地に押引文			
		7		2－2－c	無文地に押引文　隆帯が付く			
		8		2－2－c	無文地に押引文　隆帯が付く			
		9		2－2－c	無文地に押引文			
		10		2－2－d	無文地に木葉状上絃文			
		11		2－2－c	口辺部は無文地に押引文　胴部は縄文（RL）に円形竹管文			
		12		2－2－d	楕形土器　押引文で区画した磨消縄文			
		13		2－2－d	竹管文で区画した磨消縄文　RL			
		14		2－3－a	やや巾広な爪形文で区画し、隆帯がみられる。			
		15		2－3	口縁部に粘土紐　浅鉢か?			
		16		2－3－a	巾広爪形文			
		17～23		2－3－a	巾広爪形文　特に沈線が深い。			
		24		2－3－a	巾広爪形文　刻目隆帯を持つ			
		25		2－3－a	巾広爪形文			
		26～29		2－3－a	巾広爪形文　刻目隆帯を持つ			
		30		2－3－b	縄文地Lに浮線文			
		31		2－3－b	浮線文にRLを施文			
		32		2－3－b	浮線文			
		33		2－3－b	浮線文			
		34		2－3－b	浮線文			
		35		2－3－b	縄文地RLに浮線文			
		36		2－3－b	縄文地RLに浮線文			
	144	37		2－3－b	縄文RL			
		38		2－3－b	浅鉢の頸部			
		39		2－3－b	浅鉢の口辺			



第143図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－43出土土器（1）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	144	40		2－3－b	獣面把手 イノシシ			
		41		2－3－c	沈線文系土器			
		42		2－3－c	沈線文系土器			
		43		2－3－c	沈線文系土器			
		44		2－3－c	有孔土器の口辺			
		45		2－1	LRの縄文 ミガキは粗、指頭圧痕			



第144図　駅逓堂S－I区　SB－43出土土器（2）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	144	46		2－3	口縁部刻目　RLの縄文　ミガキは粗、諸磯b式			
		47		2－1	縄文を施文しているが不明			
		48		2－1	RL			
		49		2－3	口縁部に粘土紐			
		50		2－1	RLとLRを同時施文			
		51		2－1	RLと施文し、口縁部に刻目			
		52		2－2or3	縄文は不明　ミガキは良好			
		53		2－2or3	口縁刻目			
		54		2－2or3	RL　口縁部刻目　ミガキは粗			
		55		2－2or3	RL　ミガキは良好			
		56		2－2or3	LR　内面に炭化物付着			
		57		2－2or3	RLと綾繰文			
		58		2－1	RLとLR			
		59		2－2or3	RL			
		60		2－2or3	RL（O段多条か）と綾繰文			
		61		2－5	関東系土器　RL			
		62		2－6	近畿東海系土器　LR			
		63		2－6	近畿東海系土器　LR			

S－1区　SB－45

M－23グリッド付近で、集石があったので、SB－06、12、41～42等の住居址の上層部にも同じような集石が認められたので、住居プランの確認作業を行い、図示したようなプランを検出したが、炉址や柱穴と思われるピットは確定できず、住居址とは断定できないが、調査中も整理途上もSB－45として取り扱ってきたので、住居址とは断定しないが、この呼称を用いる。

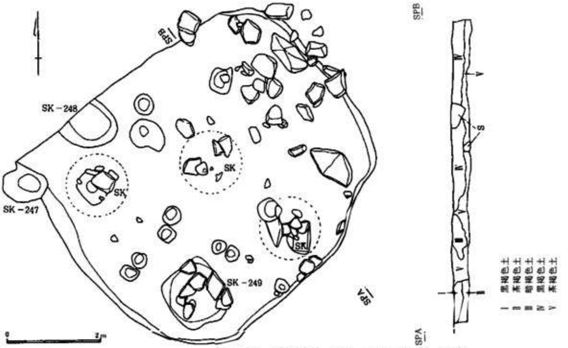
さて、黒色土の充満する覆土の中には、いくつかの中期の土坑があったと思われる。確認できたのは、SK－247、248、249であり、集石や遺物の存在から波線で示した部分にも土坑が存在したと思われる。こうした現象はSB－09、27等で認められている。特にSB－45中央部破線で示した部分からは、粘板製の大型石匙が3点出土している。このように石匙を埋設する土坑の類例は多い。

土器は中期のものもあるが、主体は前期の釈迦堂Z3式、諸磯a式、諸磯b式、北白川下層式土器等である。石器は石鏃4、ドリル1、石匙3、稜磨石6、磨石6、石皿1、磨斧1、打斧1、礫器1、フレイクは黒曜石225g、水晶94gである。

SB－45

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
57	145	1	SB－45	2－2－b	櫛描状工具　助骨文　ミガキは良好　金雲母多し。			
		2		2－2－b	櫛描状工具　助骨文			
		3		2－2－b	櫛描状工具　助骨文			
		4		2－2－c	押引文による懸垂縄文			
		5		2－2－c	無文地に押引文			
		6		2－2－e	無文地に平行沈線			
		7		2－2－e	無文地に平行沈線			
		8		2－2－b	助骨文			
		9		2－2－e	平行沈線文			
		10		2－2－e	コンパス文			
		11		2－2－a	二重口縁に平行沈線文			
		12		2－2	縄文地に円形管文			
		13		2－2	LRの縄文地に円形管文			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	146	14		2－2－d	木の葉状入組文　中にＬＲの縄文			
		15		2－2－c	無文帯と縄文帯（ＬＲ）の境に爪形文			
		16		2－3－a	巾広爪形文			
		17		2－3－a	巾広爪形文			
		18		2－3－a	巾広爪形文			
		19		2－3－a				
		20		2－2or3	ＬＲと綾絡文　ミガキ良好			
		21		2－2or3	ＬＲ　ミガキ良好			
		22		2－1	ＬＲとＲＬの羽状縄文　ケズリ指頭圧痕			
		23		2－1	ＬＲとＲＬの羽状縄文			
		24		2－2or3	ＬＲ　ミガキあり			
		25		2－1	ＲＬの縄文地に押引文			
		26		2－1	ＬＬ　ミガキあり凸凹あり			
		27		2－2	ＬＲと綾絡文			
		28		2－6	近畿東海系土器			
		29		2－6	近畿東海系土器			
		30		2－6	近畿東海系土器　ＬＲとＲＬの羽状縄文			
		31		2－6	近畿東海系土器			

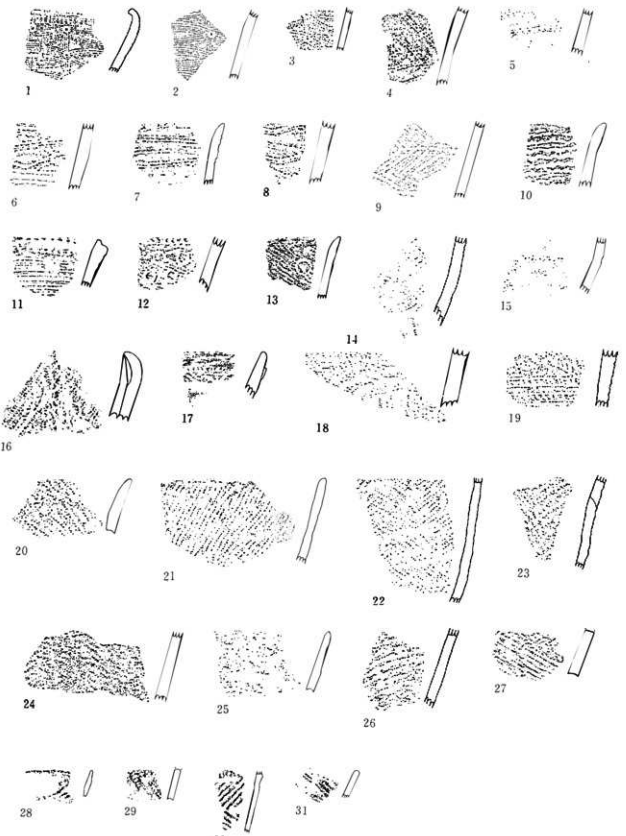


第145図　釈迦堂Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－45（1：80）

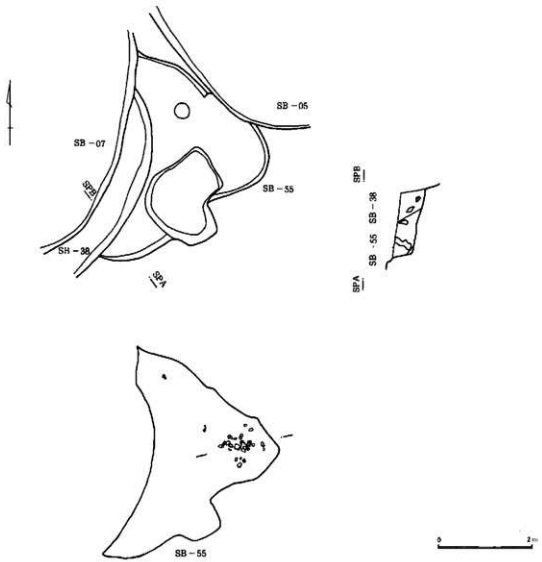
Ｓ－Ⅰ区　ＳＢ－55

ＳＢ－05とＳＢ－28の間にあり、ＳＫ－19、20、21が重複している。ことにＳＫ－21は貯蔵穴であり、床面を掘り貫いている。これらの土坑を清掃中に遺物の分布を知り、プラン確認を行ったところ、図のようなプランを確認するに至ったのである。

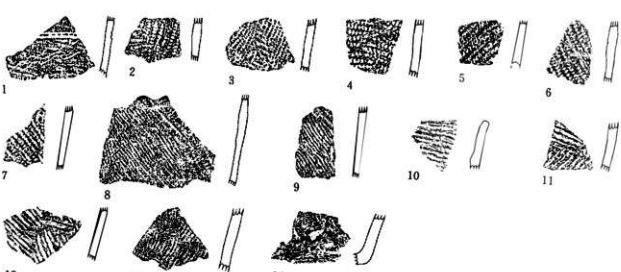
出土遺物は、釈迦堂Ｚ３式である。遺物が小量で全体像は不明だが、全縄文の土器が多い。石器は礫器が１、黒曜石22ｇ、水晶20ｇである。



第146図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－45出土土器



第147図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－55（1：80）



第148図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－55出土土器

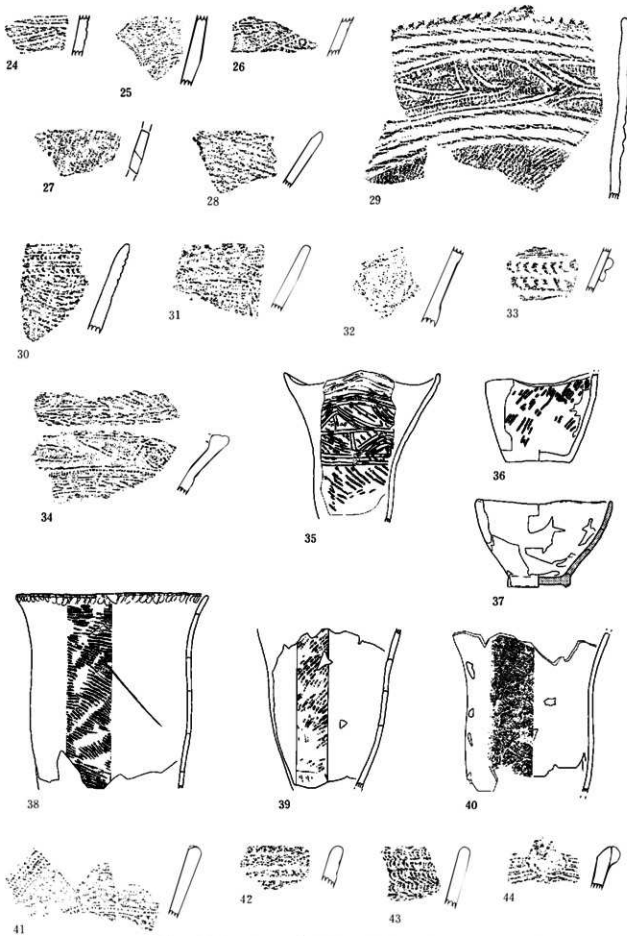
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
57	148	1		2－1	口辺部無文帯をもち、胴部との境に押引文　胴部に縦縄文とＲＬ縄文			
		2		2－1	ＬＲとＲＬ			
		3		2－1	ＬＲとＲＬ			
		4		2－1	ＬＲ			
		5		2－1	ＬＲ			
		6		2－1	ＲＬ			
		7		2－1	ＬＲ			
		8		2－1	０段が不明である。故意に縄の繊維の方向や節を消している。			
		9		2－1	ＲＲ			
		10		2－1	ＲＲ			
		11		2－1	ＬＬとＲＲ			
		12		2－1	ＲＲ			
		13		2－1	ＲＲ			
		14		2－1	底部			

第 2 節　前期の土坑出土土器

S－1　前期の土坑

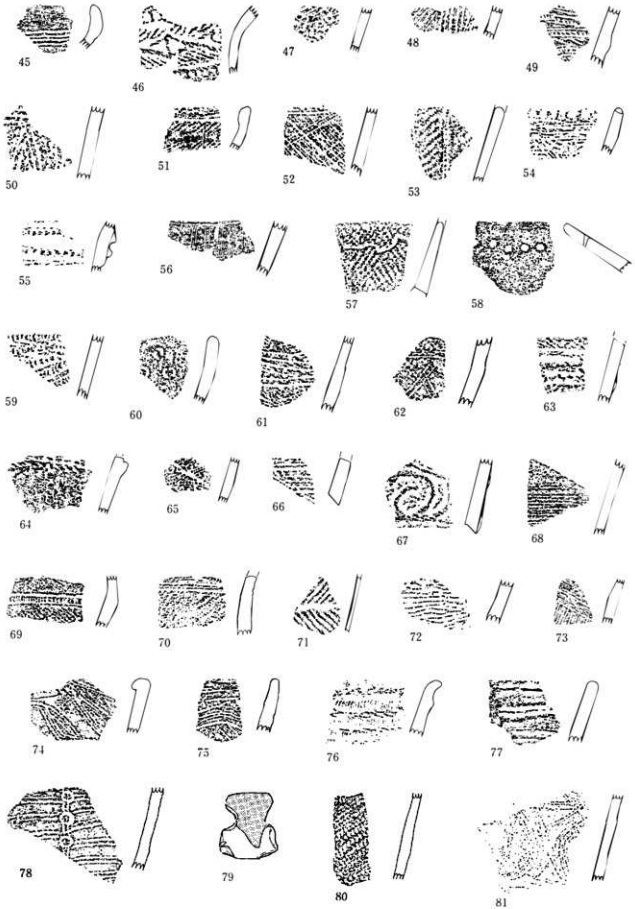
図版	第図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
58	149	1	SK－13	2－3－b				
		2	SK－14	2－2－c	無文地に押引文と縄文			
		3	SK－31	2				
		4	SK－34	2－2－e				
		5	SK－34	2－2－e				
		6	SK－34	2－2－e				
		7	SK－34	2－3－c				
		8	SK－34	2－3－c				
43		9	SK－41	2－4	諸磯c式			
		10	SK－58	2－3－a				
44		11	SK－73	2－1	LRとRL			
		12	SK－76	2－6－e	近畿東海系土器　凸帯文土器　北白川下層Ⅱc式			
		13	SK－81	2－5	関東系土器			
		14	SK－83	2－3－b	浮線文土器			
		15	SK－83　№2	2－3－a	巾広爪形文土器			
		16	SK－83　№37	2・3・a・b	29と同一か			
		17	SK－83　№10	2－1	平行沈線と平行降帯上押引文			
		18	SK－83　№32	2－3－a	口辺部に木の葉状入組文			
		19	№24	2－3－a	縄文地に平行沈線文			
		20	SB－12（3、12、19、30、58） SK－89（12、21）	2－3－b	浮線文土器　RLの縄文地に口辺部は玉抱き三叉状浮線文			
		21	SB－12（3、12、19、30、58） SK－89（12、21）	2－3－b	口辺部は無文地　胴部はRLとLRの羽状縄文上拡底部に逆位に埋設されていた。			
		22	№39	2－6	近畿東海系土器			
		23		2－6	近畿東海系土器			
	150	24	SK－85	2－3－c	縄文地に平行沈線			
		25	SK－85	2－3－c	縄文地に平行沈線			
		26	SK－89	2－3－c	縄文地に平行沈線			
		27	SK－89	2－2or3	縄文地に平行沈線			
		28	SK－89	2－2or3				
		29	№19、U－19	2・3・a・b	口縁に刻目、口辺に浮線文、木の葉状入組文の中に爪形文　浮線文縄文LR			
		30	№19、U－19	2－3－a	巾広爪形文			
		31	№19、U－19	2－3－a	巾広爪形文			
		32	№19、U－19	2－3－a	巾広爪形文			
		33	№19、U－19	2－2－a	降帯上に大きな爪形文			
		34	№19、U－19	2・3・a・c	口辺部に木の葉状入組文に爪形文を加え、刻目降帯あり浅鉢か？			
		35	№19、U－19	2－3－c	LRの縄文地に平行沈線文			
		36	SK－102	2－1	LRの縄文			
		37	SK－130	2－5	関東系土器　無文、高台が付く			
		38	SK－103 SB－13　№13	2－2	口縁部に押引文RLの縄文、ミガキは良好			
		39	SK－103	2－2	LR			
		40	SK－137	2－2	RL　38、39、40とも諸磯a式であろう。			
		41	SK－141	2－2－c	無文地に爪形文			
		42	SK－141	2－3－a				
		43	SK－141	2－3－a	巾広形文			

第149図　釈迦堂Ｓ－１区　前期ＳＫ出土土器（１）（11、13、20、21は１：６）[23]



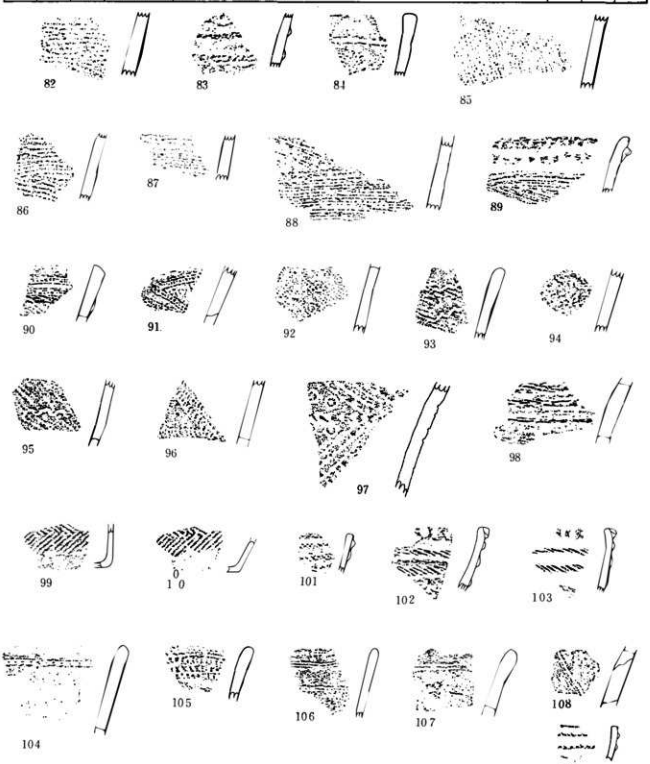
第150図　釈迦堂S－Ⅰ区　前期SK出土土器（2）（35～40は1：6）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	150	44	SK−141	2−2−a	勝坂b式特有の把手			
	151	45	SK−141	2−2−e	無文地に平行沈線文			
		46	SK−141	2−6	近畿東海系土器　LRとRLの羽状縄文地の上に凸帯文			
		47	SK−141	2−2	円形竹管文			
		48	SK−141					
		49	SK−141	2−2−c	平行沈線間爪形文			
		50−53	SK−143		前期の土器ではなく中期初頭のもの			
		54	SK−144	2−2−a	口縁部に刻目、口辺に沈線文			
		55	SK−144	2−2−a	隆帯上爪形文			
		56	SK−144		中期五領ヶ台式			
		57	SK−145	2−2−e	LRとRLに結節文			
		58	SK−146	2−3−e	有孔土器			
		59	SK−146	2−3−a	巾広爪形文			
		60	SK−146	2−3	半截竹管による円形竹管文			
		61	SK−146	2−3−c	縄文地に平行沈線			
		62	SK−146	2−2−e	縄文地に平行沈線			
		63	SK−147	2−3−b				
		64	SK−147	2−3−b	円形竹管文			
		65	SK−147	2−2	爪形文と円形竹管文			
		66	SK−147	2−2−c	平行沈線文			
		67	SK−147	2−2−b	浮線文			
		68	SK−149	2−3−c	集合沈線			
		69	SK−149	2−2−c	縄文帯と無文帯の境に爪形文			
		70	SK−204	2−2−e	縄文地LR			
		71	SK−218	2−6	近畿東海系土器　RLとLRの羽状縄文　O段多条			
		72	SK−222	2−1	無節Lの縄文			
		73	SK−222		中期五領ヶ台式			
		74	SK−222	2−3−c	木の葉状入組文			
		75	SK−223	2−3−c	縄文地に平行沈線			
		76	SK−223、224	2−3−a	巾広爪形文と隆帯上刻目			
		77	SK−227	2−3−b	浮線文			
		78	SK−227	2−2−c	無文地に幼骨文と円形竹管文			
		79	SK−227		土偶　前期の土偶　SB−05と接合			
		80	SK−228	2−2 or 3	LRの縄文			
		81	SK−238	2−3−c	縄文地に平行沈線で文様を描く。			
	152	82	SK−240	2−1	縄文			
		83	SK−240	2−3−b	浮線文			
		84	SK−240	2−2	縄文　R			
		85	SK−240	2−2 or 3	縄文			
		86	SK−240	2−3−c	縄文地に平行沈線			
		87	SK−241	2−3−c	縄文地に平行沈線			
		88	SK−242 №3	2−2−a	集合沈線による菱形文			
		89	SK−242 №14	2−2−a	二重口縁に押引文その下に菱形文を描く			
		90	SK−242	2−3−a	爪形文と隆帯上刻目			
		91	SK−242	2−2−c	木の葉状入組文			
		92	SK−242	2−2 or 3	縄文地RLに円形竹管文			
		93	SK−242 №14	2−2 or 3	縄文と結節文			
		94	SK−242	2−2 or 3	縄文と結節文			
		95	SK−242	2−2 or 3	縄文と結節文			
		96	SK−242	2−3−a	巾広爪形文			
		97	SK−242 №4	2−3−a	巾広爪形文に円形竹管文			
		98	SK−242 №6	2−3−b	浮線文			
		99	SK−242	2−6	近畿東海系土器			
		100	SK−242	2−6	近畿東海系土器　LRとRLの羽状縄文O段3条オコゲの付着あり			



第151図　釈迦堂S－Ⅰ区　前期ＳＫ出土土器（３）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
	152	101	SK−242	2−6−e	近畿東海系土器 凸帯文			
		102	SK−242 No11	2−6−e	近畿東海系土器 凸帯文			
		103	SK−242	2−6−e	近畿東海系土器 凸帯文			
		104	SK−242	2−2−c	無文地に押引文			
		105	SK−242	2−2−c				
		106	SK−242	2−2−c	平行沈線文			
		107	SK−242	2−2−c	平行沈線文			
		108	SK−242	2−2−c	平行沈線文			
		109	SK−242	2−6	近畿東海系土器			



第152図 釈迦堂S−I区 前期SK出土土器（4）

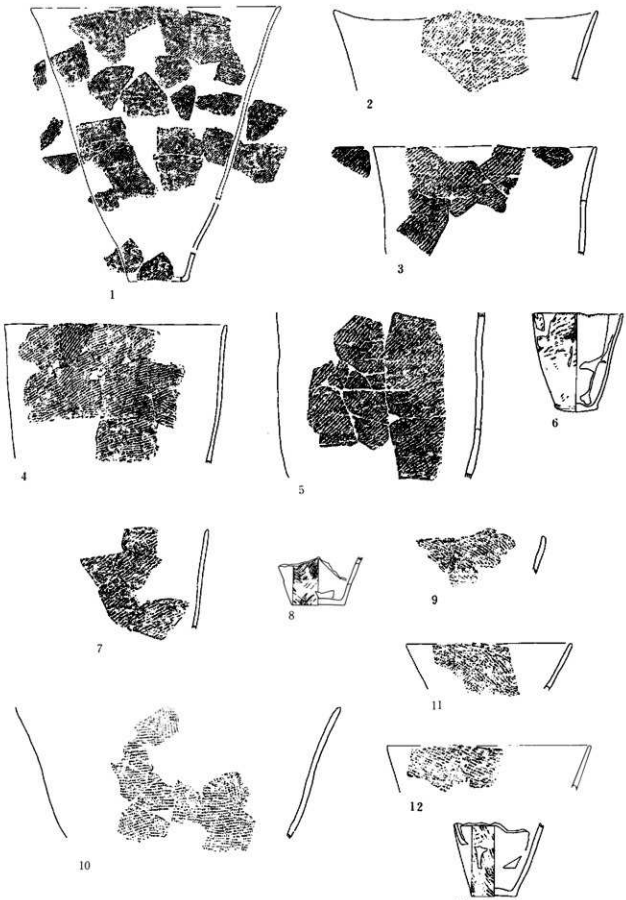
第 3 節　前期のグリッド出土土器

釈迦堂Ｚ３式
黒浜式併行

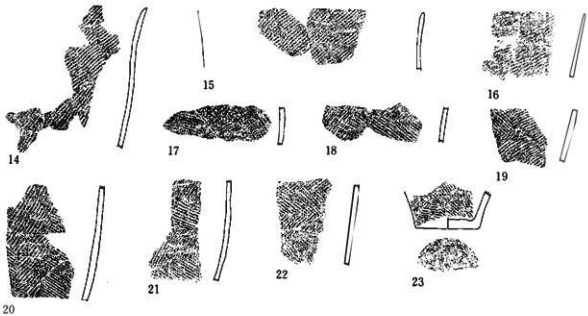
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
57	153	1	N−19	2−1	LLの無節縄文			
58		2	T−21№8,9,10	2−1	LLの無節縄文			
		3	L−21№8,9,10	2−1	LLの無節縄文　指頭圧痕を残す。			
		4	N−19	2−1	LLの無節縄文　ミガキない砂粒が目立			
		5	T−21 №8	2−1	LLの無節縄文			
		6	R−22	2−1	LLの無節縄文			
		7	K−22	2−1	LLの無節縄文			
		8	V−19 №1	2−1	LLとRRか			
		9	N−16	2−1	RL			
		10	C−25	2−1	LR			
		11	N−19	2−1	LRとRL			
		12	Q−17	2−1	LR			
		13	SB−35 №1	2−1	LRとRL			
	154	14	T−22 №11	2−1	LR			
		15	T−21 №8	2−1	LR			
		16	T−20	2−1	LRか			
		17	U−21	2−1	LRとRL			
		18	T−17	2−1	LRとRL			
		19	T−20	2−1	LLとRRであろう。			
		20	U−23、22	2−1	LRとRL			
		21	T−17	2−1	LRとRL			
		22	T−17、18	2−1	LRとRL			
		23	T−20	2−1	LRとRL　底部			

諸磯ａ～ｂ式

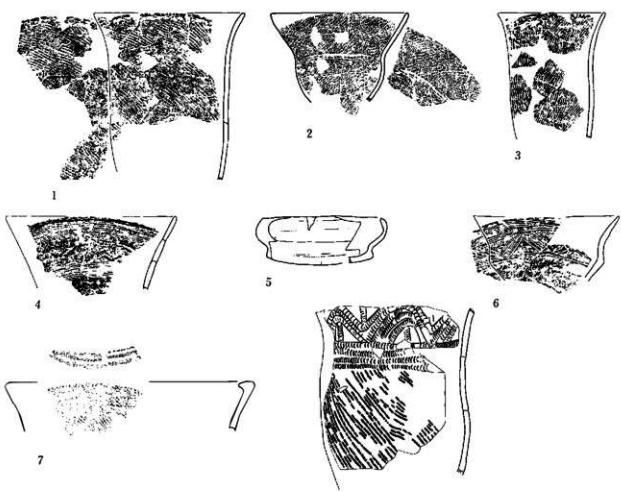
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
60	155	1	K−22 №8	2−2−e	RL　縄文に繊維文　口縁部刻目、ミガキ良好			
		2	SB−47 №80	2−2−c	LRの縄文を施し、頸部の無文帯は左引きの押し引き文			
		3	V−25	2−3−d	縦の縄文			
		4	O−23	2−3−c	無文地に沈線文			
		5	P−3 №4	2−3−e	浅鉢			
		6	O−20	2−3−c	頸部に連続三角文			
		7	S−28	2−2−e	LR			
		8	SB−33	2−3−a	口辺部に巾広爪形文　胴部にRL			
	156	9	T−19	2−2−c	口辺部無文帯、胴部縄文帯、口縁と頸部に爪形文、円形竹管文　典型的な諸磯ａ式 RL			
		10	P−26	2−3−c	木の葉状入組文　RL			
		11	U−21	2−2or3	口辺部に木の葉状入組文帯を持つ　RL			
		12	P−26	2−3−c	木の葉状入組文と隆帯刻目を持つ。			
		13	P−26	2−3−c	4と同一か			
		14	P−25	2−2or3	木の葉状入組文			
		15	T−22	2−2or3	木の葉状入組文			
		16	O−23	2−3−a	木の葉状入組文　口辺部に三角形文と刻目隆帯を持つ			
		17	P−25	2−3−a	木の葉状入組文　口辺部に刻目隆帯			
		18	P−21	2−3−a	浅鉢　無文地に三角形磨消縄文			
		19	P−25	2−3−a	浅鉢　無文地に三角形磨消縄文			
		20	P−17	2−3−a	巾広爪形文			
		21	N−19	2−2−c	無文地に玉抱き三叉状文を爪形文で描いている			



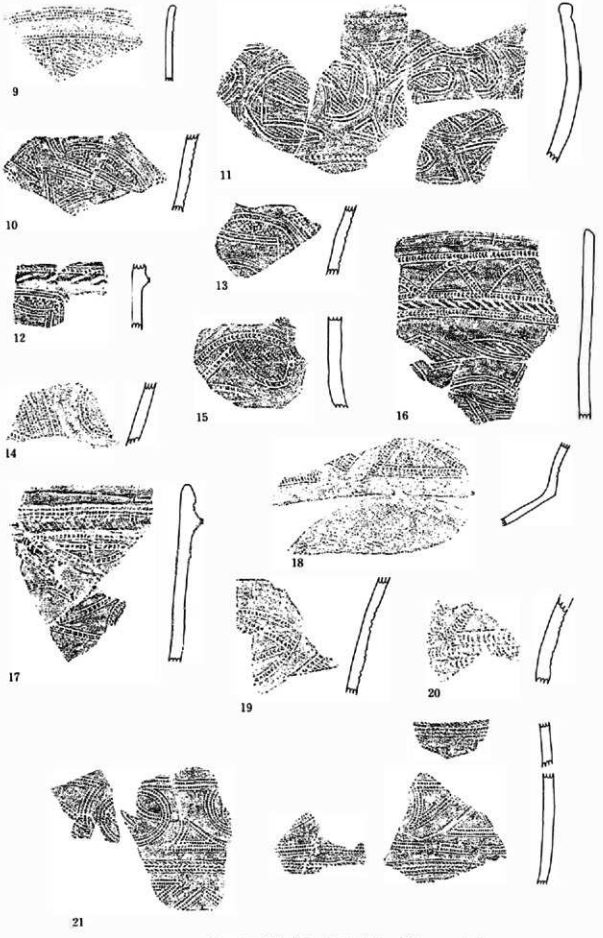
第153図　釈迦堂S－I区　前期の土器　　(1)　(1～13は1：6)



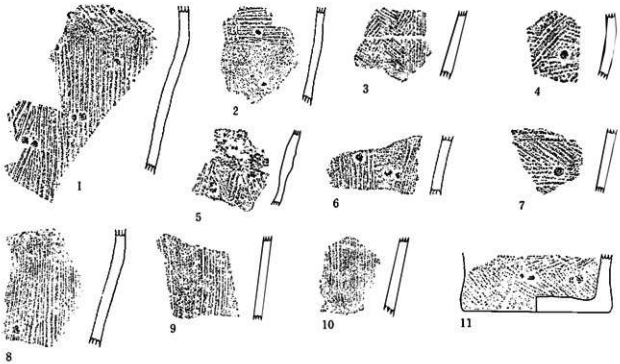
第154図　釈迦堂S－I区　前期の土器　　（2）（14～23は1：6）



第155図　釈迦堂S－I区　前期の土器　（3）（1～8は1：6）



第156図　釈迦堂S－I区　前期の土器　（4）



第157図　釈迦堂S－Ⅰ区　前期の土器　　(5)

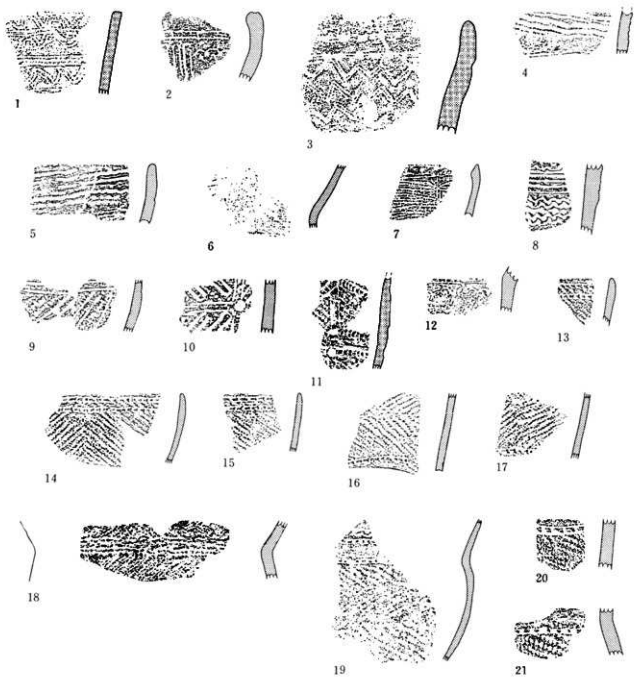
諸磯ｃ式

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分期	文様	高さ	容量ℓ	備考
61	157	1	O－22	2－4	条線地円形浮文を付ける。ほとんどまとまって出土している。			
		2	O－22	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		3	O－22	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		4	O－21	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		5	SB－06	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		6	Q－20	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		7	O－21	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		8	O－22	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		9	O－21	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		10	O－21	2－4	条線地円形浮文を付ける。			
		11	P－17	2－4	条線地円形浮文を付ける。			

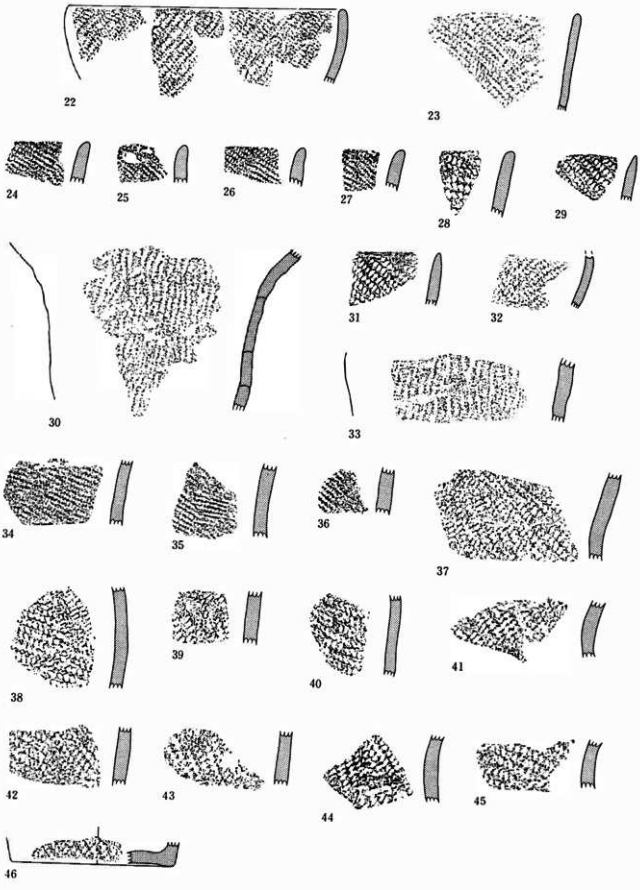
関東系土器
黒浜式

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分期	文様	高さ	容量ℓ	備考
	158	1	SB－pit12	2－5	竹管文を有するもの、波状文が見られる。			
		2	SB－47	2－5	平行沈線文とコンパス文			
		3	M－18	2－5	鋸歯状波状文			
		4	SB－23	2－5	波状沈線			
		5	N－26	2－5	波状沈線			
		6	SB－03	2－5	SB－45の1とまったく同じで鋸歯状工具による助骨文			
		7	T－19	2－5	助骨文			
		8	S－24	2－5	コンパス文			
		9	L 13、SB·07 －1	2－5	LR			
		10	M 6	2－5	LR			
		11		2－5				
		12	S－20	2－5	線行			
		13	L－16	2－5	縄文地に平行と爪形文			
		14	N－19	2－5	縄文地に平行線と爪文　LRとRL			

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		15	K−20	2−5	縄文地に平行線と爪形文 RL			
		16	L−22	2−5	縄文地に平行線と爪形文 LRとRL			
		17	S−20	2−5	縄文地に平行線と爪形文 LR			
		18	K−20	2−5	縄文地に平行線と爪形文 LR			
		19	M−17	2−5	縄文帯と無文帯の地に爪形文 LRとRL			
		20	S−16	2−5	縄文帯 RL			
		21	M−19	2−5	縄文帯 RL			
63	159	22	SB-02 V−22	2−5	22〜6までの、縄文を有するものはLRで○段多条か？			
			V−18、U−22					

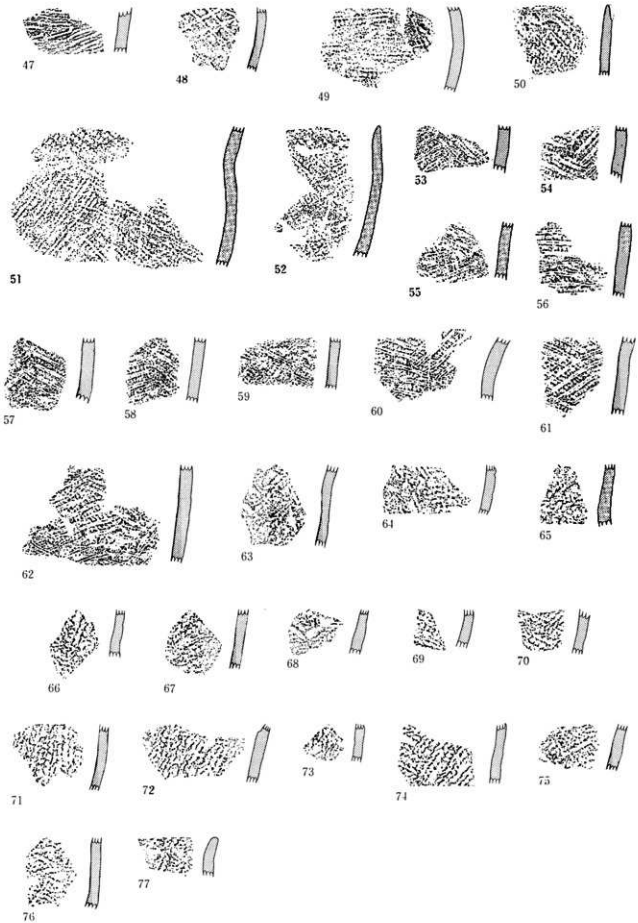


第158図　釈迦堂S−1区　前期の土器　（6）

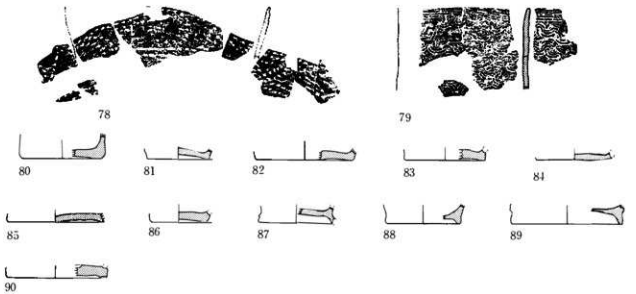


第159図　釈迦堂S－I区　前期の土器　（7）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		23	S−16	2−5	RLとLRの羽状縄文			
		24	K−22	2−5	RL			
		25	L−18	2−5	RL			
		26	L−22	2−5	RL			
		27	L−22	2−5	RL			
		28	S−17	2−5	RL			
		29	K−19	2−5	RL			
		30	K−21	2−5	LR			
		31	U−22	2−5	RL			
		32	L−22	2−5	RLとLR			
		33	S−19	2−5	LR			
		34	L−17	2−5	RL			
		35	K−19	2−5	RL			
		36	S−23	2−5	LR			
		37	M−23	2−5	RL			
		38	L−24	2−5	RL			
		39	M−23	2−5	RL			
		40	T−23	2−5	RL			
		41	L−23、N−17	2−5	RL			
		42	J−21	2−5	RL			
		43	O−16	2−5	RL			
		44	P−15	2−5	RL 綾杉文			
		45	I−19	2−5	RL			
		46	S−10	2−5	RL 底部			
63	160	47	L−16	2−5	横軸と思われる。Rを巻いたもの。47〜77までは結状帯による施文である。			
		48	U−20	2−5	縄軸か格子目状に巻いた網目状撚糸文			
		49	M−21	2−5	LRにrを巻いたもの（左巻き）			
		50	R−18	2−5	RLにrを巻いたもの（右巻き）			
		51	K−21	2−5	LRにrとRLにrをそれぞれ巻いたもの（左巻き）			
		52	K−21	2−5	LRにrとRLにrをそれぞれ巻いたもの			
		53	S−19	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		54	O−20	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		55	R−19	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		56	S K−04、R−20	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		57	R−19	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		58	R−19	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		59	R−20	2−5	1段の縄に0段の縄2本を巻いたもの Lにrを2本			
		60	P−19	2−5	Rにrを2本L巻き			
		61	P−22	2−5	Lにrを R巻き			
		62	P−22、R−19	2−5	Rにrを L巻き			
		63	P−22	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		64	P−16	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		65	T−17、18	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		66	S−17	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		67	Q−17	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		68	J−19	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		69	R−18	2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		70		2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		71		2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		72		2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			
		73		2−5	2段の縄に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の縄軸は見えない。			



第160図　釈迦堂S－Ⅰ区　前期の土器　（8）



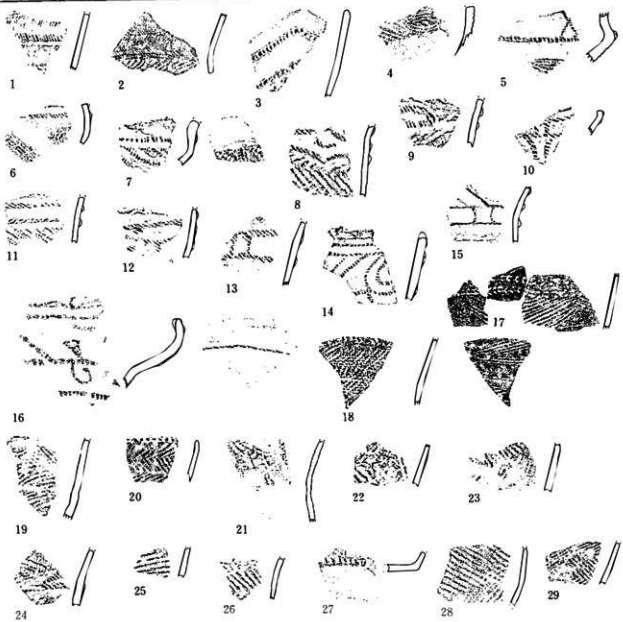
第161図　釈迦堂S－I区　前期の土器　　（9）（78～90は1：6）

図版	挿図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		74		2－5	2段の綱に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の綱軸は見えない。			
		75		2－5	2段の綱に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の綱軸は見えない。			
		76		2－5	2段の綱に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の綱軸は見えない。			
		77		2－5	2段の綱に1段のLとRを並べて巻いたもの。2段の綱軸は見えない。			
	161	78	R－18、SB－03、SB－13、L－19SB－17、18、SB－06	2－5	無文地に刺点			
		79	T－20、SB－12 №151	2－5	粗雑なコンパス文			
		80	S－16	2－5	上げ底			
		81	S－20	2－5	上げ底			
		82	U－20	2－5	上げ底			
		83	M－24、R－20	2－5	上げ底			
		84	Q－18	2－5	上げ底			
		85	SB－06№103	2－5	上げ底			
		86	K－24	2－5	上げ底			
		87	SB－05№288	2－5	高台付である。			
		88	SB－07	2－5	高台付である。			
		89	L－24	2－5	高台付である。			
		90	O－16	2－5	高台付である。			

近畿東海系土器　北白川下層式

図版	挿図	掲図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
64	162	1	G－19	2－6－c	近畿東海系土器　ジュロ状文			
		2	N－19	2－6－c	近畿東海系土器　ジュロ状文			
		3	O－21	2－6－d	爪形文			
		4	Q－23	2－6－d	胎土a式の木の葉状入組文　赤彩			
		5	N－26	2－6－e	凸帯と木の葉状入組文を持つ。表裏とも赤彩			
		6	N－23	2－6－e	凸帯と木の葉状入組文を持つ。赤彩			
		7	K－17	2－6－e	7～16までは凸帯文系土器			
		8	SB－47	2－6－e	RLとLRの羽状縄文　O段多条と思われる。			
		9	T－21	2－6－e	RLとLRの羽状縄文			
		10	N－23	2－6－e	赤彩			
		11	K－26	2－6－e				

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
		12	S−22	2−6−e	赤彩			
		13	V−18	2−6−e				
		14	M−26	2−6−e				
		15	T−19	2−6−e	赤彩			
		16	Q−22	2−6−e	表裏とも赤彩 粘土は北白川系			
		17	U−20、W−20	2−6−e	爪形文と半截竹管による沈線をもつ、型式不明			
		18	U−23	2−6−e	LRの絡文と裏面に条痕、SB−06で口辺部出土			
		19	N−24	2−6−e	LとRの羽状縄文で、在地系の搬手土器			
		20	K−22	2−6−e	LRとRLの羽状縄文			
		21	S−18	2−6−e				
		22	SB−47	2−6−e	RLとLRの菱形縄文			
		23	P−22	2−6−e				
		24	T−17	2−6−e	縄文地に凸帯が付く。			
		25	SB−40	2−6−e	RLとLRの羽状縄文			
		26	SB−40	2−6−e	RLとLRの羽状縄文			
		27	Q−27	2−6−e	底部 丸底か押引文がある。			
		28	SK−07	2−6−e	O段3条のRLとLR			
		29	SK−65	2−6−e	RLとLR			



第162図 釈迦堂S−1区 前期の土器 (10)

第5章　縄文時代中期

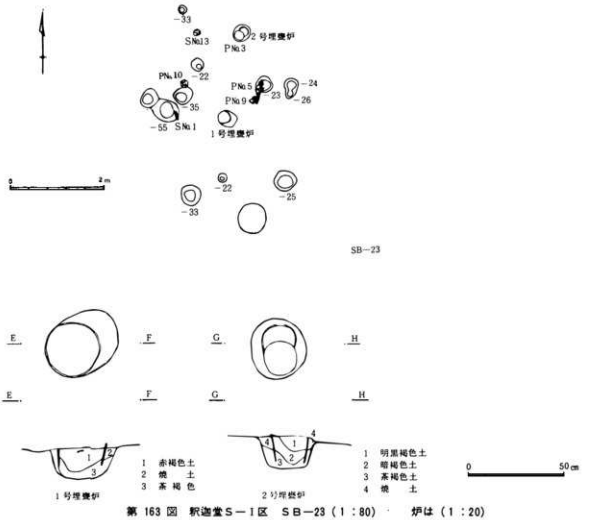
第 1 節　中期の住居と出土遺物

S－Ⅰ区　SB－23

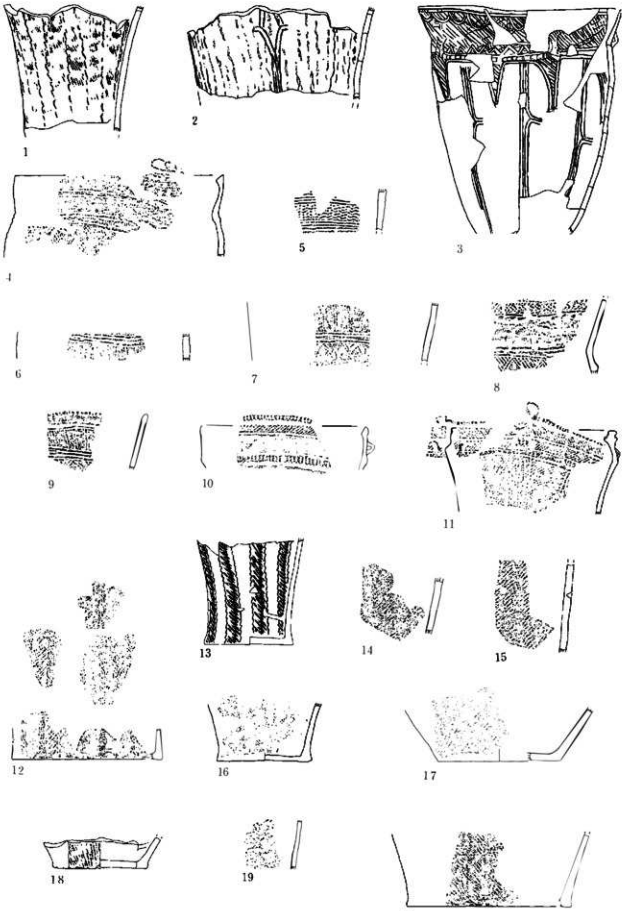
黒色土層中に掘り込まれた住居址で、掘り込みプランは不明である。またSK－97、120も掘り込まれている。したがって柱穴も確定しがたい。

出土遺物は埋甕炉2個体をはじめとして、20点の土器と他に、石鏃6、ピエス・エスキーユ2、石匕1、石皿片1、磨斧1、打斧15、礫器5である。他に黒曜石99g、水晶28gがある。

五領ケ台式土器は、本来集合沈線文土器は含まないものと考えるが、ここではS－Ⅱ区の状況も考えて、この土器もあえて含めて説明する。なお、この住居の時期はほぼ五領ケ台式の中ごろということになろうか。



第 163 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－23（1：80）・炉は（1：20）



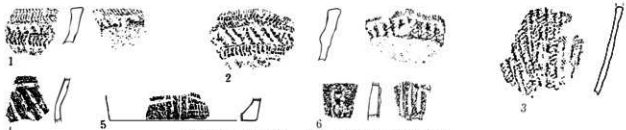
第164図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－23出土土器（1～20は1：6）

SB−23（五領ケ台）

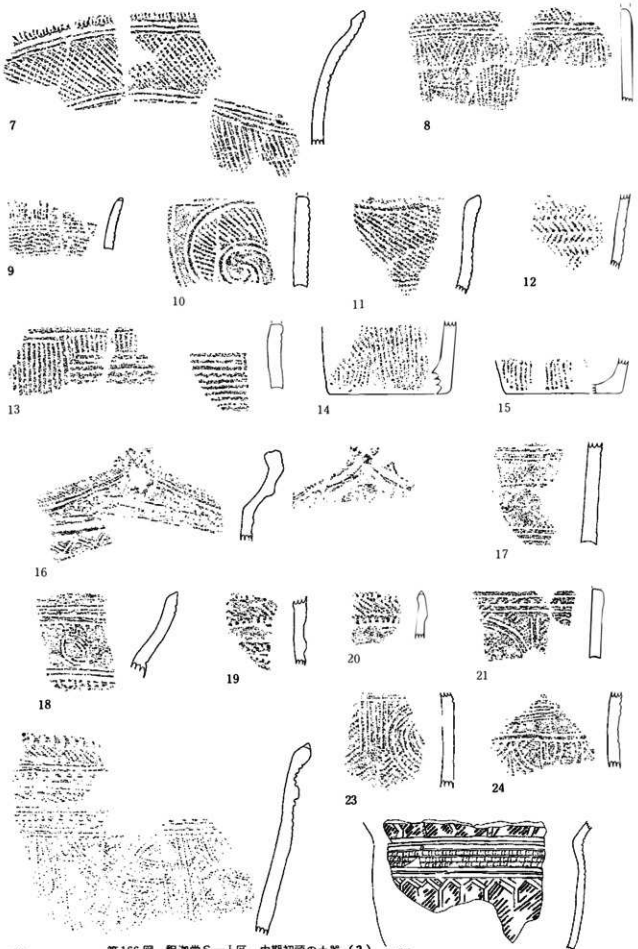
図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
65	164	1	埋甕炉1	3−1−g	結節無節縄文			
		2	埋甕炉2	3−1−g	結節縄文が浅く施文され、その上に半截竹管沈線文			
		3	No.17　SB−16	3−1−b	口辺部に集合沈線を地文として、弧線文等を描き、胴部は無文地に半截竹管で沈線文を描いている。			
		4	No.23、No.24	3−1−c	口辺部に細線文がある。			
		5	No.28	3−1−b				
		6		3−1−d				
		7	No.2	3−1−e	地文は0段3条のRL			
		8	No.21	3−1−b				
		9	No.27	3−1−d	口辺部のみ縄文			
		10	No.7	3−1−e	口辺部　縄文LR			
		11	No.10	3−1−e	口辺部に縄文を施文し、沈線と截断をしている。			
		12	No.14	3−1−g	縄文　RL			
		13	No.1	3−1−g				
		14	No.4	3−1−g				
		15		3−1−g				
		16	No.16	3−1−g				
		17	No.3	3−1−h	縄文　RL			
		18	No.14	3−1−h				
		19		3−1−j				
		20	No.24	3−1−h	縄文　RL			

中期初頭の土器

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
66	165	1	I−18	3−2	東海系土器　0段の3条のRL　鹿島式			
		2	I−19	3−2	東海系土器　0段の3条のRL　鹿島式			
		3	J−18	3−2	東海系土器　0段の3条のRL　貝殻背圧痕見られる。			
		4	R−23	3−2	東海系土器　北屋敷式と思われる。			
		5	M−17	5−2	底部			
		6	I−17	?	時期不明　口辺部で最の幅帯と口辺内側に沈線文			
	166	7	J−17	3−1−b	口縁部に浮線文が付く			
		8	O−23	3−1−b	集合沈線を区画した間隔を削りとっている。			
		9	SK−206	3−1−b	口縁部に浮線文			
		10	M−17	3−1−b	空白部を削り取っている。			
		11	O−17	3−1−b				
		12	T−20	3−1−b				
		13	K−17	3−1−b				
		14	S−20	3−1−b	底部			
		15	H−19	3−1−b	底部			
		16	K−17	3−1−c	口縁部の波頂部に動物様把手が付いている。			
		17	S−17	3−1−d				
		18	K−17	3−1−d				



第165図　駅遺堂S−I区　中期初頭の土器（1）



第166図　釈迦堂S－Ⅰ区　中期初頭の土器（2）

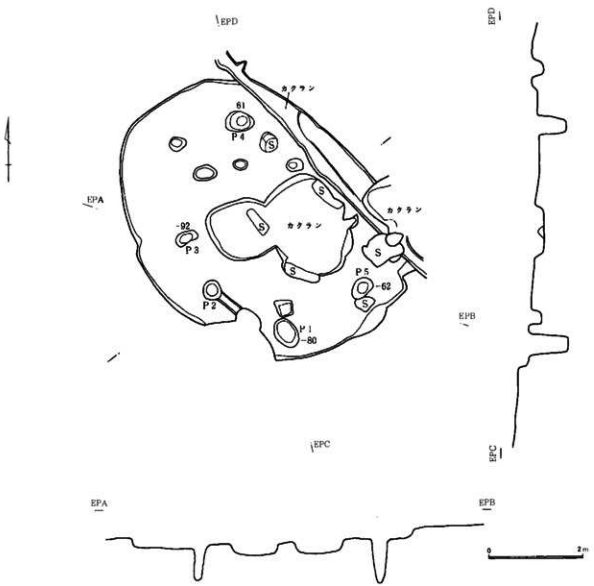
（22は1：6）

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	容量ℓ	備考
66		19	S B—07	3—1—d	口縁部に縄文			
		20	M—17	3—1—d	口縁部に縄文			
		21	I—17	3—1—e				
		22	S B—10 No.49	3—1—e	胴部に半截竹管による沈線文 R L			
		23	S B—04	3—1—e	胴部に半截竹管による沈線文 R L			
		24	J—18	3—1—e	胴部に半截竹管による沈線文 R L			
		25	U—19	3—1—e	胴部に半截竹管による沈線文 R L			

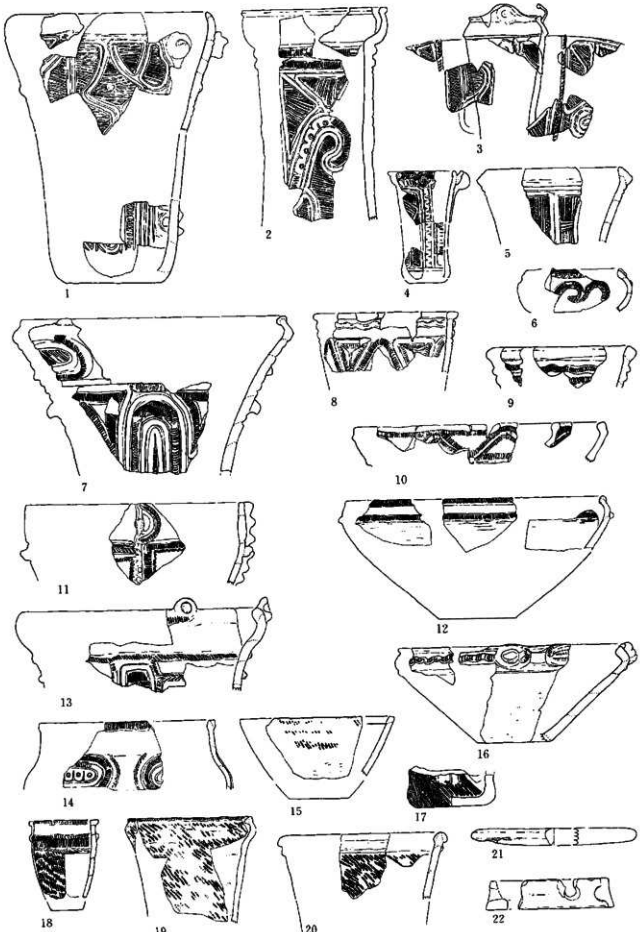
S—I区SB—01

灌水管と農耕ピットのため、住居の北東側と、炉の部分を失っている。柱穴はこの時期に一般的である6個である。プランは長径660cm×短径500cm。土器は細片が多く、撹乱が著しいことを物語っている。石器は石鏃10、石匕2、磨斧2、ドリル4、打斧40、磨石3、玉石1、黒曜石163g、水晶59gである。打斧の量がやや多い。他に土偶が4点出土している。

出土遺物から、藤内式のやや新しい部分に属する住居としておきたいと思う。なおSB—01に近接したW—20のグリッドから図224—1の土器が出土しており、これを埋甕炉とした住居址の存在も考えられる。



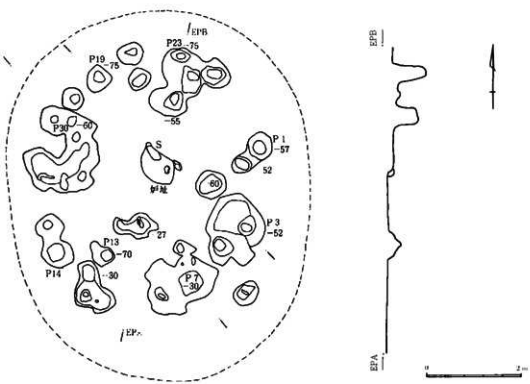
第167図 釈迦堂S—I区 SB—01（1：80）



第168図　釈迦堂S－1区　SB－01出土土器　（1：6）

SB—01

図版	挿図	挿図No.	出土地点	分類	文様	高さ	胎土	備考
12	168	1		6—1	口辺部無文帯 胴部縦区画文			
		2		6—1	口辺部無文帯 胴部縦区画文			
		3		6—1	口辺部に把手を有するか、ほとんど1と2と同じ文様構成			No.1、23、35、37、60、T—19
		4		6—1	口辺部にまで文様あり			
		5		6—1	1～3と同じ文様構成			
		6		6	口辺部			
		7		6—5or1				
		8		6	口辺部に波状降帯、胴部にキャタピラ文と三叉文をもった三角区画帯を持ち、下部は縄文帯となるのであろう。			
		9		6				
		10		5—1	口辺部に降帯による三角区画帯を持ち降帯幅にキャタピラ文を加飾している。			
		11		6	キャタピラ文に三角押文がある。			
		12		6—7				
		13		6—1？				
		14		6—5	胴部に楕円区画帯をもつ。			
		15		6—4—a	斜縄文			
		16		6—7	口辺部に波状降帯および楕円区画文を持つ			
		17		6—4—b				
		18		6—4—b	口辺部と胴部の境にキャタピラ文と波状沈線を施している。			
		19		6—4—a	縄文			
		20		6—4—b	縄文			
		21		6—8	脚なし台形土器 盤状台形土器			
		22		6—8	台形土器の脚部			



第 169 図　釈迦堂S－Ⅰ区　SB－04（1：80）